

営農課長

業務資料 No. 061

食肉：南米と世界市場

1969・1

海外移住事業団

国際協力事業団

受入 月日	'84. 4. 21	700
		87.8
登録No.	03681	EM

ま え が き

本資料は食肉とその加工品の南米を中心とした世界市場を知るために国際市場コンサルタントKKに委託し、調査したものである。

世界の食肉需要の動向は、FAOの予測が示しているように供給不足の傾向がつつくと思われる。南米移住地において畜産をとり入れつつある現在、世界の需給状況を知る事は意義ある事と思うので現地関係支部においても、これが活用をはかられたい。

なお、別添として南米主要国の主要輸出入業者リストを集録した。

1969年1月

海外移住事業団業務第二部長

白 石 健 次

食肉：南米と世界市場

は し が き

この報告書は世界の食肉需給を調査し、南米の移住地営農指導上の資料となるように総合したものであります。南米四カ国との関係から世界の食肉需給の今後の見通しを立てるために必要な情報を網羅しているものと確信します。

内容を次の各章にわけて報告いたします。

- 第1章 所 見
- 第2章 ポリビア
- 第3章 パラガイ
- 第4章 アルゼンチン
- 第5章 ブラジル
- 第6章 生産と消費
- 第7章 貿易と流通

昭和44年1月

国際市場コンサルタント株式会社

食肉：南米と世界市場

目 次

第1章 所 見	1 頁
第1節 ホリビア	1
第2節 パラガイ	5
第3節 アルゼンチン	7
第4節 ブラジル	9
第5節 世界の需給予測	12
第6節 消費性向	14
第7節 加工肉	15
第8節 貿易と流通	19
第9節 南米畜産	21
第10節 価格変動	23
第2章 ホリビア	25 頁
1. 概 況	
2. 食肉の消費，生産及び輸出入	
3. 農取省にて	
4. ホリビアの牧場主	
5. 日系二世大牧場経営への夢	
6. 市営屠場にて	
7. 公設市場にて	
8. 移住地と米作	
9. 食肉と移住地に関する情報	

10.	その他	
11.	統計	39頁
第3章	パラガイ	45頁
1.	OOPACAL	
2.	INPACAL	
3.	外資系フリゴリファイコ L社	
4.	外資系フリゴリファイコ	
5.	PAMPA	
6.	その他	
7.	牧畜関係資料	
8.	統計	54頁
第4章	アルゼンチン	63頁
1.	アルゼンチン国内消費と輸出	
2.	輸出の詳細	
3.	食肉輸出か国内消費か	
4.	国営食肉委員会	
5.	フリゴリファイコ CAP	
6.	食肉商協同組合	
7.	CAP 横 ストックヤードにて	
8.	フリゴリファイコ A&S	
9.	その他	
10.	アルゼンチン資料(統計)	81頁
第5章	ブラジル	105頁
1.	食肉生産の推移	
2.	食肉生産の内訳	

3. 輸 出
4. ブラジルウイルソン社
5. コチア産業組合
6. サンパウロ州政府農務局
7. ブラジル スイフト社
8. フリゴリ フィコ アリミート
9. ブラジル政府農産市場課
10. 市営市場における小売価格

第 6 章 生産と消費 ----- 129頁

- 第 1 節 全食肉 ----- 131
- 第 2 節 牛 肉 ----- 142
- 第 3 節 豚 肉 ----- 152
- 第 4 節 マトンとラム ----- 157
- 第 5 節 消費性向 ----- 164
- 第 6 節 1人当り消費量の推移 ----- 173
- 第 7 節 世界の食肉生産統計 (FAD) ----- 189

第 7 章 貿易と流通 ----- 197頁

- 第 1 節 食肉の貿易 ----- 198
- 第 2 節 アメリカ ----- 224
- 第 3 節 イギリス ----- 231
- 第 4 節 E E C 外 ----- 246
- 第 5 節 食肉マーケティング ----- 260

第 1 章 所 見

- 第 1 節 ホリビア
- 第 2 節 パラガイ
- 第 3 節 アルゼンチン
- 第 4 節 ブラジル
- 第 5 節 世界の需給予測
- 第 6 節 消費性向
- 第 7 節 加工肉
- 第 8 節 貿易と流通
- 第 9 節 南米畜産
- 第 10 節 価格変動

第1節 ポリビア

ポリビアの経済は交通難とのたたかいである。交通難によつて外国から孤立した閉鎖的経済圏を形成しているとも言える。国内においては交通難が地域毎に非能率な自給圏を作り上げる結果となつている。

「肉の問題」を国内の流通の両面からとらえた所見を次のようにまとめることができる。

(1) 地域内の流通

ポリビア西部山地にはアンデス山脈の山頂稜線をつなぐインカ以来の道路網があるにすぎない。

東部平地はアマゾン支流及び南下するラブラタの水源となる低地熱帯のジャングルである。そこにわれわれの日本人移住地がある。幅600キロ長さ1200キロ西北から東南にまたがるこの平坦地に国の経済の中心であつた西部山岳地帯より高能率な農牧場が成長することが予測される。

日本人による廉価な開拓地米作が山地インディオのジャガイモ作りを駆逐しているのは好例である。彼等をして、永年住みなれた山地を下り、東部平地の農牧開拓に移住させる程の経済的社会的影響をあたえたことだけでもこの事情が明瞭に証明される。高山斜面の農牧業から東部開拓平地の高能率農牧業に移行するにつれて東部の比重は重くなる。

また東部平地の中心地サンタクルスが採油とその関連事業によつてブームタウンの現象を呈している。採油を担当するのは米国ガルフ社である。精油施設建設と精油の経済全体にあたるイムパクトの相乗効果によつて道路網の拡大が急速に進展する筈である。

サンタクルスとわれわれの移住地をむすぶ道路が出来上り更にそのアスファルト舗装が完了したのは近々数年の出来事である。

それによつて移住地の農産品がサンタクルス市の需要と直結したその経済的効果は極めて大きかつた筈である。

移住地の肉の将来性は明るい。米作で流通技術上後手に廻つた苦い経験を生かし販売に対する前向きな姿勢に立つて肉牛牧畜を推進する価値がある。それはサンタクルスに自ら屠場冷凍施設を直営する程の市場上の意欲をもつ牧畜業となるべきであろう。

牛、豚、鶏そして卵の何れも地域内の流通に大きな希望がもてることは間違いない。サンタクルスの冷凍施設によつて地域需要に限らず更に西部山地、鈇山地帯とラパス、コチャバムバ等の都市に対する供給が安定化する。航空又はトラック輸送の何れも可能である。

(2) 国際的流通

住民はラパスの牛肉の値段が高いと云つて不平を述べている。それでもステーキ肉を例にとるならば小売値で1キロ約500円、アメリカの700円、日本の1000円に比べて問題にならない安値である。

ボリビアの牛肉はアメリカや日本の肉程の味をもたないことも事実でありまた非常に固い。2年から3年の間に肉をとるアメリカと5年もかけて成長するボリビアの牛肉が同質である筈がない。

肉が国際商品としての流動性に欠けるものであることは間違いないが、それにしても、これだけの価格差がありながら輸出先がないといふことはどういふことであろう。

第一に輸送難があげられる。海送するとすれば、陸路チリーを通過つてアメリカ港を経由しなければならない、ハンディーがつく。

第二に口蹄疫に対する各国の輸入禁止措置があげられる。また、品質、味に関するハンデイーも問題である。

第三に加工品の品質の悪さが上げられる。加工品ではボリビアの高所得階層が輸入品を消費している位である。

サンタクルスがわれわれ移住地の流通上の基地となつても直接陸路輸出出来る可能性はない。地域流通のような形でペルーに輸出されることは今までどおりであろう。しかし今後航空輸送が充分低廉になる時代を迎えれば南米内陸部がひとつの経済圏を構成することもあり得る。そしてサンタクルスもひとつの基地となつて直接国際的交易が実現する時が来るわけである。100トンも積載出来るようなジェット機輸送が相当コストの安い新しい輸送手段となる時は既に予定された事実となつている。航空輸送が将来ボリビアの交通難を解決する鍵のひとつとなる。

第2節 パラガイ

人口200万のパラガイ国にとって牧畜業は国内総生産の10%を占める基幹産業である。パラガイの総輸出金額の3分の1が牛肉とその加工品（コーンビーフ、肉エキス）によつて占められている。この国の輸出用屠殺数は過去10年間毎年約20%の増勢を続けている。肉牛の飼育数は1950年480万頭から1968年600万頭に増加した。

食肉の国内消費量は過去において何等顕著な増減を示していないので、今や輸出が国内消費の半分にも達する程になつた。

パラガイの基幹産業である牧畜生産の約3分の1を輸出しているという。

輸出はこの国の牧畜業に重要な意義を持つ。国内の価格維持のために輸出に安全弁としての役目を果してもらわなければならないからである。牧畜業（エスタンシヤ）の安定した利益を図るために国としてのあらゆる施策が敷かれている。

国内消費が増大しないのは国内価格とのバランスの上で輸出価格が支持される管理制度（制度としてあるか否かは別として）によるものといえよう。

パラガイ国内にある少数のフリゴリファイコ（パッキングプラント）が輸出を担当している。外資系のもはその資本の祖国を主たる市場として世界的に有利に販売することができる。また、国内資本によるフリゴリファイコと同様に国からの特典を得て有利な操業が出来るのはこのような会社の国際販売力が大切だからである。

国内消費の増減とは無関係に生産者がControl出来る売手市場を国内で創り出すことになる。国内は瘦性肉不足の状態である。

もつと深刻な肉不足の隣国ブラジルの需要を持つていながら、
の国境を越える移動を禁止するパラガイの法律がフリゴリフィコのコ
ントロールを重視する政策を裏書きするものと云える。生牛の不足の
状態が前提とならなければこのような法律は制定出来ない筈である。

エスタンシヤ（牧場）経営者が国の経済に主役を演ずるような輸出
政策の基本を理解出来る。そのようなエスタンシヤにとつて未解決の
大問題は肉牛の品種改良である。国際競争力をつけるためには、労働
賃金の安いこの国にとつては生産性の高い品種をもつことが最も重要
である。短期間に生育する健康な品種で大量の幼牛を安定して供給す
ることをのぞんでいる。

40乃至50頭以上のエスタンシヤは全国で1500ヶ所位と推定
される。このような幼牛供給の牧畜は日本人には適した業態でもある。
以上の所見を要約すると次のようにまとめることができる。

- (1) 日本を主市場としてもつことができれば、日本の資本で、パラガ
イのフリゴリフィコを經營することは歓迎されることであり、有利
な事業となる可能性が多い。
- (2) 何といてもエスタンシヤを經營することはパラガイ国の経済の
主役の部類に属することである。不利にはならない。
- (3) チャコ地方を中心とする既成エスタンシヤと競合するより、彼等
によい品種の幼牛を大量に安定して供給する牧畜を企業することは
有利である。
- (4) 肉牛の生産増加が相当あつても、輸出を安全弁とすれば容易に解
決されるというパラガイ独特の条件がある。パラガイの輸出価格はその気
になれば世界のどこの市場の価格とも競合できる弾力性をもっているからである

第3節 アルゼンチン

アルゼンチンは第2次世界大戦の期間中を通じて大繁栄の時代を経過している。日本の一人当り国民所得がアルゼンチンの水準を超えたのは極く最近のことであり、それまで永い間かなり高い水準の生活を享受して来た国である。その永い繁栄を通じて、アルゼンチンの基幹産業とも云える牧畜業が国の経済に占める基盤は強固である。牧畜業界の中心勢力は地方の牧畜地主（エスタンシャ）である。エスタンシャはアルゼンチンの食肉流通をコントロールするだけでなく、重要な輸出産業の主役として国政に対する発言力も強い筈である。

エスタンシャは資本の集中と市場の支配力の確立強化を進めて益々大型化しつつある。大型エスタンシャの牧畜生産性は高く、国際比価の立場からみても相当な競走力をもつものである。こんな環境にあつて小型牧畜業者の競走力が弱いであろうということは想像に難くない。

従つてもし小型牧畜で大勢に抗しようと思ふならば特にその技術を売る態様でなければ競走に勝てないであろう。牧畜で技術を売る業態とは幼牛の生育、種牛の生育等に分野を限定することである。特にアルゼンチン産生牛が近隣諸国チリー、ペルー、パラグワイ、ブラジル、に輸出されていることからみても幼牛育成がかなり好採算であることが分る。

南米牛の口蹄疫はなんといつてもその生肉の世界市場進出に致命的なハンディキャップである。世界の最大需要国となるべき米国向けの生肉輸出が皆無であることがこの事情を如実に物語っている。従来の最大顧客である歐洲に於いても英国等のように次第に輸入制限の動きを示すようになって来ていることも注目しなければならない。輸入してくれる歐洲に於いても南米産牛肉が堅くて不味であることには定評がある。このハンディキャップを克服するために幼牛が多く輸出される傾向があるこ

とも見逃がせない。

口蹄疫のハンディ克服のために米国向煮沸冷凍肉の輸出が始まった許りである。しかしこれは煮沸工程で生肉本来の外見と味を失うため相手国市場で加工肉の一つとして消費される道しかないのが欠点である。

アメリカの加工肉としてはTVディナー（冷凍ディナー）がその最大の需要先である。アルゼンチン牛肉の世界市場進出は当分の間加工肉に限られるものであろう。

大型エスタンシヤをのぞいて、成長をのぞめる牧畜業とは技術を売る牧畜業と云うことになるであらう。それは幼牛か種牛で勝負することになる。

第4節 ブラジル

「食肉の慢性的不足と価格上昇」の言葉が、あたかもブラジルの永年のインフレ、そのものの象徴であるようにブラジルのどこに行つても聞かれる。所がブラジル食肉の価格が高いといつてもそれは、国内相場の上であつて世界市場の立場からみれば決して高いものではない。例えば同じ程度の牛肉小売価格でいえば、1キロ当り

東 京	1,800円
ロスアンゼルス	7,000円
サンパウロ	3,500円

と云つた具合である。

世界市場の相場で見るとこれ程廉価であるから当然輸出のポテンシャルはあるわけだ。しかし国内でいつも慢性的に「食肉不足と高価格」が取沙汰されている間は食肉に輸出商品としての将来性をのぞむ考え方は少し先走りすぎる。

アフターザ（口蹄疫）が世界市場進出に大変大きなハンディキャップになっていることも見逃すわけに行かない。

一方国民一人当り食肉消費量の推移をアルゼンチン国営食肉委員会の資料によつてアルゼンチンのそれと比較すると次の通りである。

キロ	ブラジル	アルゼンチン	アメリカ	西 独
1946~50 平均	23.6	104.2	67.5	27.6
1951	26.7	105.5	62.5	38.5
1952	28.1	97.4	66.1	39.0
1953	27.6	97.4	70.2	42.6
1954	28.1	98.3	70.2	42.6
1955	26.7	104.2	73.8	45.8
1956	29.0	110.5	75.7	48.0
1957	29.9	107.8	72.0	48.9
1958	28.1	107.4	68.9	50.3
1959	26.7	75.7	72.5	51.2
1960	24.5	79.3	73.4	50.7
1961	25.8	96.5	72.5	53.6
1962	25.9	97.8	73.9	54.4
1963	24.9	98.3	76.5	54.4
1964	24.5	80.2	79.2	54.9
1965	24.5	89.8	75.7	54.9
1966	24.5	93.9	77.6	55.8

1人当り国内消費が過去20年間いつも25キロから30キロ位を上下していることから考えて「食肉不足」という声に不自然さがある。

そこには日本の慢性食肉不足と同質の理由がある。

この間に西独は28キロから51キロに増大、イタリアは13キロ

から30キロに増大しイギリスですら46キロから63キロに増大しているのだ。

食肉生産の分野にたづさわる人はブラジルの牧草地不足、適地不足を指摘する。資本の不足により開拓が遅々として進まないこともあげられている。ブラジルのどこを歩いても資本さえ導入すれば膨大な牧畜適地を開拓出来るという声を聞く。

こんな状態で、かろうじて年々増加する食肉生産は人口増加による消費増に充当されるのが精一杯である。

「ブラジルは未来の国」と云う言葉を聞いて既に久しい。ブラジルは「永遠に未来の国」のまま経過するであろうか。

コーヒープランテーションや新興産業への投下資本によって上った利潤はどこに逃避するのか、これがもし国内に再投下されることによって生産の役割を果せば「永久インフレ」「慢性物質不足」の事態が解決される系口を見出す筈とも言はれる。

「慢性食肉不足」ということは「いくら増産しても大丈夫」という保証でもある。問題は投下資本への見返りの率をどのように評価するかということである。食肉増産への投資に対する利潤率が低いからと云って回避すべき性質のものでないであろう。

日本人開拓者の血と汗の努力に報いる性質の投資であればなお更のことである。

以上

第5節 予 測

全・食 肉

1975年には8600万トン内外の全食肉生産が予測されている。それ迄の15年間に生産は40%内外増加すると見込まれているわけである。

先進諸国、計画経済圏諸国では経済活動の活発化と所得水準の向上、ひいては1人当り消費量の増大が著しい。

一方開発途上国に於ては人口増加による需要増加が著しいとされている。この様な背景で先進国間においても、開発途上国においてもその域内需要の増加に見合うだけの生産増は期待出来ないと予測されるわけである。全食肉については慢性的な供給不足が世界市場の需給関係を支配する基調となろう。

牛 肉

先進諸国の牛肉生産増加はEBCを例にとると過去10年間に63%といわれる。ところが牛の飼育頭数の増加率は10%にすぎない。これは品種改良と飼育技術が急速に向上したためこれだけの増産が可能になつたと言われている。アメリカでは肉牛の増加は乳牛よりはるかに著しく国民の旺盛な食欲によつて引起されるダイナミックな需要増大があることを物語っている。

先進国も肉牛飼育コストが高くなるにつれてこれらの需要増大を上廻る供給に困難が生じてくる。開発途上国では資本不足に加えて南米諸国のように国内の既成市場に対する支配による供給不足の状態が続くことも予測される。

豚 肉

養豚は養鶏に似て飼料を原料とする製造産業的性格をもつて、経営されるのが先進諸国の生産基盤となつている。

ところが開発途上国においては養豚は未だ粗放農業の域を脱していない。地域内で慢性的な供給不足による高価格が指摘されているが、養豚を積極的な経営形態に引上げて資本と技術を導入する能力に欠けるのが実情である。

マトン・ラム

世界市場の65%の輸入は英国によつて行われ、輸出の80%がオーストラリア、ニュージーランドによつて占められている。

西欧とアメリカの需要増加に対して域内の羊肉生産増加のテンポは低い。此の先進国の輸入増に対して開発途上国の供給力は不足する。牛肉不足の強弱によつて影響を受けながら羊肉不足の状態が続く。

第6節消費性向

米、麦の消費は所得の高さが或る段階に達すると減少する傾向がある。所が食肉消費には減少を示すような所得向上の限界がない。

消費と所得との相関々係で弾力性にもつとも富んだ食品が食肉である。

(相関曲線は本文参照)

所得の増大がそのまま食肉消費の増加に比例する国、又は所得階層は人口構成のうゑで大きな部分を占める。アメリカの平均程の高い所得を享受する階層でも、いつも所得の増加につれて食肉の消費の増大がのぞまれる。このような意味で所得増加のテンポの速い先進国では食肉消費の増勢は所得増に最も影響をうける。一方所得増加のテンポの遅い後進諸国では人口増加率による影響が著しい。

この二つの理由によつて食肉需要は世界的に著しく増大する傾向がある

工業化が進み所得増加のテンポが速く、その上人口の増加の著しい国々では慢性的な食肉不足という現象すら呈している。ブラジルや日本はその好例である。

食肉消費の将来は所得の増加、人口の増大という二大要素からみて各種食品中もつとも増加率の大きなものである。

第7節 加工肉

ボリビア

380万の人口をもつこの国の国民一人当り食肉消費量は12キロ、そのうち牛肉は8.4キロである。GNPは一人当りにして120ドルの国である。食肉消費性向の所得との相関性からみると、弾力係数はきわめて高い。「慢性食肉不足」の国である。

政府統計にみる限り食肉の輸出はなく輸入国である。欧州からハム、ソーセージ等加工品の形で輸入されたものが国内の富裕階層に消費される。ボリビアには国営缶詰工場が二ヶ所あるが、そこで食肉缶詰が生産される。しかし品質が劣るためいままでも輸出は皆無に近い状態である。

パラガイ

人口200万のパラガイの国内総生産の11%を牧畜業が占める。牧畜業はパラガイ国第一の基幹産業である。

国内消費

全食肉	1.2万トン
牛肉	9.5万トン
豚肉	2.5万トン
その他	若干

輸出食肉は殆んど全量コーンビーフとエキスによるもので、1967年1700万ドルであった。これはパラガイの同年の輸出金額4800ドルの約3分の1以上を占める。(約1万トン強)

パラガイの生牛肉は欧州には価格的に進出できない。また口蹄疫によって輸出先が限定されるため輸出の大部分が加工肉になっているわけもある。

これらの加工肉は主として米系 I 社が米国向けに、英系 L 社が英国及び
 び欧州向け、民族系 I P 社が欧州向けに夫々 3 分して輸出している。

(仕向先引明細は本文参照)

アルゼンチン

人口 2300 万の牧畜国アルゼンチンは、食肉輸出にながい歴史をも
 っている。第一次・第二次大戦を通して欧州に対する有力な食肉供給の
 役目を果たして来たものである。またアルゼンチンはウルガイ・ニュージ
 ーランドについて世界第三位の一人当り消費量を示す。

1967	全食肉	96.6 キロ
1人当り消費量	牛肉	82.4
	羊肉	5.4
	豚肉	8.8

この旺盛な国内消費量をみたく食肉生産とその価格を安定させるため
 に、食肉管理委員会が統制の権限をもち生産の 20% を目標として輸出
 を管理している。

1967	生産量	輸出量
牛肉	257 万トン	6.8 万トン
羊肉	20	7.5
豚肉	21	1.1

加工肉は 1967 年輸出牛肉 68 万トン中 7.3 万トンのコーンビーフ、
 煮沸肉(ロースト)、ブリスケットと 3000 トンの肉エキスから成立つ
 ている。加工肉の主な仕向先国は米国と英国でそれぞれ約 40% を占
 める。残り 20% が他の北米及び欧州諸国である。

国別推移詳細は本文参照

米系インターナショナルパッカー（もとスウィフトとアーマー）社及びリービヒの外、公営企業体であるCAPが巨大な生産能力をもつ工場を経営して国内向けと輸出に大きな力をもっている。

ブラジル

人口8700万のブラジルの一人当たり消費量は次のとおり

1966年	全食肉	24.5キロ
	牛肉	17
	豚肉	7
	羊肉	0.5

1970年迄の10年間の人口増加は33%と推定されている。

一方1960年を中心とする10年間の牛肉生産増は33%であったが豚肉は60%鶏肉52%であった。

ブラジルは飼料を中心とする食肉として養鶏・養豚の増加が大きい。

1965年	生産量	輸出量
牛肉	130万トン	※ 3万トン
豚肉	23	V
羊肉	3	V
鶏肉	2	V

※1964年よりの推定

V 3500トンの馬肉

数百トンの豚肉

の外殆ど皆無

3万トンの牛肉輸出中1.2万トンが加工肉である。加工肉の大部分がコーンビーフで若干の米国産煮沸冷凍肉が含まれる。

「慢性食肉不足」のブラジルからの食肉輸出を多く期待出来ないのも当然である。

加工肉の需給

ラテンアメリカと大洋洲は供給圏であって輸出が圧倒的に多く輸入は少い。一方北米と西欧は需要圏であると同時に供給圏でもある。

輸出入は域内、域外間で行われるのであるが域内を差引きすればブロック毎の供給圏と需要圏とに分けられる。

1962年差引輸出

単位：万トン

	ラテンアメリカ	大洋洲	合計
全 食 肉	62	86	148
うち加工肉	6	3	9
ベーコン、ハム、塩蔵豚肉	-1	-	-1
その他調整肉	-	-	-
缶詰しないソーセージ	-	-	-
缶詰肉	7	2	9

1962年差引輸入

単位：万トン

	北 米	西 欧	合計
全 食 肉	3.8	9.4	13.2
うち加工肉	1.0	6	1.6
ベーコン、ハム、塩蔵豚肉	-	5	5
その他調整肉	-	-	-
缶詰しないソーセージ	-	-1	-1
缶詰肉	1.0	2	1.2

第8節 貿易と流通

食肉輸入国と云っても、どの国も国内の食肉生産能力も持っているのだから、不足分を輸入するわけである。

著しい輸入国は例外なく先進国に属する。

アメリカを除けば殆ど、どの先進輸入国もその国内の労働コスト、土地使用コストの高騰によって食肉生産費が高くなっている。従って単に価格差だけが輸出入をすゝめる原動力となっていれば、機能商品と同じように、もうずっと昔から輸出国と輸入国とに画然と分かれてしまっている筈である。

所がいつも農産品が価格差だけで国際商品にならないように、食肉にも同様な条件が輸入政策面に露骨に現われてくるのである。

穀類をはじめとして食品の輸入はいつも国々の政策によって決定される。

国産食品に対する保護政策が基本になるからである。

輸入制限は関税と云う手段によってのみ差別すべきであるというガットの基本精神も食品には仲々通用しない。

食肉の輸入に対しては先進国ではE E C諸国のような関税プラス賦課金制度、イギリスのように国内牧畜への補助金、アメリカのように国内産に対して一定割合になれば割当制、日本のように特定業種への割当制と云った方式が採用される。

開発途上国では外貨の使用制限と云う目的で輸入を禁止する措置がとられる。

食肉の貿易量が世界生産の数パーセントにすぎない割合が以上に述べたような理由から今後急激に増加する兆しはない。

輸入制限によって世界貿易がもつ各国間の価格差をうめる調節作用が食肉には少い。

それにもかかわらず、先進諸国の経済的繁栄、可処分所得の増大、それに見合う食肉消費の増加傾向は今後更に強まって行く。

先進国市場の高価格が潜在消費を無理におさえるような不自然さは永続きしない。

開放経済下、国際分業の思想が広範囲に波及するにつれて食肉にも国際商品としての食肉の流動性が増大する筈である。それは結局南米生産国の価格高につながる傾向でもある。(世界の各国輸入量合計)

1956—60	290万トン
62	360
63	400
64	390
65	400
66	430

1975年には550万トンが推定されているが、その90%が北米と欧州諸国の輸入で占められるものである。

第9節 南米畜産

リマ ペルー スイス大使館の畜産プロジェクト担当ドクター K, Burri との会話中に述べられた氏の意見はそのまま南米畜産に関する所見となる。

欧州では、南米産の肉のまづさや堅さは定評となっている。生肉として輸出するには可成り価格上のハンディを克服しなければならない。

更に又南米肉牛のアフトーザ（口蹄疫）が問題である。

欧州全体もまだ汚染圏であるからハンディとはなっていないが、既に英国ではこのアフトーザを理由として南米肉をオーストラリア産等から区別しようとする動きがある。

アメリカは長い年月を費したが遂にアフトーザを駆逐することに成功した。今は南米の生肉輸入を許可しない国になっている。

南米のアフトーザが、ここ5、6年でコントロール出来るとは思えないが、何とかして駆逐しない限り南米産牛肉を世界市場相手として論ずることは無意味であると言っても過言ではない。

各国共ワクチンの開発、汚染防止に大いに努力しているのだが、病菌の方も抵抗力を増し仲々困難なようである。結局これらの南米各国内で国内市场を相手としなければならないことになる。

夫々の国の先住者達が身につけた牧畜の技術をもって低コストで生産する牛肉に対抗する移住者の牧畜は普通のことでは仲々苦しい競争であることを承知しなければならない。

結局先住者の低コストに真向から競争するのではなく、もっと賢明な方法を採用すべきである。

それは、例えば生産性の高い施設に投資するとか、歩留りよく、肉のやわらかくおいしい肉牛の品質改良による種牛をとる牧場を経営することも良

いだろう。

或は良い種牛の幼牛飼育を専門にすることも一方法である。

牛の品種改良とその種牛による幼牛繁殖を事業とする牧場経営を提案したい。

例えば南米原地産セブ種に外国の良い雄牛を交配させて出来た良い二代目を種牛として考えるわけである。

北海道の BREEDING 技術の高さは世界的に有名である。BREEDING といひ FEEDING といひ、日本人に向いた技術的牧畜である。南米先住者達の粗放牧畜によって対抗することは馬鹿げたことである。

日本人ならば、又好い牧草を管理することも出来るに違いない。特に野菜の連作で疲れた土地を休ませる為にもパステューア（牧草）育成は良い効果がある。

正確さと清潔さで定評のある日本の牧畜技術者をどんどん送り込んでこの手のこんだ仕事—（手がこんでいるだけにその対価としての収入のよい）—高度の牧畜技術を南米移住者達に教えてやる必要があるのではないだろうか。

この種の仕事をやれるのは「若い人」である。

若い人達の意気に燃えた日本の畜産センターが南米のあちらこちらに指導的役割を果たして、ゆくゆくは日本人移住者の福祉だけでなくその地域の経済に大きく寄与する日のあることを望んでいる。

第1.0節 価格変動

第二次世界大戦中及びその直後に続いた高値は大戦と云う異常状態下に発生した例外的な価格変動であると云う認識に立つと、1950年代以後の国際相場こそ平常な世界経済下におけるバランスのとれた需要と供給によつて形成されていると考えることが出来る。

その後高原状態と云われる世界経済は第二次世界大戦中、最も大きな被害を受けた諸国の成長ブームによつて推進されている。

大戦の高値に好況を謳歌した南米産の食肉がオーストラリア、ニュージーランド産によつて、世界市場の主導権をうばわれつつある現実を直視しなければならない。

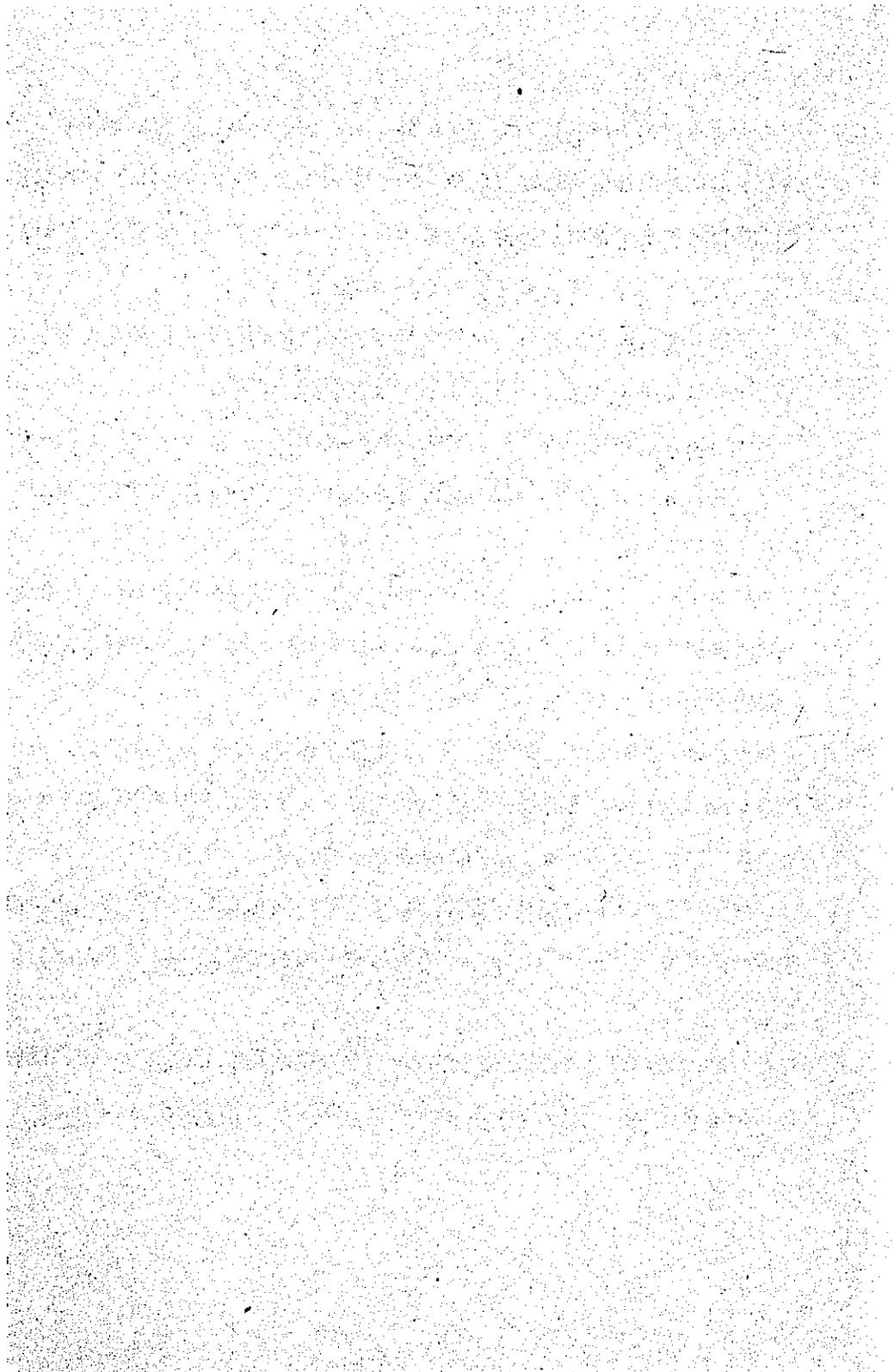
オーストラリア、ニュージーランドいずれも平均国民所得において、はるかに南米諸国より高い国々である。これは生産性の比較だけで解決出来ない要因をかかえているとみるべきであろう。

南米諸国の食肉輸出に対する考え方に問題があるとも言えよう。

それは既成資本勢力を形成した大型エスタンシヤによる国内市場の支配、その根底に立った輸出観に問題があるとも言える。

なお各国の国内価格の循環変動についてその特性をもちより、相互干渉の実体を分析することについてはこの報告書の範囲で価値あるものとは考えない。

しかし移住地の属する各国に於て、その国の循環特性を捉えることは国内における食肉マーケティング上のテクニックとして重要なことである。



第 2 章 ポリビア

1. 概 況

2. 食肉の消費、生産及び輸出入

3. 農収省にて

4. ポリビアの牧場主

5. 日系二世大牧場経営への夢

6. 市営屠場にて

7. 公設市場にて

8. 移住地と米作

9. 食肉と移住地に関する情報

10. その他

11. 統 計

イ．牛肉の生産、消費、輸入

ロ．食肉の輸出

ハ．ラバス市営屠場による月別供給量

ニ．ポリビア G N P 外

ホ．G N P に占める割合

ヘ．主要農産品の人口一人当り消費量

ト．農産品の生産

1. 概況

380万のボリビアの50%はインディオと呼ばれる原住民である。インカ文明をきづいたアンデス山系の高地住民から成立している。白人は主としてスペイン系で全人口の15%を占めていると推定される。残りの35%がこれらの混血である。白人は支配的階層、混血は中間階層、インディオが被支配的階層と云える。その収入と生活態様に歴然とした相違が見られる。

ボリビアはまた地形的に西部アンデス山地と東部熱帯低地に分れている。有名なボリビアの錫鉱山は西部高地にあり金、銀、銅等の金属鉱業が主要産業となつている。

東部低地は南緯10度から15度にわたる熱帯ジャングルであり農牧業を中心とする開拓が進行中である。何といつても山地農牧業に比べてコスト安である。

東部の中心地サンタクルスはまた最近の油田開発ブームにつて活況を呈じている。国際価格の低落にあえぐ錫鉱山の衰退に代る新興の資源産業として期待されている。ボリビア経済の重心が次第に産地としての東部に移動する傾向が強い。

USAIDの資料によればGNPは1966年4億米ドル人口一人当たり100ドル弱(1958物価による)となつている。現在の物価で120ドルということがボリビア政府による資料である。

産業別にGNP中に占める割合としては、農牧業は25乃至30%で15年間定常である。鉱業は前に述べたように15%から9%に低落している。

重要な輸出鉱物資源である「錫」の国際相場の低落がボリビア経済にあたえる影響は大きい。所が石油資源がヴェネズエラと共に南米に

おける貴重な地下資源として脚光を浴びて来た。国営公園とガルフ石油が探油に従事しているが、約15年の間に1%弱から8%に急増している。1%から6%に上つた建設産業と共に重要視される指標である。

2. 食肉の消費、生産及び輸出入

1967年の牛肉の生産30,974トン消費32,000トン(骨付き重量)である。人口380万に対比すれば1人当り平均年間消費量8.4キロとなる。牛肉が70%を占めると云われるから肉全体の消費は約12キロということになる。豚と羊が約半分宛で残りを占めている。

歐洲から加工肉としてハム、ソーセージ等の輸入が未だ続いて居り1967年1530トンもある。これは主として高所得層によつて消費されている。国営缶詰工場によつて加工肉を供給し輸入を減少させるように努力している。

輸出は隣国ペルー向けに道路輸送で行なわれるのが主である。1966年牛82トンの輸出の公式資料がある程度にすぎない。実際はもつと多いと推定されている、というのは北部ペニ洲からペルーに入るルートは古くからの交易路でコントロール困難なものが多いからであるという。

いずれにせよ、輸出入量は小さい。

生産と消費のバランスで見るとポリビアは自給状態にあると云えよう。しかしその消費量は世界の最低の水準に属する。これについて現地では肉の価格の高いことを指摘している。世界最低の所得の水準をもつポリビアの現状から見れば当然であろう。しかし、1キロ240

円(骨付き)の牛肉の小売値はアメリカや日本の価格から見れば大変な高値である。も早や、この環境でポリビアの肉の価格の高低を論ずることには問題がある。国際比価の観点に立てば、ポリビアの肉は非常に安いことは間違いない。

3. 農収省にて

政府として増産をのぞむ農産品の順位を次のように掲げている。

農業 1.小麦。2.コーヒー。3.フルーツ。4.米。5.油用大豆

牧畜業 1.牛。2.羊。3.豚。4.ミルク。5.鶏と卵

肉牛の生産増は国の施策として最重要視されている。1960年から64年にかけて肉の生産量は統計上では増加していないが、実際の生産はふえている筈である。増加分はベニ、東部等からペルー、ブラジル間で交流されている。

一般に牛70%豚と羊で30%の消費と云われている。豚と羊を比べれば前者が若干多い位である。

食用油の国産自給化を図っているが、今の搾油施設は旧式で問題にならない。国营工場を研究甲であるが、原料大豆の供給が充分とは云えない。

鶏や卵の値段が割高で、ポリビアでは高級食品として取扱われる。

ポリビアの精米機の歩留りは平均70%から75%位と見られている。従来欧米からの輸入精米機を主に使用したが今はブラジルから「鈴木式」と云うのを可成り輸入していると言う。

米の生産も10年間に零から出発して4万トン近くに成長して輸出ができるようになった。ジャガイモは人口増に比例した程度の生産増があるにすぎない。食用澱粉はベーカリー用に使用される程度である。

ボリビアの発展に致命的な障害となつているのは交通難である。東部ではジャングルの開拓によつて、はじめて道路が出来上る。西部は高山地帯でインカ文明以来の山地道路が縦横に走つていて自動車交通に使用出来る部分は非常に少い。

4. ボリビアの牧場主

ラパスに本社を置く現地の輸入商社の大株主であるこの人は、ボリビア北部に25,000頭の牛をもつ大牧場を所有している。ボリビア北部と云えばアンデス山系の東側斜面の終つた低地帯が大部分を占める。南緯10度から15度にわたる地域で東部ブラジルに河口をもつ大アマゾンの支流上流の水源地帯になつている。日本人移住地の中心地であるサンタクルスはその地域でも南端に属している。彼の牧場は北部国境沿にあつて、需要地ラパスから600キロの距離があるという。その間アマゾンジャングルとアンデスを越える道路はなく、肉の輸送は飛行機に頼らなければならないという、ダグラスDC-3型機の外、第二次大戦中アメリカの爆撃機としてわれわれにも親しいB-17、B-29がその輸送に使用されている。輸送コストは需要地迄平均して1キログラム当り8セント(29円)というから、大変経済的である。日本の肉の価格の相場で云えば100グラム200円の牛肉の航空輸送コストが3円弱ということになる所がこの100グラム3円の輸送コストが大きいと強調する所から考えて如何に現地の肉の価格が低廉であるか相像出来よう。牛肉骨付きで1キロ50セント(180円)が卸価格である。これは日本で云えば100グラムの間違ひではないかと思われる程の値段である。

この牛肉も小売値では平均1キロ70セント(250円)位になる。

ラバスの公設市場で軒をつらねてインディオが経営する肉屋の価格も1キロ8ペソとなつている。1.2ペソ1ドルのレートで安定しているこの国の為替を計算すると、8ペソは67セントになるから上述の情報に間違いはない。現地の屠殺施設では冷蔵は出来るが冷凍能力がないのが目下の悩みであると云う。最近ペルー向けの輸出が増大しているのでこれが将来どう展開するか注目しているとも言つている。

こちらの牛はアメリカとちがつて生育が遅く、肉牛として売れるまでに4年か5年かかると云う。従つて急速の増殖を計らうと思つても仲々困難である。よい改良品種による交配技術の向上が大いにのぞまれると言ひ。

アメリカでは2年で肉牛として売ることが出来その目方も500キロ以上600キロ近いものが普通で一頭当りのせり市価格も200ドルから300ドルしている。それに引き代え、ボリビアの肉牛は400キロから500キロ位になるのに4～5年かかつてそれで一頭80ドル位であると指摘する。

そんな肉を600キロも航空輸送してなお25,000頭の牧場経営が大いに儲かつていることに注目したい。

航空輸送と云えば、ボリビアはベネゼエラと共に南米では数少い石油産出国である。燃料となるガソリンは安い。ボリビアは石油資源の開発を国営石油公団とガルフオイルで二分している。

5. 日系二世大牧場経営への夢

日本からの自動車輸入で大いに儲けた日系二世が牧場経営の現地支配人となる日本人を探しているというのを聞き、牧場経営の企画を聞くため早速訪問してみた。

彼はすでにボリビア北部ベニーのブラジル国境に約1万ヘクタールの土地を購入している。アマゾン支流に沿うサンホークキン近くで1ヘクタール当り1ドルであつたと云つている。25,000頭の牧場であるボリビア人との面談を通じて得られたいろいろな数字を裏付けする程度のことでは未経験なこの人からは多くの情報を期待することはできない。

とにかく、あのボリビア人の農場主のように大牧場経営がもうかるものであること、この人が今やつている自動車輸入であげた利潤を次に投資する対象として大牧場経営をえらんだ事実だけでも、貴重な情報であることを附言して置こう。

ベニー渡し一頭50ドルか70ドルの肉牛も運賃を20ドルかけて需要地迄運べば1頭90ドル位で売れるということ。サンタクルツ辺ならその値段も70ドルから80ドルであるがいつも飛ぶように売れる筈だと云うこと。それにボリビアは本質的に肉不足の国だという現状理解等ボリビア国内の肉牛の需給を端的に指摘していることに注目したい。

彼によるとボリビアでは東部の低地帯を南から北に向つて肉牛が動いているとも云つている。即ち、ブラジル国内マトグロソでは、肉を東部ブラジルに出荷するルートを持たない事情があるから、そこからボリビア東南部に入つて来るのだという。

マトグロソでは1頭15ドルから50ドル位の間相場が非常に安いからこの幼牛を買うことも出来る筈だといつていた。ボリビア東部の肉は更に北上してペルーに輸出される。密輸出が非常に多いのだがそれはペルーの肉牛相場がボリビアの3倍位だからだと云う。

このようにして南米大陸中央部では北高南低の需給条件に支配され

た肉牛の移動があるという考えを主張するわけである。

海港をもたないと云う経済上のハンディが航空機輸送の時代の幕明けによつて或程度克服される時代が近いことを彼自身直感しているようだ。

6. 市営屠場にて

屠場の処理実績は過去十年間位殆んど増減がない。ただサンタクルス方面での入荷が増加している傾向にある。1日平均80頭内外の牛を処理し、土曜日曜だけ20頭から100頭位の牛を処理する。

牛はここでは平均350キロから400キロ位の重量だが相場は145ドル位(約5万円)。

高地インディオのつくる貯蔵の出来る乾肉が安い。市場ではキロ当り30セント(110円)位で小売されている。

牛肉は中産階級、工場、鉱山労働者の食品であるが、インディオにはこれでも高価すぎる。

7. 公設市場にて

ラパスには公設市場が四ヶ所ある。そのうちのーヶ所カマチヨ市場を訪ねた。行商台は300近くあるが、その商人の95パーセントがインディオのおばさん達である。行商台のーヶ月の売上げは800ペソ内外というから日本円で25,000円位になる。従つて、この売上高の持つ意味は日本で感じるのとは違ひ。

この商いによる儲けは大体250から300ペソ即ち7500円から9,000円程度である。このなかから3,000円位の場所代を支払わなければならぬから、大変零細なものであることは間違ひない。

ラパスでは路端で売る商人も市に対して1日割0.2ペソ(約60円)の場所代を払っている。公設市場で米や野菜を売っているインディオのおばさんが、日本人である筆者を捉えて苦情を述べていた。その云りところを要約すれば次のようになる。

「ボリビアの国でボリビア人が日本人の作つた米をたべるようになってしまった、米が安いから今ではジャガイモが売れなくなつた。私もこうして日本人の作つた米を売っているけれど、売れなくなつたジャガイモを作つていたインディオが高地を下りて行かなくてはならない実情だ」

ボリビア政府によつてインディオの集団開拓地政策が進行しており高地から東部平地に移動して米を栽培する開拓地が造られつつある。このことを指しているのであろう。インディオは住み馴れた山を下りることを好まない。また同時によく売れる米を作っている日本人が大いに儲けているだろうと云つているようにも受取れる発言でもあつた。

日本人移住者がボリビアの米の自給を可能にしたことは間違いない、また日本人だけが栽培していた時代には若干潤つたかも知れない、しかし、現状は違ひ、今ではボリビアの年産約4万トンの米作中1万トンが日本人の移住地によるものであるが、ボリビアの米の市場の支配力は甚だ微弱である。卸機能を備えた地方人による精米所が市場を支配しているといえよう、そのため、米作による大きな利潤をこれら取扱者があげているのが実情のようだ、彼等は消費地からの商業資本を背景として市場を支配している気配すらみせている。年と共に価格変動の幅が大きくなり、しかも規則正しい変動で収穫時には馬鹿安という状況である。日本人移住地でも組合による精米所を経営しているが

マーケティング技術を向上させる必要があるようだ。「いづれにせよ今では米はボリビアの輸出農産物である。ボリビア経済に大きく寄与する米作を推進したのは日本人移住地である。ボリビア人はそれで外貨をかせいでいるはずだ。」という私の反論が苦情を云つたインディオのおばさんに正しく理解されたかどうかは分らない。ちなみに、おばさんの売っている白米の小売値は1キロ当り18セント(65円)である。日本のその半値以下であることを付言しておきたい。主食代用のユツカは1キロ当り58円である。これはまたユツカ澱粉の原料でもある。

8. 移住地と米作

ボリビアの米の消費量は一人当り9.5キロである。これで自給を上回る産業を達成したと云う意見である、日本はこの10倍の消費だが、それを考えるとボリビアの消費量を引き上げることは不可能でないだろう。

移住地700戸で平均8ヘクタールの米作に従事して居ると言ひ。1ヘクタール平均200アロア(2300キロ)の生産と看做すと移住地の生産量は12,880トンとなる筈。(1アロアは25ポンド)一戸平均収入は25ペソ×200×8=32,000ペソ(95万円)と云う計算が出て来る。

○ 米価の変動はこの3~4年特に激しさを加えている。供給過剰と云うより、米の取扱の旨味を知つた市場の商業資本が変動を作り上げていると見て対策を講ずべきでないか。

1アロア(11.5キロ=25ポンド)20ペソ(600円)で精米料

は殆んど一率1ペソ(30円)である。

4アロアを1キントルと呼び100ポンドに当るが、1961年頃80乃至90ペソ(2,400円~2,700円)で変動幅も20%程度であった。それが1965年頃から70ペソ程度の相場で変動幅も40%程度になつている。ボリビアは精米所ブームと云つてよい。あちらこちらに新しい精米所建設が眼につく。余程もうかるにちがいない。日本人移住地の米のマーケティング技術向上が必要だと指摘される所以である。

米の統計

年度	生産	消費	輸入	輸出
1960	23,300	25,937	3,339	—
1961	24,000	28,251	4,251	—
1962	24,000	32,239	8,239	—
1963	34,000	35,000	231	—
1964	27,135	35,000	7	—
1965	22,632	34,599	286	—
1966	37,728	35,000	2,202	—
1967	42,660	36,100	—	6,551

ボリビア経済部

9. 食肉と移住地に関する情報

国営サンタクルスの缶詰工場では1日500頭の豚の処理能力があ

ると云っている。所が現在100頭位しか集荷出来ない。サンホアの日本人移住地と交渉したがキロ当り3.5ペソ(105円)の値段では折合はない。4ペソを要求していると云う。農収省係官の話である。0.5ペソの差で400頭の過剰設備をその儘放置しているという国営工場の経営もさることながら、反対に0.5ペソの差で一日400頭の購入を約束して呉れる国営工場との交渉を進展させない移住地側の商売気不足も指摘されるべきである。両者のマーケティングマインド不足ということになる。

○ 移住地700戸で10万羽の鶏が居るだろうと推定されている。一戸平均140羽という勘定になる、なかには1,000羽から1500羽を飼っている人が居るが仲々好採算であると云う。

牛肉1キロ8ペソに対し鶏肉1キロ15ペソ(450円)という高値では当然であろう。飼料は原則として自給である。日本やアメリカのように購入飼料に頼るメーカー的養鶏産業の段階まで行かない限り需給バランスだけによる鶏や卵の暴落といった事態は起り得ない。若干の価格の低落があつてもそれは、いつも新らしい需喚を獲得するのによいきっかけとなる位に考えて前向きに養鶏を考えるべきであろう。

卵が又高値であり1ダース当り6ペソ(180円)と云うからこれだけは日本の150円より割高である。おまけにボリビアの卵と云えば、1ダースも買えば30羽は腐っていることを承知のうえであると云う。あちらの木の下、こちらの草むらの中に生んだ卵を探して集荷するから、そんなに腐っているのだという、それだけ更に割高となつている勘定である。そんな市場で「日の丸」印の卵を買えばそんな心配はないという評判が立てばそれだけでも同値なら割安と云う

計算になる。マーケティング技術を活用して前向きに養鶏事業を進展させる余地がある。

沖縄移住地450戸では全体で1ヶ月50頭の牛を屠殺して自給しているだろうと云う。1頭平均350キロ歩留り55%と仮定すれば1ヶ月の牛生肉生産は10トンである。自給とは云つても可成の外売りもある筈だが一戸平均にすれば22キロという計算になることを付記して置こう。

1頭平均100ドル位の売値である。現地の採算価格は60乃至70ドルと云われる。

10. その他

○ コチャパンバには国営の缶詰工場がある。デイルマン印で出しているがその卸価格の一部は次のとおりである。

品名	1 容量 グラム	単 位	原地価格 ペソ	円換算 円
コンビーフ	350	36	276.5	8,300
フランクルト	500	24	147.0	4,400
ウイenna	500	24	153.0	4,600
ハム (小)	150	60	308.5	9,300
ハム (大)	275	36	232.5	7,000

ソニー、ホンダ、大津タイヤ等の輸入商である有力商社HANS Aがこの缶詰の代理店である。

○ グレースラインの同系会社である現地商社グレースはボリビアで

は有力である。肥料納入の顧客としても日本人移住地を大きく評価している。グレースは米の取扱い精米機、農業機械の取扱い等についても今後大いに提携関係を深めることに意欲的な発言をしている。ポリビアの養鶏をもつと盛んにしたいとも云う。これは飼料取扱いにうまみがあるからだということも指摘していた。当然であろう。

肉については輸出どころの話ではなく、グレース自らデンマークのスキフトハム等加工肉を輸入している位だと云う。

○ 石油公団

ポリビアの石油資源についてガルフ社が半分の利権をもつて1956年に営業開始。バレル当り\$3.29のロイヤルティを支払うという。石油公団は日産7,000バレルに過ぎないがガルフは36,000バレルを産油している。

サンタクルスを基地として東南部に延びるパイプラインによつてブラジル、アルゼンチンに輸出している。

大平洋岸チリ領のアリカ迄のパイプが完成しており、外洋への道も開けている。しかし、国内自動車の使用が増加するに連れて石油消費も年率8%の割合で増えている。それで輸出余力が充分ではないという傾向もあると云う。

石油公団精油所を日本の技術で建設するような情報と共に産油経営参加についても取沙汰されている。

○ サンタクルスはブームタウン

ガルフの基地でもあり、附近の開拓ブームと相俟つて、サンタクルスは珍しい程活気のあるブームタウンの様相を呈している。ガルフか

らの石油利権料のほかいろいろな生産需要がこの町に活力をあたえるのであり。今でも郊外の土地は1平方米当り1ドル見当である。開拓に必要なセメントは馬鹿高である。国営工場一社の独占で50キロ入り1俵\$2.50もしている。サンタクルスはあれだけ内陸部に位置しているにもかかわらず、マホガニのインチ材が米国向けに輸出されている。

インチ材のサンタクルス相場は1平方フット1.8ペソ15セント(54円)内外であると云う。移住地でも開拓のかたわら製材を経営する者が出る位で有望であると見られている。

内陸部からラプラタ河を下つて大西洋を北上して米国に送られる。

トン当り運賃はラプラタが60ドル大西洋が40ドルというから内陸部運送のハンディキャップがよく分る。

イ。牛肉の生産消費輸入

単位M/T

	生産	消費	輸入
1960	1,4721	14,346	56
1961	30,622	20,424	590
1962	19,573	24,079	4,267
1963	22,579	25,342	3,240
1964	23,405	23,510	3,078
1965	30,737	28,853	504
1966	31,200	31,203	117
1967	30,974	32,000	1,530

ロ. 食肉の輸出

M/Us\$

	牛	豚	羊
1962	462/90,953	144/1,555	78/24,960
1963	478/91,461	-	217/65,401
1964	100/20,372	-	437/133,446
1965	216/46,129	-	428/142,788
1966	82/15,529	-	282/96,402

イ.ロ. ボリビア経済省商務部統計課 1968.7.25

ハ. ラパス市営屠場による月別供給量

単位 M/T

月	牛肉		羊肉		豚肉	
	1966	1967	1966	1967	1966	1967
1	892	879	8	5	11	25
2	848	926	21	11	7	12
3	965	829	26	32	12	20
4	667	784	48	34	11	26
5	847	870	59	45	15	30
6	841	826	60	46	21	26
7	857	840	35	30	21	26
8	733	852	20	17	30	18
9	776	785	28	15	35	25
10	882	970	14	11	29	23
11	983	974	4	7	25	22
12	1094	953	9	3	32	26
合計	10502	10488	353	255	249	278

ベニ. アルティブラノ
より

アルティブラノ
より

アルティブラノ
より

ニ. ボリビア G N P 外

	G N P		人口		生産	
	1958 市場物価による		%		石油	ガソリン
	us\$100万	人口1人当 us\$	1952	1950	1000m ³ 1950	1000m ³
			1.01	3,013	98	59
1958	278	99.9	100	3,543	546	147
1960	290	99.5	102	3,697	568	144
1961	297	99.3	107	3,781	475	146
1962	315	102.5	106	3,867	464	163
1963	332	106.7	111	3,954	541	160
1964	347	109.3	114	4,044	523	179
1965	367	112.9	117	4,136	536	188
1966	393	117.3	119	4,236	× 967	215
1967	NA	120.9	111	4,337	× 1,309	240

× パイプライン完成による輸出増

ECONOMIC AND PROGRAM STATISTICS

USAID

ホ. G N P に占める割合 (%)

	農牧業	鉱業	石油	製造業	建設業	金融商業	交通	政府	その他サービス
1952	29.2	15.0	0.6	12.6	0.9	12.5	6.2	14.2	8.8
1958	31.7	9.4	4.0	12.7	3.6	12.8	8.5	7.7	9.6
1962	29.9	8.5	3.9	13.4	3.9	12.8	8.3	9.2	10.3
1965	28.0	8.2	3.9	13.6	5.3	13.1	8.9	9.3	10.1
1967	23.7	9.1	8.9	12.3	6.1	11.9	8.1	9.2	11.7

へ。 主要農産品の人口一人当り消費量

単位キロ

	人口	牛肉	米	ジャガイモ	小麦	小麦粉	砂糖
1960	3,462	4.1	8.3	10.1	11.5	22.4	17.1
1961	3,509	5.8	8.5	12.3	12.6	28.9	17.5
1962	3,556	6.7	9.0	12.2	23.0	26.5	18.2
1963	3,604	7.0	9.5	13.5	27.0	28.5	18.6
1964	3,653	6.4	9.7	13.4	23.7	26.3	19.2
1965	3,702	8.4	9.3	13.3	23.5	29.1	20.9
1966	3,751	8.3	9.3	13.5	23.7	29.5	21.8
1967	3,801	8.4	9.5	13.5	23.7	29.5	22.6

ホ。へ

経済省商務部統計課

1968.7.25

ト. 農産品の生産

1966/67	植付面積 ヘクタール	生産 M/T
小 麦	62,700	37,000
大 麦	94,900	56,000
とうもろこし	194,700	224,000
も み	27,500	43,000
じゃがいも	116,300	635,000
キヌア	20,000	8,000
オカ	16,400	63,000
コーヒー	10,800	5,000
アルファルファ	9,400	180,000
さとうきび	25,186	1,049,000
ユツカ	9,850	145,000
綿	3,400	2,000
バナナ	12,100	285,000
柑 橘	2,100	36,750
パイナップル	260	5,890
ぶ ど う	1,580	7,250
他 の 果 物	7,200	50,400
そ の 他	40,600	161,890
合 計	654,976	2,894,180

ポリビア経済局

第 3 章 バラガイ

1. COPACAL
2. INPACAL
3. 外資系フリゴリフイコ L社
4. 外資系フリゴリフイコ
5. PAMPA
6. その他
7. 牧畜関係資料
8. 統 計
 - イ 輸出の推移
 - ロ 牛の飼育と屠殺制推移
 - ハ 会社別輸出屠殺制
 - ニ 主要輸出
 - ホ 食肉，国別，年別輸出

1. CORPORACION PARAGUAYA DE CARNE

(COPACAL)

この会社は資本金800万ガラニ(630万ドル)で半官半民の公社であるという。国民消費者のために安い肉を供給し牧畜業者のためには牛を高く買上げることが目的として設立されたものであると称している。

両方を満足する機能を旨く果せるとも思えないがと、考えながら色々質問を続けた。パラガイ国々政に重要な役割を演ずる軍人を中心とした政治とその経済に対する感覚をのぞきみる思いがしたものである。政府側を代表する常任筆頭重役の話によるとパラガイ国では私企業はもうけすぎるといふ。

一方では牛を安く買い叩き、片方では消費者に高い値で売付ける弊害があると指摘する。

COPACALは今、大冷凍装置を設備中であり、11月には完成する予定であるから大いに本来の目的を果す活動が出来るといふ。マイナス35°Cまで可能で最新鋭であるから製品も廉価につく筈だとも云っている。この人は「冷凍煮沸肉」ということは知らないと言っている。

COPACALは現在は一年のうち、6ヶ月位操業する程度で25・6万頭を処理しているのだと云う。また6万ヘクタールの直営牧場地をもっているとも云う。

この政府側代表の筆頭重役「MUTSUHITO」という名前をもっている。この名前については、なかなか面白い命名のいわれがある。

戦争が終ってみたら勝った筈なのに生き残った男子はパラガイ全土で25,000人だったと云う戦争の歴史を時つ国である。尙武の国と

もいえよう。チャコ戦争生き残りのこの陸軍大將は生まれたとき、やはり軍人であった父から日露戦争に勝った明治天皇の名前をつけてもらったのだと云う。1905年生れである。この名前を使うについては日本の天皇家から許可の手紙が来ている、今も家宝として保存していると云う。二人の息子の名前が又夫々HIROHITO, YOSIHITO, であることも付け加えておこう。パラガイ国の牛肉市場を支配するCOPACALをこの様な親日家が牛耳っていることを報告する次第である。

2. INPACAR

この会社は払込資本金1億ガラニである。79万ドル相当額であるから2億8千万円になる。95名の株主から成立つのであるが大部分が牧場主であるという。

国策会社であるためか、それとも、この国の法律がそのように出来ているのかわからないが、この会社は所得税を納めないという。企業にとってまことに有難い制度があるものだと感じ入った次第。従って利益は主として社内保留となり現在の総資産3億ガラニ(240万ドル-8億4千万円)はあろうと云っている。

この会社のアスンション事務所は13名しかないが、工場は約1,000名で操業されるという。年間販売高400万ドルというから1人当たり4,000ドルの売上げとなる。この会社の株の移動は少いが、あるとして5,000ガラニ(約40ドル)の額面株券が12,000ガラニの相場をもっているという。この会社は牧場主が株主となった一種の国策会社の性格をもっている、国内の牛の相場の高値を維持するために重要な役割を果しているという。従って、国の基本方針に沿

い国内60%、輸出40%の比率を守って輸出をするのだと云う。

輸出ものは国内ものに比べて安いのが普通で最高の値開きは10%である。輸出はコンビーフが主体であるが、若干のEXTRACT ESSENCEもある。これはスープや肉用ペーストの原料である。

輸出先は英国と米国半々であるが、年によって若干の変化はある。欧州はEEC条約で難かしく、必ずしも好い顧客になってはない。イタリー、スペイン、オランダには生肉の輸出は可納なのだが値段が折合はない。北欧諸国との間には協定が出来ていないので輸出はしてない。ドイツに対してはコンビーフを輸出している。

口蹄疫の問題があるため、アメリカ向けには煮沸冷凍肉によって生肉の需要が開けるといふことが、いわれているが、このための設備だけで60万ドルはかかるというので今のところやる積りはない。設備は出来ても米国政府との交渉だけでも2、3年はかかるし大変なことになる。滲透する消毒液が0.5/100万分(PPM)を起えてはならない規定もある。聞いた所ではこの設備をしたのはアルゼンチンのリービツヒだけだとのことである。

肉牛の品種改良は13年前から国として計画、実行したことになっているが必ずしも充分でない。この会社は直営の牧場を持たない。この会社とリービツヒ及びインタナショナルの三社で牛の買付競争が行なわれて高値が維持される。

この会社は自分の銘柄より海外の顧客のブランドで作って輸出するのが多い。会社は今の所格別の拡張計画を持っていない。

3. 外資系ブリゴリフイコL社

この会社は1920年100%の外資系会社として設立されたもの

である。1920年と云えば丁度第一次大戦直後のことで歐洲全体が食糧不足に悩まされていた時代であることを思い出す必要がある。保守調の強い経営態度とびっくりする程の形式主義にはおどろいた。この間パラグワイ会社が長い間不採算で経営不振に悩まされつづけてきたことはよく知られている。当然なような気がした。遂には1968年初頭、株式半分を同国系の某社に売渡したという情報がある。今年に入って急速に合理化へのゆきぶりをかけ、直営14牧場のうち、2牧場を手放したと言っている。残りの牧場もコスト低下のための集約化に努力しているという。

今年パラグワイ全体で25万頭分の牛肉の輸出割当てが決定されたがその全数消化は困難であろうと云はれている。この会社も一応割当量3分の1程度あるから8万頭の輸出枠をもっているのだが達成出来るかどうか分らないと云っている。政府側で輸出値段を規制する迄のことはしない。この輸出割当てを決めた背景としては、元来、輸出のために国内消費量まで喰い込むことを防ぐためだという。

この会社では屠殺に必要な量の20%を自分の直営牧場でまかなっている。養豚や養鶏はパラグワイでも最近始まった許りでそのための工場を運営する程の量がないという。パラグワイの肉牛の国内消費は約40万頭であるが輸出は大体20万頭であるという。国全体として600万頭の牛が居るが相場として、1キロ当り1.6ガラニであるという。また若牛は1.8ガラニする。パラグワイの牛は一頭当り380キロ平均として計算している。歩留りは48%位のものであろうという。

4. 外資系フリゴリフイコ

インターナショナル プロダクツコーポレーションは米国ストック

トンのオグデンが全額出資した会社である。今後もこの出資方針を貫くという。

輸出の指令はストックトンにある，同系会社を通じて受取り，それに従って出荷するようになっている。輸出先はアメリカ東岸及び西岸が主である。輸出品は全部コーンビーフである。

1年間に80万ケース位を輸出する。1ケースの中に24罐入り12罐入りがあるが内容重量は8キロあるから、全量で約6400トンという計算になる。48%歩留りを逆算すると牛の重量で13,000トンとなる。一頭平均3.80キロとすれば3,500頭に相当する。チャコ地方に8万ヘクタールの牧場をもち1年間に7,000乃至8,000頭を自給するという。

一般からは年契約で買付けている。

5. PARAGUAYAN MEAT PACKERS, S. A

(PAMPA)

馬肉専門のフリゴリフイコということで特に調査した。馬肉を大量に喰べさせられるのは、日本人位のものだからと思ったのだが、矢張りその通りでこの会社の得意は日本のY商社である。

この会社は資本金4,800ガラニでオランダ系とアルゼンチン系(S E P A)の共同出資によるものである。パラガイ資本はない。従業員90名，屠殺場2ヶ所，冷蔵設備1ヶ所をもって肉を12度～18度Cの間で保存するという。日本の外，英国にも輸出している。英国向けは犬用即ちペット食用だろうとのこと，日本向は人間用である。

食肉用に馬を飼うことはあり得ないから，カウボーイ用とか馬車用の

馬の余分のものを購入している。従って相場があるようでないようなものだという。一頭260キロ位の馬を2700ガラニ(22ドル内外)で仕入れるのだという。1キロ当り8セント(29円)ということになる。

日本の小売り値なら100グラムの値段かと間違える安値である。

6. その他

○ 1965年以來、インタナショナル・プロダクツがパラガイ国内の食肉加工場のなかでは最も活動的な肉牛買付けを行っているといはれるこれはアメリカ系外資であるだけに製品の「コーンビーフ」として米国東部、西部にわたってコンスタントに輸出され、結好引合っていることを証明するものである。

○ 1964年から1967年迄のリービツヒの加工肉用肉牛の買付価格の年間平均は次のとおりに伝えられる。

1964	22.0ガラニ	6.3円
1965	21.0 "	5.9円
1966	19.0 "	5.3円
1967	19.5 "	5.4円
1968(推定)	18.0 "	5.0円
	(雄牛 16.0 "	4.5円)

単位1キロ当り 円換算……13.0ガラニ=1ドル3.60円

○ 市中市場にて：

一般庶民の買物市場で混雑している。

ポリビア程ではないが設備も劣っている。肉の屋台店では一店当り

5.0キロから200キロ位のものを並べたり、つり下げたりして何十

軒と連っている。聞き得た価格を記しておこう。

ロモ(上肉)	9.0 ガラニ	71 セント	253 円
ロミエント(極上肉)	11.0	87	312
アルゴ(骨付肉)	6.0	47	170
豚 ()	5.5	44	158
川魚(ドラデインギョ)	4.0	3.2	115
卵(ダース)	4.0	3.2	115
鶏肉(見当らず)			
じゃがいも	15~18	12~14	43~50
マンジュオカイも	5.0	4.0	145
米	20~3.0	16~23	58~83

単位—1キロ当り 円換算……13.0ガラニ=1ドル=360円

○ アスンシヨンスーパーマーケット

アスンシヨンにも一ヶ所セルフサービス式スーパーがある。外国人顧客も多いが、いはばアスンシヨンのエリートスーパーである。

小売価格を示しておく。(1キロ当り)

品 種	ガラニ	セント	円
牛 肉 ロ モ	9.5	7.5	240
リ ブ	7.0	5.5	198
ソーセージ	13.0	10.0	360
鶏 肉	9.9	7.8	280
〃 (1羽)	14.0~17.0	11.0~13.4	400~480
卵 (ダース)	4.5	3.5	126
マンジュオカ 粉	2.6	2.1	76

米	2.6~3.4	2.1~2.7	7.0~9.7
砂糖	3.5~3.8	2.8~3.0	1.00~1.08
インスタントコーヒー (ネスカフェー200 g 罐入)	1.09		3.10
飼料用とうもろこし (ばら)	1.0~1.2	8~9	2.9~3.2
りんご(4~5個)	5.0	4.0	1.45

過去20年間に牧畜業者は牛の種類改良に力を入れてきた。そのためにいろいろな種類の牡牛を輸入してきた。なかでも、ヘレフォード、ショートホーン、アパデーアンガスに特に力を入れた。最近ではセブ、サンタガートルード、ブラーミンも輸入している。これらと土地の牡牛との間に生れる中間種にのぞみをかけたのであるが必ずしも旨く行っているといえない。これらは在来種以上にデリケートで色々な問題を提起するようになったからである。従ってここ6~7年間の牧畜業者の主な関心はむしろ施設の改善という方面に向けられたものである。また、牧草の改良、水源の確保及び病気の管理等に注意を向けて、畜牛の品種改良は頓座した段階にある。

○ チャコ地方西北部 V I L L A H A Y E S は 2 2, 2 7 9 平方マイルを占める。これはパラガイ全土の14%に当るのだが、全国600万頭の約3分の1に当る200万頭の肉牛を飼育している。牧場経営の規模は次の通り分類される。

(チャコ水資源委員会)

牧場数	飼育頭数
3.14	0
5.22	1~50

牧場数	飼育頭数
101	51～ 100
112	101～ 250
111	251～ 500
108	501～ 1000
80	1001～ 2000
84	2001～ 5000
47	5001～10,000
14	10,000以上

合計1,502

7. パラガイ国牧畜関係資料及び統計

○ 企画庁統計

面積 1,570.47 平方マイル

人口 2,166,000 人 国連推定

(農村人口が65%を占める)

増加率 2.6% 年

都市 アスシオン 3,600,000 人

エニカルナシオン 3,500 0

コンセブレオン 3,400 0

ピラリカ 3,000 0

輸出高 4,897,400 0 ドル中食肉は32.64%を占める。

(1,695,600 0 ドル)

通貨 1.26 ガラ = 1 ドルの公定レート

- 「COOPACAR」によると1967年の年間各社の加工処理頭数の内訳は次のとおり。

1967年頭数	輸出加工用	国内消費用	合計
リービツヒ	82,333	—	82,333
インターナショナルプロダクト	①103,786	6,715	110,501
インダストリアル パラガイドカルネ	39,565	1,061	40,626
合計	225,684	7,776	233,460

①若干アルセンチより輸入

- 政府開発計画によればパラガイ国の開発には農牧林業の振興が基本となる。特に地方人口の所得水準を上げるために牛の牧畜が最も注目されている。

牛の生産は国内総生産の11%を占め農業生産の31.3%重要性をもつものである。全輸出のうち34%が肉及びその加工品によるもので2,000万ドルに達している。

- 全畜産額の55%は肉牛によって占められている。20%が豚、11%が乳中、残り14%が羊、山羊及び鶏類による。

肉牛の55%がチャコ地方残り45%が東部一帯で生産される。

屠殺総数（畜産全体）

単位1,000頭

年	国内消費	加工用	合計
1956	472.3	74.7	547.0
1957	479.8	84.6	564.4
1958	489.7	178.6	668.3
1959	474.2	196.2	670.4
1960	442.0	148.0	590.0
1961	424.5	185.0	609.5
1962	461.1	172.8	633.9
1963	399.1	177.9	577.0
1964	433.8	185.6	619.4
1965	442.1	236.5	678.6
1966	402.5	167.3	569.8

企画庁中央銀行

国立勧銀による肉牛産かへの融資

100万ガラニ・uドル(100万)

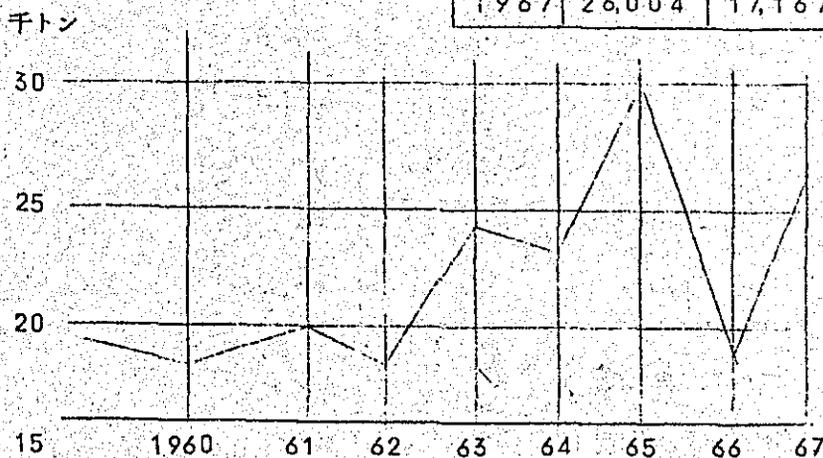
年	投資	商業	合計
1962	5.67 0.5	13.6 0.1	7.03 0.6
1963	7.65 0.6	3.47 0.3	11.12 0.9
1964	122.3 1.0	3.82 0.3	160.5 1.3
1965	290.0 2.3	6.11 0.5	351.1 2.8
1966	3.21 0.26	160.5 1.3	481.5 3.9

国立勧業銀行

○ 1968年の屠殺数を推定するのは時期尚早であるが、大体185,000頭から195,000頭位処理されるであろう。これは昨年の225,307頭に比べると可成り少ない数字である。世界市場の価格は一樣ではないがコーンビーフの価格は比格的安定している。肉エキ스는若干相場も弱いようだが、皮革相場は回復しつつある。

イ、食肉輸出の推移

年	輸出量 トン	金額 US千ドル	年	輸出量 トン	金額 US千ドル
1953	3,763	1,572	1960	17,872	7,136
1954	4,557	2,104	1961	20,030	8,626
1955	5,872	2,324	1962	16,987	7,474
1956	11,016	4,594	1963	23,505	10,523
1957	8,559	3,729	1964	23,046	14,748
1958	18,587	8,168	1965	28,961	18,747
1959	19,328	7,136	1966	18,893	13,839
			1967	26,004	17,167



中央銀行

ロ、パラガイ牛と屠殺数

単位 千頭

年	飼育頭数	輸出向屠殺	屠殺総数
1950	4,803	64.6	519.0
51	4,912	22.4	510.8
52	4,951	29.3	536.0
53	4,978	12.3	547.0
54	4,910	26.9	563.0
55	4,972	64.7	559.3
56	4,732	74.7	588.8
57	4,871	84.6	587.5
58	5,033	178.6	658.7
59	5,149	196.2	678.4
60	5,263	148.1	637.3
61	5,436	185.0	711.8
62	5,561	172.7	702.4
63	5,714	173.0	665.5
64	5,928	185.6	693.8
65	(1)6,030	233.7	694.0
66	(1)6,139	250.0	694.0

パラガイ中央銀行

(1) S P L推定

ハ、パラガイ 会社別 輸出向屠殺数

単位 1000 頭

年	リービツヒ	インダナン ヨナルプロ ダツツ	インダストリ アルブラガイ ドカルネ	その他 の会社	合 計
1957	40.1	39.3	5.2	—	84.6
58	67.8	64.1	16.2	42.4	190.5
59	66.4	72.3	28.4	29.6	196.7
60	63.8	63.3	21.9	—	149.6
61	72.6	65.1	47.4	—	185.1
62	75.2	66.8	32.9	—	174.9
63	66.4	77.6	29.4	4.5	177.9
64	60.0	67.6	43.4	8.6	185.6
65	75.2	97.8	46.0	14.7	233.7
66	86.3	—	—	—	—
67	108.3	—	—	—	—

SENALFA PARAGUAY

ニ、パラガイ国の主要輸出は次表のとおりである。

	1967	1966	変化%
食肉	17.2	13.8	+24.0
丸た材	6.2	8.5	-27.7
タバコ	3.4	2.5	+36.2
桐油	2.9	2.6	+13.7
綿	2.3	2.0	+15.2
カーブラコ油	2.0	3.1	-35.7
ココナ油	1.6	1.7	-6.8
材木	1.5	2.2	-31.5
香油	1.5	1.4	+6.2
コーヒー	1.5	2.0	-25.8
牛皮革	1.4	2.6	-43.8
マテ	0.6	1.6	+61.6
動物皮革	0.5	0.48	+11.2
フルーツ	0.4	0.6	-36.6
その他	5.3	4.3	+21.0
合計	48.3	49.4	-2.2

ホ、国別、年別、食肉輸出

食肉	1962		1963		1964		1965		1966	
	トン	US1000弗	トン	US1000弗	トン	US1000弗	トン	US1000弗	トン	US1000弗
イギリス	67728	32878	86700	41550	73080	61920	73012	50520	49723	36681
アメリカ	82036	31660	103480	46524	84653	55570	118505	74980	103310	69115
ドイツ	2511	2055	8770	930	4503	480	3821	862	3445	233
フランス	611	782	870	1520	2598	385	2355	1711	1000	4045
スイス	388	52	—	—	563	415	837	620	165	97
ベルギー	1534	335	2760	530	4553	2324	4623	2650	5032	3286
イタリア	476	435	2330	4220	19750	8532	11400	12460	796	5339
オランダ	9763	4280	9160	3384	9734	7475	16867	8114	14240	8783
スペイン	—	—	3720	105	6950	264	23034	16114	5687	192
チリ	200	05	100	15	123	910	223	201	36	221
ブラジル	—	—	3230	420	5370	690	3280	534	3295	609
オーストリア	390	20	—	—	—	—	—	—	—	—
デンマーク	—	—	—	—	300	61	302	63	302	61
カナダ	2165	1180	4900	2642	4190	2710	4420	2531	3647	2349
南アフリカ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アイスランド	375	170	—	—	5092	226	1036	50	—	—
ベルギー	—	—	—	—	29	11	3043	1237	3087	1726
スウェーデン	—	—	—	—	55	65	80	160	—	—
ノルウェー	—	—	10	04	14	10	—	—	13	10
ユーゴスラビア	—	—	—	—	40	100	—	—	—	—
ギリシヤ	—	—	—	—	244	166	3482	2090	696	278
イスラエル	155	80	100	60	144	95	200	140	155	106
英領	1256	682	1714	930	4092	2980	3881	2550	3986	2527
コロンビア	—	—	—	—	—	—	20	150	10	70
エジプト	—	—	—	—	15	10	—	—	27	18
スペイン領	—	—	40	20	40	30	16	11	—	—
アメリカ領	212	113	—	—	108	73	—	—	206	116
アルゼンチン経由	—	—	3716	1910	1020	1550	10602	7430	1467	3286
アルゼンチン	—	—	3490	450	2075	374	752	60	3907	164
フィリピン	—	—	29	10	20	14	3675	1942	—	—
イタリヤ	05	03	—	—	—	—	—	—	—	—
セイロン	—	—	20	10	93	56	—	—	—	—
リビヤ	15	10	30	13	—	—	—	—	—	—
キプロス	10	05	—	—	—	—	—	—	—	—
コロンゴ	40	23	—	—	—	—	319	24	—	—
その他の	—	—	—	—	—	—	—	—	509	171
日本	—	—	—	—	—	—	08	10	—	—

第 4 章 アルゼンチン

1. アルゼンチンの国内消費と輸出
2. 輸出の詳細
3. 食肉輸出か国内消費か
4. 国営食肉委員会
5. フリゴリフイコ GAP
6. 食肉商協同組合
7. O A-P 横ストックヤードにて
8. フリゴリフイコ A & S
9. その他
10. アルゼンチン資料(統計)

1. アルゼンチンの国内消費と輸出

牛

牛の生産は1935年以降700万頭から1,000万頭乃至1,200万頭(230万トン)に増加しているが、この増加分は殆んど国内消費の増大に充当されたものである。輸出は1953年、54年の朝鮮動乱時代前後に100万頭を割る程度に減少したが、それを除いては、いつも200万頭内外で変動している。増減の著しい傾向は認められない。

羊

羊は第二次大戦中に1500万頭の生産を上げていたが最近約1000万頭(20万トン)程度まで減少している。

大戦中の増加分は殆んど輸出の増大によるものである。羊の国内消費は過去30年間コンスタントで600万頭(12万トン内外)である。

豚

豚の国内消費には従来著しい増加は認められないのであるがここ、5、6年若干増加している。現在200万頭(20万トン)

牛、羊、豚、の生産比率

最近10年間の傾向はトン数によると夫々、85% 7% 8%の比率で一定している。

食肉総生産は250万トンから290万トンの間で増減している。

国内消費の傾向

生産比率と国内消費の比率は次の通り

	牛	羊	豚
生産	85	7	8%
消費	85	6	9%

羊の輸出比率が豚のそれより高いためにこの差異がでて来るものである。

アルゼンチン国の国内消費量

この国の人口は1935年の1300万人から1967年には2300万人に増加している。一人当りの年間食肉消費は大戦直後の好景気時代には100キロをオーバーして110キロにも達した。しかし戦前、戦後を通じて95キロ乃至100キロの間で一定していることは注目値する。従ってアルゼンチン国内の食肉消費は人口増加に比例して増加している。牛肉がその85%を占めており羊豚が夫々6.9%位であることは前述の通りである。

(附属資料)

JUNTA NACIONAL DA GARNES RESENA 1967

(3, 4, 6, 7, 14, 15, 55, 56, 57,)

2. 輸出の詳細

アルゼンチンの輸出高は国営食肉委員会の審査をパスしたものでなければならない。

(資料：DIGESTO DE NORMAS RELATIVAS A LA PREPARACION DE CARNES PARA EXPORTACION Y CONSUMO 参照)

フリゴリフィコは殆んど全て輸出高としての資格をもっている。特にアルゼンチン食肉公団 GAP は強大な背後関係と資本力をもってスウィフト、アーマー、リーピット等の英米系フリゴリフィコと共に輸出に重要な役割を演じている。GAP は全世界の各国市場に直営事務所か代理店をもっている。

(GAP CORPORACION ARGENTINA DE PRODUCTORES DA CARNES)

(資料 CAP Y ECONOMIA GANADERA ARGENTINA 参照)

国営食肉委員会はアルゼンチン DECRETOS - LEY NO. 8509/56
JUNTA NACIONAL DE CARNES 法によって成立したものである。

国営食肉委員会は国内消費の安定を図る目的をもって国内流通に干渉するだけでなく輸出についても輸出税徴収の権限をもって監督する立場にある。

アルゼンチンの牛の輸出は生牛のまま他の南米諸国に向けるもの冷蔵冷凍肉として主として英国、欧州に輸出するもの、更にコンビーフ等の加工肉として米国、英国、その他に輸出するものに三大別される。

以下牛、豚、羊について各項述べる。

アルゼンチン食肉価格の推移

1935年頃を基準として1967年迄の価格の推移が別表の通り示されている。連邦政府はセンサスによる生計費指数は1967年19000倍になっている。これを中心にして比較すると

生牛	28.000倍
牛肉	24.000倍
羊	14.000倍
生豚	15.000倍
羊毛羊	15.000倍

である。牛の価格が生計指数以上に高騰していることを示している。

加工牛肉(コンビーフ等)の輸出 (63.64.)

加工牛肉には米国側の輸入制限がないから、アメリカ向けが重要な役割を演じている。英国と合わせると3分の1を占める輸出高であり、残りの3分の1がその他の国に(主として欧州諸国)に輸出される。

冷凍、冷蔵牛肉の輸出 (59, 61.)

1967年38万トンに達している。

従来は英国が3分の1又は4分の1を占める重要仕向国であったが最近口蹄疫問題で度々輸入禁止の噂が流れてアルゼンチンの輸出業者をいらだたせている。

欧州では伝統的に西独、イタリア、オランダ、スペインが大きな顧客となっている。

生きた牛、羊、豚の輸出 (70)

生牛の輸出20万頭(1967年)の中チリー向が約半分を占めペルー向7万頭、パラガイ向2万頭がこれに次ぐ。

生牛は1967年約3万頭をアラビア諸国に輸出した特例を除けば毎年4万頭の大部分をチリーに輸出している。生豚の輸出には見るべきものはない。

冷凍羊肉の輸出 (65)

1967年の合計57,000トンに達している英国、ギリシャが最大の顧客先である。

冷凍豚肉の輸出 (66)

増減著しく、英国向の輸出は皆無となった。現在ではイタリアが最大の顧客である。

食肉エキスの輸出 (68)

1967年3766トン中イタリア向が過半数の2120トン占める。

(附属資料)

JUNTA NACIONAL DA CARNES RESENA 1967

(58, 59, 61, 63, 64, 65, 66, 68, 70.)

CAP“月間情報”による。(1968年3月)

3. チレンマ：食肉輸出か国内消費か

食肉が輸出産業のなかに占める地位が次第に低下するのは、現行為替制度特にその交換レートの不具合によると説明してよい。

食肉輸出に不利な為替事情が短期間の現象である間はそれ程大きな影響はなかった。所が、現在のように数年にわたってこんな状態が続くと、それが食肉市場にあたえる影響は大きい。

この影響は先づ、アルゼンチン国内の若牛不足という事態に見ることが出来る。これは若牛が輸出用肉の主なものとなっているからである。最近の早割による影響も考えられるが、結局市況と収益性に対する家畜業者の調整がこの様な結果を生んだものである。

家畜業者が対抗手段としてとる撰択方法には二つある。

一つは420キロから450キロ程度のものを輸出用若牛として100キロ当り75ドルから78ドル程度の代価を期待することである。或はさもなくば、350キロから380キロ位の若牛を100キロ当り80ドル以上の価格で国内消費用の市場に売り出すかと云うことになる。

現在では、後者を選ぶもの、即ち国内用若牛に向ける家畜業の数が次第に多くなりつつある。手間をかけて育てて成牛にすれば、100キロ当りの値段が下るということなら、若牛の間に良い値段で売った方が利益になるという単純な計算によるものである。従って次第に肉牛の重量が減少する。半身の重量で1964年には206キロに下ったのだが、1965年には209キロ、1966年には204キロに低下している。1967年には190キロと推定されている。これは1935年以来最

低である。

連邦政府とグラン、フエノス・アイレス州の場合1962、1963年に夫々171キロと云う平均が出ているがこれは明らかに早ハの影響によるものと見られている。早ハの被害を受けて牧草の供給が充分に行われなければ早急に市場に売ってしまわなければならないからである。このような食肉市場の一頭当り重量の低下は結局輸出に悪影響を与える。

海外で継続的需要のある4半身牛肉は普通50キロから52キロの重量を要求されるが、そのためには成牛なら520キロから530キロなければならない。

輸出用の骨を取除いた4半身の準備をすることは結局、長い目で見て大きな将来市場を創り出すことになるのだということなのだが、このために平均450キロの若牛が要求される。その理由は成牛と若牛との骨の重量の比率が違ふからである。若牛は骨が軽く歩留りがよいからである。必ずしも若牛の肉が柔らかいということ、従って良い値段で売れるのだと考えるのではない。

国内消費のために若牛を生産するという傾向が変らないならば、アルゼンチンの食肉輸出業者の直面する問題は近い将来ますます深刻化するのである。そして海外食肉市場におけるアルゼンチンの供給国としての地位を危いものにする事になりかねない。

重い成牛を生産者に育てさせるための刺戟は、結局その販売価格以外の何ものもない。とすれば輸出価格の魅力ということである。

輸出税減免措置という刺戟策も短期間のものであれば例外的措置として受けとられるだけであり、長期的に効果のある対策とはならないであろう。長期的に輸出課税を免除するか軽減させる以外に道はないということである。

連邦政府及びラテン、ブエノス・アイレスにおける国内消費の年別、

正味キログラム数

年次	半身正味キログラム平均重量
1960	196
1961	185
1962	171
1963	178
1964	187
1965	196
1966	191
1967	182
	(算術平均)

全国消費用半身牛肉の正味キログラム重量平均

年次	キログラム
1960	207
1961	206
1962	197
1963	193
1964	206
1965	209
1966	204
1967 (推定)	190

4. フンタ ナショナルレ デ カルネ (国営食肉委員会)

JUNTA (フンタ) はアルゼンチン国の法律によって、国の食肉統制を行う権限をあたえられている。食肉統制は輸出を生産の20%程度に管制して国内消費を不当に圧迫しないようにすることを目的とする。従って食肉輸出は国の課税対象の行為と見做される。フンタがその輸出課税の業務を担当している。現在牛15%、豚と羊12%が輸出課税率である。この輸出課税の業務を安定させる目的でもあるから、食肉の輸出業務は免許制である。輸出商になるためには別に定められた格付基準に合わなければならない。

極く最近、今まで良い顧客であった英国も口蹄疫を理由として輸入制限を始めた。欧州諸国も全般としてそのような傾向にあるため大問題である。たゞし南米間はどこも生肉のまま輸出される。

フンタは又輸出のための最低価格についても監督をする。現在国家間による取引が行われているのは対スペインだけであるが他の国々はみな輸出商による商業ベースによるものである。特に公営企業である。OAPは巨大な組織をもって世界各国に代理店や事務所をもって営業している。

食肉の環境衛生は農務省の所管であり、食肉の等級査定はフンタの所管である。

フリゴリフイコ O A P

5. ブエノスアイレスの市外部にあるこのO A Pフリゴリフイコはさすが
に食肉の国アルゼンチンの公営企業O A Pを代表するにふさわしい巨大
さである。

昼間に取引された生きた牛、豚、羊は全て夜中から朝にかけて屠殺をす
ませてしまう。この作業所の従業員は1,400人で1日に2,300から
2,500頭の牛を中心として処理する。屠殺された牛は99%が生肉と
してそのまま需要にまわされる。ここの冷蔵能力はアルゼンチンで一番
大きい。ブエノスアイレス市としては1日に7,000頭分位の牛肉を必
要とするのであるが、ここだけで1,500頭分位を供給している。スウ
ィフトやアーマーもこの市に供給してはいるが輸出の方が比率が高い。
ここでは屠殺料は1キロ当たり5.5ペソの支払いである。

アルゼンチンでは牛の成長標準としては2年で200~250キロの
子牛になり、4年で400~500キロの成牛となる歩留りは大体55
~60%である。アルゼンチン人は肉に対する舌が肥えていて大部分若
牛を好むので、その相場は高いのが普通である。

ブエノスアイレスのメルカドに出入りする肉の大卸商（マタリフェ）
は50軒位あるであろう。彼等は大体夫々5軒から10軒位のディーラ
ー（卸商）をもっていて、その傘下の小売店に配給する。小売店は所謂
肉屋さん（ブッチャー）及び食堂である。前述の肉の大卸商（マタリフェ）
は毎日数十頭から数百頭を購入し、フリゴリフイコに屠殺処理を依頼す
る。処理されたものは早急にディーラーを通して販売される必要がある。
る 流通販売の実務は朝行われなければならないから、屠殺は夜8時に開始
して朝2時には終了するようにしている。生肉はそのまま市中に出すよ
り冷蔵して置いたものが喜ばれる。それは小さく切るのが切り易いから

である。

6. 食肉商業協同組合にて

ブエノスアイレス5千軒の肉屋さん達の組合である。この組合が肉屋さん達のために結成されて65年になるという。食肉の国アルゼンチンの食肉商組合だけあって実に立派なものである。

アルゼンチンの食肉流通は国の統制下にある。各流通段階における利益の制限が主目的である。食肉小売の店頭では食肉の種類、カットの部分に応じた公定最高価格以下で売らなければならない。所がメルカドや地方仲買の牛の仕入値が自由であるから小売店の公定最高価格は毎日変化する、それはメルカド以後の流通段階で食肉商は20%最高利益を超えてはいけないという統制である。所が、これは全体の平均であり肉の場所によって価格が違うのが当たり前であるから、牛全体を構成する部分の割合から全体で20%となるように場所毎の比率がきまっている。牛肉を例にとると、メルカドで1キロ当り70ペソ(70円位)で売買されたのち、マタリフエーの手に入る。それを屠殺処理すると、歩留りの関係上目減りがあるので、それを考慮に入れ、ディーラーのマーヅンを合わせると食肉小売店への卸価格は精肉換算で150ペソ位になる。

マタリフエはこのなかで1キロ当り8.5ペソ以上利益をとってはならないという委員会(フンタ)の規則がある。食肉小売店はその卸価格に20%のマーヅンを加えた価格を中心として部分毎の値段を決めた上販売することになるという。

所が、メルカドの価格だけは自動相場である。エスタンチャ(牧場主)はアルゼンチンの国の中心勢力であることを思い合わせよう。

流通段階で委員会（フンタ）による価格統制がしかれていることは特に留意しなければならないことである。

牛肉は四半身の重量を基準にして4段階に分けられる。

105キロ以上	NOVILLO
100~70キロ	NOVILLITO VAQUILLONA
70~60キロ	VAGA
60~40キロ	TERNERA MAMON

幼牛ほど軽いが高価になる

国営委員会が値段を決める20%マージンを次のようなやり方で表にしている。NOVILLOSを例にとると

卸価格ペソ	100	106	以下	160	迄
マージン20%	20	21	#	32	
公定標準価格ペソ	120	127	#	192	
HUESO SIN CARNE	5	6		8	
HUESO CON CARNE	65	70		105	
COGOTE	65	70		105	
PECHO	65	70		105	
FALDA	70	75		110	
AZOTILLO	100	105		160	
CARNAZA COMUN	115	120		185	
AGUJA	120	125		190	
CUADRIL CON HUESO	130	140		210	
ASADO	130	140		210	
ENTRANA	145	155		235	
VAOIO	155	165		245	
MATAMBRA	165	175		260	
CARNAZA DE OOLA	175	185		282	

GARNAZA DE PRELETA	180	190		285
BOLA DE LOMO	185	195		295
NALGA	185	195		295
BIFES	200	210		315
PALOMITA	210	225		340
PESETO	215	230		345
CUADRIL SIN HUESO	215	230		345
LOMO	270	290		435

7. O A P (フリゴリフィコ) 横のストックヤード (生牛の市場)にて

○ COMPRADO (コムブラド……買手)

マタリフェ (肉卸商) またはフリゴリフィコ (パッキングプラント) の代理として牛を購入する仕事をする。彼等は月給で傭はれているのが普通である。彼等はこの生牛の市場で一群の牛 (例えば10頭から20頭位) について夫々の等級を目で鑑定し体重の目減りの状態、脂肪ののり具合、屠殺した場合の精肉の歩留り等を詳しく目で測定して値決めをする。購入と決まったらその牛に対する自分の目測の結果が実際にフリゴリフィコで屠殺され、処理されて決る数字とどの程度食い違ふか比較される。従って買人の正しい評価が腕の見せ所と言うことであらう。

○ REMATADOR (レマタドール……売人)

コムブラドが上述のようにマタリフェやフリゴリフィコのために買うための鑑定家であるようにこれに対応するのが売人側となるレマタドールである。レマタドールはコムブラドと交渉して出来るだけ有利に売るのが腕のみせ所である。レマタドールは通常次に示すコンシグナタリオ (委託販売業者) に傭われている。彼等が買人の立場を兼務しないのは米国で法律によって兼務が禁止されているのと同じ事情によるものである。

○ CONSIGNATARIO (コンシグナタリオ……委託販売業者)

牛を育ててマーケットに売りたいという人の依頼を受けて、このような市場に出すことを商売とする業者である。生牛を育てた人には GROWER FEEDER, RANCHER等がいる。コンシグナタリオはアメリカで言えばコミッションブローカーに当り2~3%のコミッション

ンで委託販売する。

コングナタリオは委託主の牛を体重の目減りを少なくして最も良い相場で売れるように上手に運搬することが腕の見せ所である。

○ GUILLERMO SOLA (ギレルモ ソラ……請負運搬業者)

生牛の運搬を請負う業者である。殆んどトラック輸送で、1台当り1.5トン積であるが成牛で2.5～2.7頭、幼牛で4.5頭を運ぶ。大体の相場は1キロメートル当り80～90ペソ(大体円価と同じ)である。という。運搬業者は顧客の荷物で、しかも、生き物の牛を大切に運搬しなければならない。前後左右にゆれたり加速、減速により所謂角突き合わせによる牛の損傷が多い程売渡し価格に悪い影響をあたえるものである。

○ MERCAD (メルカド……市場)

シカゴのストックヤードにあたる。ブエノスアイレスのメルカドはアルゼンチンの相場の指標的役割を果たす。

水曜日は2万頭、他のウィークデイには1万5千頭位入荷する。最高3万5千頭のときもある。メルカドで売れ先が決まれば夫々のマタリフエが指定する屠殺場(フリゴリフィコ)に運搬される。フリゴリフィコが自ら購入する場合には勿論直接そのフリゴリフィコに送られる。

8. FRIGORIFICO A & S にて

シカゴにインターナショナルパッカーと言ふ会社がある。元来スウィフトの国際部門として発達した世界各国のパッキングプラントを承継いで世界的規模で操業する会社である。

アルゼンチンではフリゴリフイコ、アーマ、デラブラタ及びコンパニヤ、スウィフト、デラブラタの両社共このインターナショナルパッカーの系統下で操業している。従って両者共名前はアーマとスウィフトと称しているが、米国にあるアーマ社及びスウィフト社のいずれとも無関係である。勿論アルゼンチンからの輸出もかなりある。しかし何れも公営企業であるOAPとは無関係である。

煮沸冷凍肉は生肉と比較したとき歩留り70%程度になるため運賃の上で有利になることだけは取柄である。しかし何と云ってもコスト高にならざるを得ない。アルゼンチンの1967年の実績は次のとおりである。

牛	5 1.2 2 7.0 6 4頭
羊	4 9.0 0.0 0 0 0頭
豚	3.0 0 0.0 0 0 0頭

M/T	輸 出	国内消費	合 計
牛	68 0.0 0 0	1 89 0.0 0 0	2 57 0.0 0 0
羊	7 5.0 0 0	1 2 5.0 0 0	2 0 0.0 0 0
豚	1 1.0 0 0	2 0 1.0 0 0	2 1 2.0 0 0

牛肉輸出68万トンのうち煮沸冷凍肉は(2.4%)15.900トンである。スウィフトはこの煮沸冷凍肉では大きなウエイトをもっている。約60%9.525.トンを占めている。

ブエノスアイレス、メルカドで牛を購入したりするのであるが、国営食肉委員会が市場価格をコントロールして基本価格を定めている。

- ① 地方の牧場市場からの購入
- ② フェノスアイレス メルカドからの購入
- ③ フリゴリフイコ及び牧畜業者からの購入

フリゴリフイコに屠殺を委託したときは1キロ当り10ペソ(1.0円)を受取る代りとして皮や血をフリゴリフイコにあたえるのが、普通である。フリゴリフイコは皮や血で収入を計るのである。

9. その他

- 生牛の相場(1キロ当り) — 1ペソは1円と考えてよい。

脂肪の少い罐詰用の牛

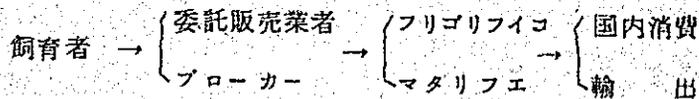
やせたもの35ペソ 太ったもの40ペソ

一般市場の精肉用の良い牛(380~450キロ)

平均62ペソ(55~65ペソ)

子牛(200キロ程度) 2年もの 90ペソ

- 冬に入る前になると子牛が多くメルカドに出てくる。今までの普通牛の相場は25ペソから最高70ペソにもなった。
- 去勢牛をステイアと云う。ステイアは冬期間に太る。
- GAPのためのマタリフエ50店、その他のためのマタリフエ50店がある。



○ スーパーマーケットにて (7/30)

さつまいも	1キロ	54ペソ	15.4セント
牛肉 (ステーキ用)	1キロ	450ペソ	1.3ドル
豚肉	1キロ	230ペソ	6.5セント
羊肉	1キロ	120ペソ	3.5セント
鶏肉	1キロ	350ペソ	1.0ドル
卵	1ダース	200ペソ	5.5セント
ブドウ酒	1リットル	60~70ペソ	17~20セント
ココロラ	小	18 "	5 "
"	中	25 "	7 "
"	大	52 "	15 "
マテ茶	1キロ	115 "	3.5 "
米	1キロ	94 "	2.7 "
さつまいも	1キロ	54 "	1.5 "
ネスカフェインスタント		450 "	1.3ドル
砂糖	1キロ	77 "	2.2セント
しょうづめ	1キロ	180 "	5.2セント
ハム	1キロ	220 "	6.3セント

単位 キロ	トルセンチン		ポリピタ		パチガイ		アラシル		米 国		日 本	
	アエノステイルス スーパーにて 1米ドル=	ラバス 市場にて 1米ドル=	アスノシジョン 市場にて 1米ドル=	サンバシロ スーパーにて 1米ドル=	ロスアンゼルス スーパーにて	東京にて	円	円	円	円	円	円
牛 肉	ステーキ用 150 \$ =350ペソ	470	066 \$ ~100	240 ~360	075 \$ =127カラ=	270	250 350 500	150 200 720	540 800	1800	円	円
豚 肉	065	230	—	—	044	160	200 260	160 220 290	580 800 050	800	円	円
羊 肉	035	125	085 散肉 030	300 110	055	200	250	—	—	550	円	円
鶏 肉	100	360	1羽 130	470	080	290	290	1.20	440	750	円	円
卵 1ダース	055	200	050	180	035	125	120	050 060 220	180 220	160	円	円
ヨーヨー	052	—	—	—	—	—	—	—	—	210	円	円
ハム	063	—	—	—	—	—	500	—	—	230	円	円
米	027	—	018	65	022	80	95	037	145	140	円	円
いも類	サツマイモ 015	—	サツマイモ014 ジャガイモ017 コウカトモ016	50 60 58	ジャガイ 013 コウカ 004	47 14	60 60	ジャガイ 027 ジャガイモ	100	100	100	50
砂糖	022	—	—	—	030	110	55	044	160	130	円	円

アルゼンチン資料

(JUNTA NACIONAL DE CARNES
RESEÑA 1967による。)

1. 牛肉(トン数)屠殺(頭数)推移(資3. 4. 14. 15. 55)

同 上 その2

2. 羊肉, 豚肉(トン数)生産推移(資3. 4)

同 上 その2

3. 食肉生産グラフ, 全食肉と牛肉(資6)

4. " " 羊と豚(資7)

5. アルゼンチン1人当り年間消費量

6. 牛, 羊, 豚, 国内消費のグラフ(資57)

7. キロ当り価格指数の推移(資58)

同 上 その2

8. 冷凍冷蔵肉輸出推移(資59)

9. 冷凍冷蔵肉国別輸出推移(資61)

同 上 その2

10. 加工牛肉の国別輸出推移(資63)

同 上 その2

11. 加工牛肉の輸出(資64)

12. 冷凍羊肉の国別輸出推移(資65)

13. 冷凍豚肉輸出(資66)

14. 食肉エキスの国別輸出推移(資68)

15. 生肉国別輸出推移(資70)

同 上 その2

資 3. 4. 14. 15. 55

1. 牛肉(トン数) 屠殺(頭数) 推移

単位	輸 出		国 内		合 計	
	1000トン	1000頭	1000トン	1000頭	1000トン	1000頭
193.5	524	1,946	1,008	5,098	1,532	7,044
36	587	2,242	996	5,139	1,583	7,381
37	659	2,418	1,066	5,430	1,725	7,848
38	609	2,207	1,081	5,567	1,690	7,774
39	700	2,528	1,107	5,642	1,807	8,170
40	596	2,121	1,095	5,567	1,690	7,688
41	752	2,762	1,102	5,513	1,854	8,276
42	722	2,647	1,003	5,054	1,725	7,701
43	631	2,279	972	4,947	1,603	7,226
44	599	2,069	1,020	5,019	1,619	7,088
45	374	1,293	1,082	5,291	1,456	6,584
46	443	1,700	1,239	6,217	1,682	7,917
47	643	2,449	1,381	6,958	2,024	9,407
48	472	1,755	1,487	7,448	1,958	9,203
49	467	1,693	1,536	7,787	2,003	9,480
50	429	1,730	1,615	8,168	2,044	9,898

単位	輸 出		國 内		合 計	
	1000ト	1000頭	1000ト	1000頭	1000ト	1000頭
1951	256	1,085	1,623	7,893	1,879	8,978
52	275	1,193	1,513	7,592	1,788	8,786
53	230	927	1,535	6,969	1,766	7,896
54	231	973	1,585	7,160	1,815	8,133
55	415	1,792	1,732	8,212	2,147	10,004
56	602	2,546	1,873	9,118	2,476	11,664
57	586	2,528	1,874	9,434	2,459	11,962
58	647	2,796	1,894	9,482	2,541	12,278
59	517	2,187	1,428	6,961	1,944	9,148
60	385	1,590	1,508	7,294	1,893	8,884
61	396	1,719	1,749	8,493	2,145	10,212
62	545	2,491	1,834	9,300	2,378	11,790
63	732	3,210	1,874	9,717	2,605	12,926
64	585	2,390	1,435	6,978	2,019	9,368
65	502	1,984	1,493	7,149	1,995	9,134
66	586	2,362	1,735	8,714	2,321	11,076
67	680	2,880	1,890	9,780	2,570	12,660

JUNTA NACIONAL de CARNES

-2-

-83-

資 3. 4

2. 羊肉、豚肉（トン数）生産推移

単位：1,000トン

	羊 肉			豚 肉		
	輸出	国内	合計	輸出	国内	合計
1935	59	116	176	29	103	131
36	61	120	182	31	113	144
37	56	131	187	38	118	156
38	68	142	210	25	97	122
39	60	146	206	21	101	122
40	80	114	194	14	113	127
41	76	130	206	51	136	186
42	122	137	259	81	169	250
43	160	142	302	129	214	343
44	171	141	312	182	258	439
45	161	136	297	125	236	360
46	163	143	306	71	148	219
47	176	134	311	25	99	124
48	108	131	239	27	121	148
49	85	128	213	32	139	171
50	48	122	170	27	132	159

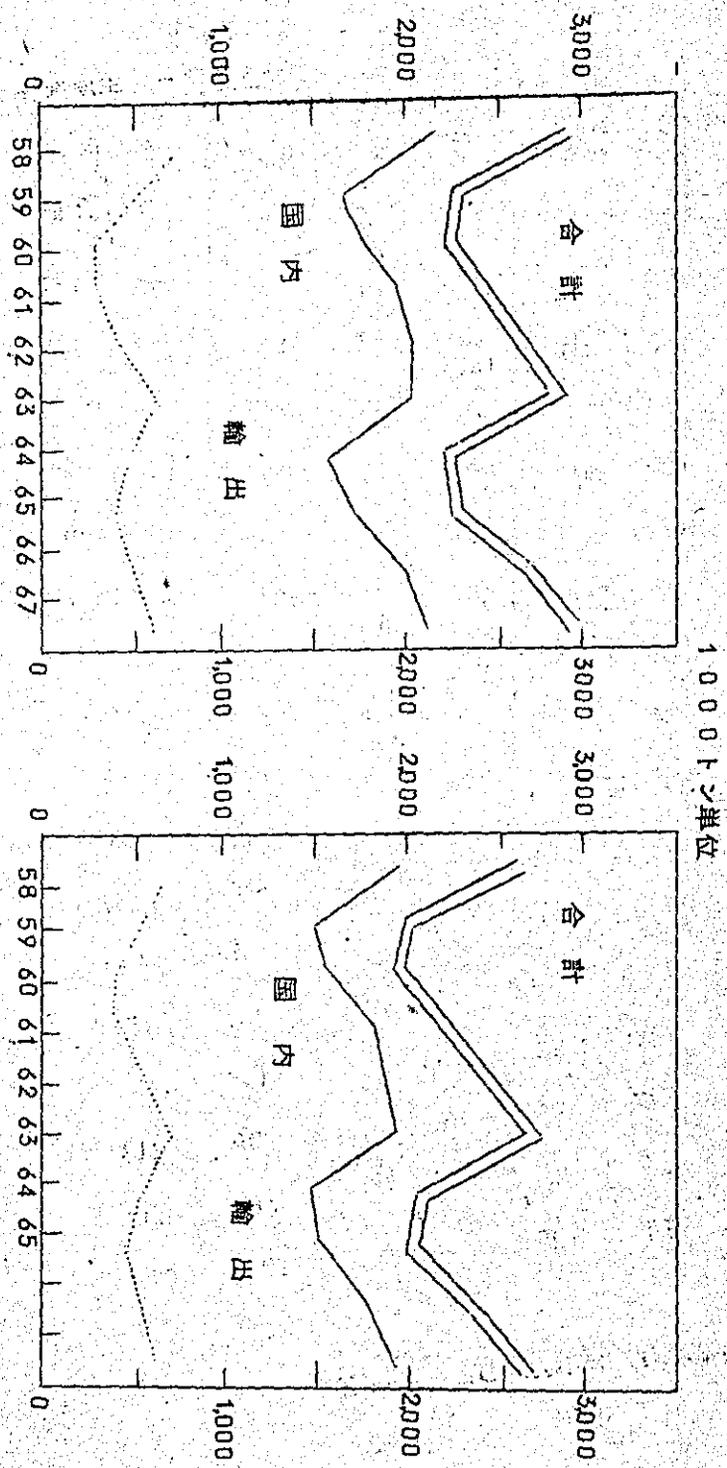
羊肉・豚肉(トン数)生産推移

単位：トン数 年	羊 肉			豚 肉		
	輸出	国内	合計	輸出	国内	合計
1951	31	123	154	16	121	137
52	72	121	192	13	124	136
53	65	127	192	23	132	155
54	74	131	206	23	133	156
55	80	119	199	13	143	156
56	64	121	185	36	159	195
57	53	109	163	34	171	205
58	39	133	171	24	157	181
59	36	129	164	20	142	162
60	45	123	169	16	172	188
61	41	126	166	8	179	187
62	42	124	166	6	153	159
63	36	114	151	12	145	157
64	20	115	135	10	144	154
65	37	126	163	7	206	213
66	65	123	188	17	216	233
67	75	125	200	11	201	212

JUNTANACIONAL DE CARNE

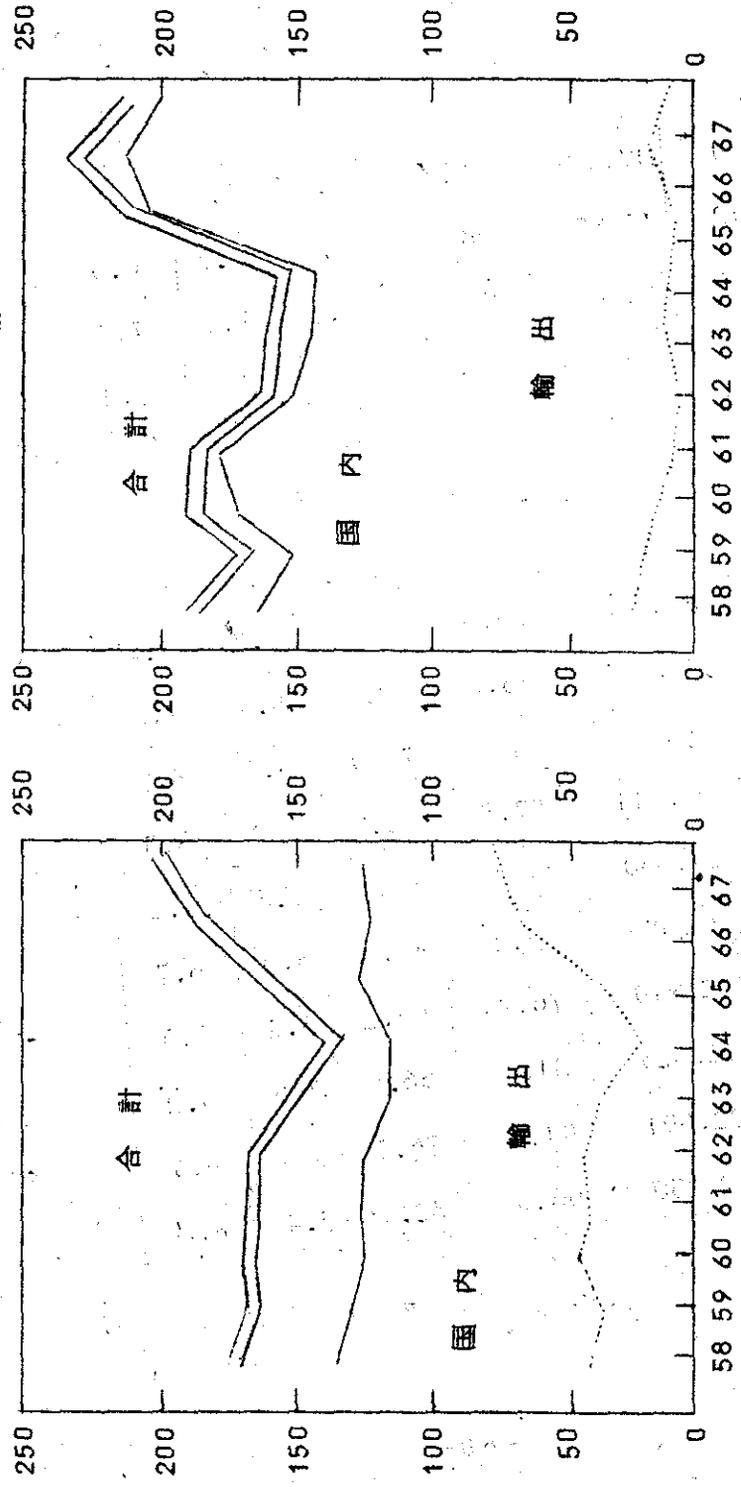
3. 食肉生産

合計：牛，羊，豚 牛 肉



資料 7

4. 羊 食 肉 生 産 豚



資 56

アルゼンチン

一人当り年間消費量(キロ)

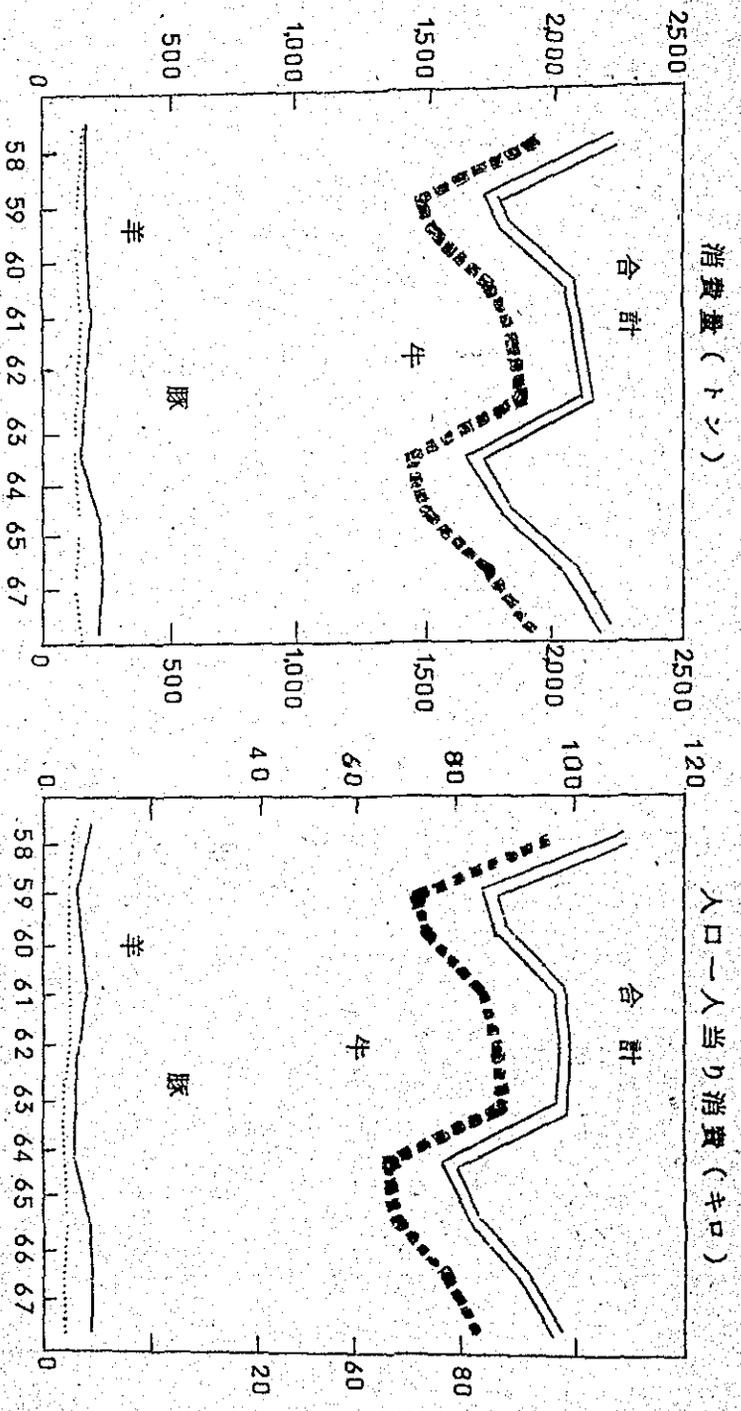
年	人口 1000人	全食肉	牛肉	羊肉	豚肉
1951	17.481	106.8	92.9	7.0	6.9
52	17.859	98.4	84.7	6.8	6.9
53	18.202	98.5	84.3	7.0	7.2
54	18.544	99.6	85.4	7.1	7.1
55	18.893	105.5	91.6	6.3	7.6
56	19.250	111.9	97.3	6.3	8.3
57	19.615	109.8	95.5	5.6	8.7
58	19.980	109.3	94.8	6.7	7.8
59	20.325	83.6	70.2	6.4	7.0
60	20.669	87.3	73.0	6.0	8.3
61	21.011	97.8	83.3	6.0	8.5
62	21.350	98.9	85.9	5.8	7.2
63	21.688	98.4	86.4	5.3	6.7
64	22.019	76.9	65.2	5.2	6.5
65	22.325	81.6	66.8	5.6	9.2
66	22.691	91.4	76.5	5.4	9.5
67	22.950	96.6	82.4	5.4	8.8

5. アルゼンチン

一人当り年間消費量 (キロ)

年	人 口 1000	全食肉	牛肉	羊肉	豚肉
1935	13,044	94.1	77.3	8.9	7.9
36	13,260	92.8	75.1	9.1	8.6
37	13,490	97.5	79.0	9.7	8.8
38	13,725	96.2	78.8	10.3	7.1
39	13,948	97.1	79.3	10.5	7.3
40	14,169	93.3	77.2	8.1	8.0
41	14,402	95.0	76.5	9.1	9.4
42	14,638	89.4	68.5	9.4	11.5
43	14,877	89.2	65.3	9.5	14.4
44	15,130	93.8	67.5	9.3	17.0
45	15,390	94.5	70.3	8.9	15.3
46	15,654	97.7	79.2	9.1	9.4
47	15,927	101.3	86.7	8.4	8.2
48	16,268	106.9	91.4	8.1	7.4
49	16,656	108.2	92.2	7.7	8.3
50	17,070	109.4	94.6	7.1	7.7

6. (牛, 羊, 豚) 国内消費の推移



7. キロ当り価格指数の推移

1935, 36, 37年の
平均を100とする。

年	生産量	牛肉	生牛	羊	生豚	綿羊
1935	90	91	91	89	91	82
36	98	104	100	103	86	112
37	101	99	100	109	96	116
38	100	98	96	88	111	82
39	102	99	105	100	106	91
40	104	104	114	116	84	110
41	107	107	127	118	86	116
42	113	117	159	139	99	111
43	114	122	159	136	104	96
44	114	130	173	148	99	94
45	136	136	173	145	124	100
46	160	144	173	164	223	126
47	182	152	218	178	306	140
48	206	152	241	184	286	215
49	269	184	282	238	261	266
50	338	224	327	334	398	515

年	生計費	牛肉	生牛	羊	生豚	緬羊
1951	462	344	523	572	598	1,012
52	641	570	736	637	719	439
53	667	640	882	775	782	540
54	692	640	909	776	884	557
55	777	640	909	853	901	762
56	881	640	1,036	1,275	1,081	1,368
57	1,099	960	1,146	1,449	1,425	1,821
58	1,446	1,360	1,836	1,643	2,023	1,892
59	3,091	4,768	6,391	4,309	4,152	4,371
60	3,935	5,501	6,886	4,717	4,109	5,114
61	4,466	5,331	6,264	4,120	4,992	5,093
62	5,733	6,459	7,309	5,178	8,056	6,854
63	7,110	8,395	10,568	10,425	10,873	12,079
64	8,684	13,280	18,414	14,959	13,144	15,245
65	9,166	19,200	22,964	14,918	15,205	13,023
66	14,727	20,698	22,700	14,084	13,942	14,539
67	19,032	24,161	27,596	13,538	20,997	14,970

8. 冷凍、冷蔵肉 輸出推移 (単位トン)

年	英 国		其 他 の		合 計
	冷 凍	冷 蔵	冷 凍	冷 蔵	
1957	2,563.5	24,269.3	9,389.8	1,296	36,352.2
58	2,013.4	23,613.6	10,019.9	6,332	36,280.1
59	1,594.0	20,118.7	11,116.7	14,862	34,515.6
60	2,107.1	17,869.6	6,314.0	22,394	28,550.1
61	1,208.9	14,175.6	10,264.9	12,391	26,888.5
62	2,426.6	17,097.0	16,714.8	26,708	38,909.2
63	3,085.6	19,686.8	23,118.4	7,220.0	53,110.8
64	1,900.4	12,397.9	22,057.6	57,242	42,080.1
65	9,959	9,841.8	17,713.9	62,199	347,715
66	9,200	11,237.1	23,413.2	45,742	401,445
67	11,683	8,475.3	23,506.9	49,311	380,816

9. 冷凍、冷蔵肉 輸出推移

単位：トン

国 別	冷 凍 肉						ち		冷 蔵 肉		の	
	1964	1965	1966	1967	1964	1965	1966	1967	1964	1965	1966	1967
総 合 計	420,801	347,715	401,445	380,816	181,221	160,617	158,113	134,064				
英 国	142,983	108,377	121,571	96,436	123,979	98,418	112,371	84,753				
英国以外	277,818	239,338	279,874	284,380	57,242	62,199	45,742	49,311				
西 独	47,843	38,012	23,125	12,936	1,924	7,152	2,612	173				
イ タ リ ー	104,933	61,686	56,965	69,132	37,553	21,608	9,883	9,246				
オ ラ ン ダ	20,472	19,389	30,986	35,870	2,421	1,090	1,459	252				
ベ ル ギ ー	15,943	7,891	9,743	12,275	1,718	1,528	807	1,128				
ハンガリ	11,828	4,042	7,446	1,606	—	—	—	—				
ポ ル ガ リ ヤ	341	—	—	1,143	—	—	—	—				
フ ラ ン ス	17,058	10,840	8,120	16,074	2,596	3,359	2,081	3,046				
ス ペ イ ン	2,415	4,852	5,718	5,518	129	15,798	13,708	15,279				

国別	冷凍冷蔵肉			1967	うち冷蔵			肉のみ
	1964	1965	1966		1964	1965	1966	
ポルトガル	4,885	3,750	6,066	7,691	—	—	—	
スイス	1,288	4,447	5,280	10,041	2,638	932	971	
ギリシャ	5,065	3,404	7,707	13,375	—	—	10	
ポランド	2,000	—	13,796	—	—	—	—	
西独	6,635	7,724	7,094	4,522	—	—	15	
チエコ	—	—	—	—	—	—	—	
ポリビア	121	—	—	113	121	—	—	
チリ	9,097	10,881	14,289	17,168	7,554	10,298	13,158	
ペルー	4,817	3,329	5,737	7,503	520	593	1,102	
ウルガイ	—	—	—	1	—	—	—	
インラエル	9,821	15,062	2,236	18,167	—	—	—	
エジプト	—	—	—	—	—	—	—	
ノールウェイ	1,154	126	656	487	68	—	—	
その他	502	235	3,317	4,758	—	—	—	

10. 加工牛肉の国別輸出推移

単位：トン

ヨーロッパ
コーズトビーフ
フリケット

国 別	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967
全 国	63,107	54,374	74,679	46,742	35,136	48,410	72,975
英 国	2,1259	23,266	25,500	13,733	7,146	13,714	28,253
米 国	23,605	16,675	28,638	17,291	14,221	20,125	28,027
ヒリッピン	5989	2950	3,729	5,818	3,555	1,334	1,940
カナダ	1,949	842	1,578	1,301	1,026	1,592	2,738
オランダ	2,994	2,411	3,904	2,200	2,466	2,600	1,731
ベルギー	270	730	2,194	906	305	494	653
西 独	900	1,049	1,088	557	976	1,583	1,641
フランス	16	10	12	6	53	218	52
ギリシヤ	115	382	359	44	384	878	518
イタリア	242	478	810	446	1,278	266	595
スイス	64	38	68	18	25	95	46
スエーデン	89	88	76	2	16	11	61

国 別	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967
ポリア	29	111	2	20	3	—	2
パナマ	49	34	4.4	47	66	37	82
プエルトリコ	1,438	1,210	1,656	1,152	59.0	1,426	1,514
イラク	68	107	61	67	1	1	—
イスラエル	41	21	6	7	10	16	12
日本	38	42	86	13	64	91	86
ヨルダン	304	153	23	56	—	80	214
レバノン	196	340	373	6	8	—	179
シリア	164	98	104	113	—	81	41
南阿	10	46	7	1	2	2	—
英領	1,806	2,028	2,530	1,355	1,176	1,473	526
ラソ領	325	394	329	248	119	201	232
北米領	298	263	371	236	898	752	798
その他	849	608	1,131	1,099	747	1,360	3,034

1.1. 加工牛肉の輸出

ヨーロッパ
オーストラリア
アジア

年	合計	英 国		米 国		その他
		トン	%	トン	%	
1957	106,451	51,172	48.1	32,255	30.3	23,024
58	98,653	41,902	42.5	33,192	33.6	23,559
59	59,851	24,009	40.1	22,568	37.7	13,254
60	48,869	17,229	35.2	18,556	38.0	13,084
61	63,107	21,259	33.7	23,605	37.4	18,243
62	54,374	23,266	42.8	16,675	30.7	14,433
63	74,679	25,500	34.2	28,638	38.3	20,541
64	46,742	13,733	29.4	17,291	37.0	15,718
65	35,136	7,146	20.3	14,221	40.5	13,769
66	48,410	13,714	28.3	20,125	41.6	14,571
67	72,975	28,253	38.7	28,027	38.4	16,695

1.2 冷凍羊肉の国別輸出推移

単位：トン

国 別	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967
合 計	3,918.1	3,159.6	3,958.2	3,802.6	1,753.0	2,772.4	4,862.9	5,656.2
英 国	2,932.0	2,060.7	2,276.6	2,169.2	1,170.5	1,688.5	1,989.5	1,741.0
西 独	11	139	82	436	22	—	718	1,510
イ タ リ ー	11	159	21	77	190	135	360	362
オ ラ ン ダ	49	380	140	650	73	85	460	479
ベ ル ギ ー	—	138	65	334	191	78	551	864
フ ラ ン ス	715	1,220	2,081	581	859	117	1,041	2,167
ス イ ス	18	41	48	66	110	117	218	287
キ リ シ ヤ	6,072	7,936	9,960	12,605	2,686	8,621	18,490	21,567
エ ジ プ ト	2,234	—	3,311	—	—	—	—	—
ペ ル ー	124	545	629	1,004	707	1,487	5,619	7,056
仏 領 ア フ リ カ	501	57	130	126	96	—	—	—
チ ャ ー ニ ス	—	—	—	—	712	—	—	—
そ の 他	126	374	349	455	179	199	1,277	4,880

1.3 船 隻 出 入 船 出

単位：トン

国 別	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967
合 計	1297.8	5,119	3,295	8,587	4,143	1,601	1,559	6,158
英 国	3,978	115	—	—	—	—	—	—
西 独	726	108	32	325	201	15	147	8
イタリ-	4,868	1,846	2,169	4,302	2,055	168	4,295	3,137
オランダ	1,309	492	40	487	216	—	92	24
ベルギー	554	148	8	31	5	—	11	33
フランス	502	1,361	238	2,211	1,328	21	32	62
ポルトガル	—	—	—	750	—	—	936	489
スイス	69	—	—	—	12	—	—	—
ギリシヤ	56	—	—	—	—	—	—	11
ノルウエイ	127	49	22	36	51	—	46	36
チエコ	—	—	—	—	—	—	—	—
チリ-	288	268	459	194	—	1,171	1,899	68
ペルー	45	68	99	67	55	59	674	256
西ドイツ(獨)	219	210	107	72	69	7	3	—
スペイン	—	—	—	49	91	151	3,621	485
その他	237	454	121	63	60	9	5	1,554

1.4. 食肉エキスの国別輸出推移

単位：トン

資 68

国 別	1959	60	61	62	63	64	65	66	67
イタリ-	534	676	898	870	1,116	361	283	1,214	2,120
西 独	302	241	621	446	524	368	57	129	465
スイス	110	139	78	68	194	11.5	5	235	85
オランダ	37	182	152	219	320	169	18	259	496
英 国	225	146	94	26	184	67	82	51	102
フランス	47	121	57	56	214	80	83	243	179
オーストリア	96	45	43	1	64	31	20	48	15
ベルギー	—	50	1	1	—	20	5	11	113
スウェーデン	18	12	5	3	1	3	1	5	5
フィンランド	—	10	4	1	2	—	—	—	—
米 国	174	336	382	4,560	278	109	33	147	58
カナダ	10	14	21	5	13	13	8	9	5
スペイン	—	2	—	6	118	35	41	103	107
その他	7	6	20	15	33	14	2	6	16

表 70

15. 生 牛 国 別 輸 出 推 移

単位：頭数

年	オーストラリア	フランス	チリ	バングラ	ペルー	ウルグアイ	その他	合計
1957	1,0732	1,471	91,195	529	1,2255	3839	718	119,739
58	1,421	681	61,529	331	6439	42	—	70,443
59	—	182	87,062	218	1,054	37	32	88,585
60	—	21	151,063	155	826	69	—	152,134
61	1,293	40	165,567	159	2,293	1,701	53	171,106
62	14,002	1,219	163,858	2,2368	48,713	114	—	250,274
63	8,774	7,671	125,762	21,182	113,086	35	15,309	291,819
64	524	1,211	110,247	228	1,6828	34	3,6978	166,050
65	114	188	85,708	141	15,727	—	147	102,025
66	12	237	73,532	16,988	27,792	42	513	119,116
67	711	1,285	109,177	21,786	72,193	1	1,808	206,961

DIRECCION NACIONAL de ESTADISTICA Y CENSOS

1.6. 生羊 国別輸出推移

単位：頭数

年	ボリビア	ブラジル	チリー	パラガヤ	ペルー	ウルガイ	その他	合計
1957	—	500	1,924.8	39	267	58	—	2,011.2
58	—	539	1,526	91	239	9	6,334	8,738
59	—	88	3,080.7	50	11	5	—	3,096.1
60	—	163	6,776.2	19	5	37	—	6,798.6
61	—	337	6,408.1	59	67	13	555	65,112
62	150	784	43,833	408	43	34	—	45,252
63	—	1,110	42,926	367	—	41	732	45,176
64	160	13	24,228	—	—	15	—	24,416
65	—	104	10,387	—	—	85	—	10,578
66	200	23	39,546	160	51	28	—	40,008
67	—	5	44,980	2,314	5,604	560	30,889	84,352

DIRECCION NACIONAL de ESTADISTICA Y CENSOS

第 5 章 ブ ラ ジ ル

1. 食肉生産の推移
2. 食肉生産の内訳
3. 輸 出
4. ブラジルウイルソン社
5. コチア産業組合
6. サンパウロ州政府農務局
7. ブラジルスウィフト社
8. フリゴリフィコプリミート
9. ブラジル政府農産市場課
10. 市営市場における小売価格

食肉生産の推移

ブラジルの人口は1960年7100万人であったが1970年推定では9500万人になっている33%の増加である。

経済成長率は1960年6.7% 1961年7.3% 1962年5.4% 1963年1.6% 1964年3.1% 1965年3.9% 1966年4.4%このような指数を背景として食肉生産の推移を比較してみよう。

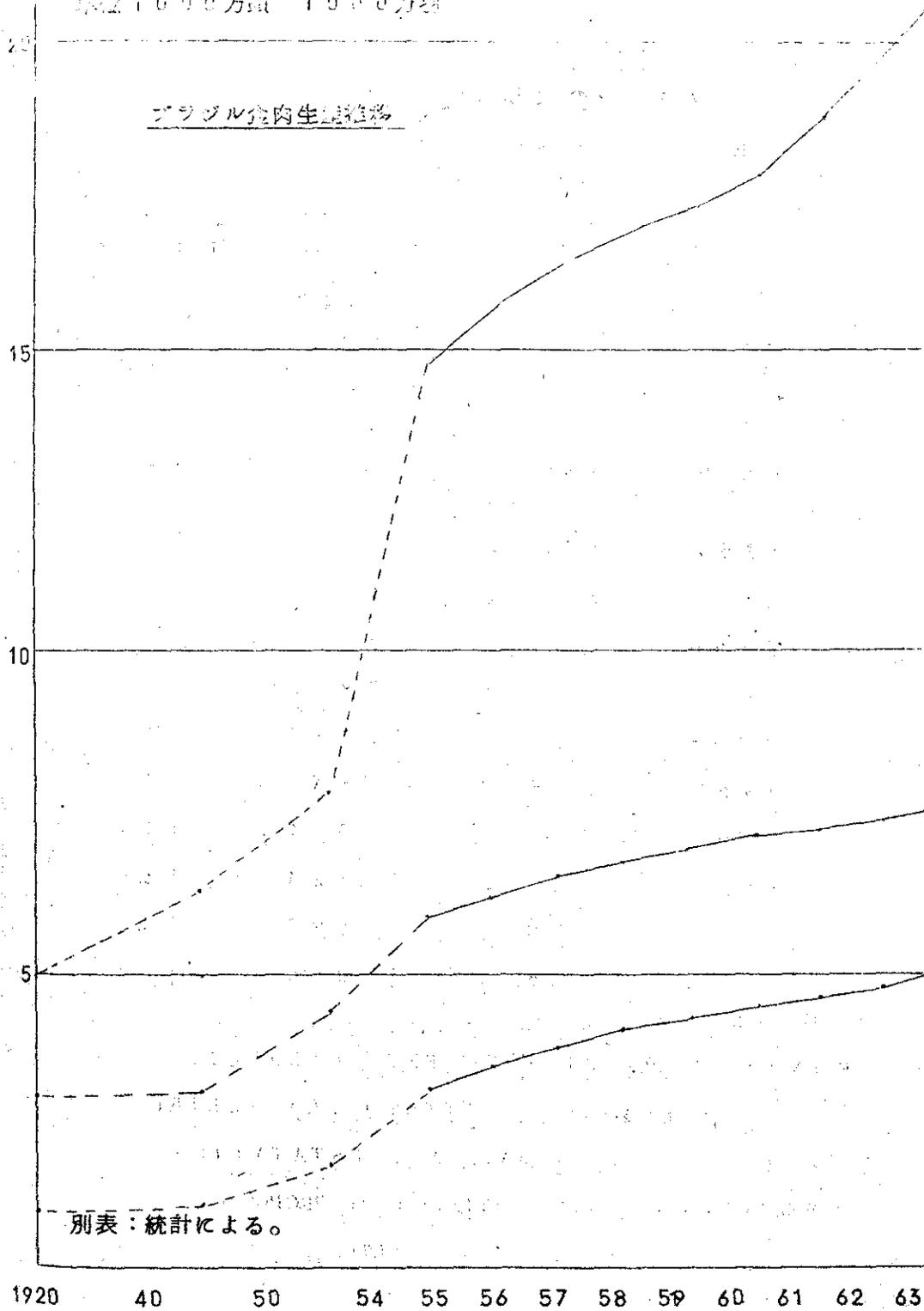
牛の生産は1954年6000万頭から10年後1963年8000万頭に増加している。33%の増加でありこれは人口の増加率と同じになる。

豚の生産は同期間に3500万頭から5600万頭になった。これは60%の増加である。一方食肉資源として注目をあびて来た鶏は1億4400万羽から2億1900万羽へと52%の急増振りである。豚及び鶏のいずれも人口の倍近い増加振りを示している。

ブラジルの食肉増産上の障害はいつも飼料難ということになっている。それは牧草不足と飼料高が原因であるという。放牧地の開拓乾草及びとうもろこし等飼料増産に関する論議がいたる所で聞かれる理由であろう。

単位 1000万頭 1000万羽

ブラジル食肉生産推移



別表：統計による。

ブラジルの食肉生産 ①

牛 サンパウロ州対比

年	ブラジル 1000頭	サンパウロ 1000頭	対比%
1920	34271	2442	7.1
1940	34458	3174	9.2
1950	47089	5722	12.2
1954	60700	8523	14.0
1955	63608	8958	14.0
1956	66695	9364	14.0
1957	69548	9961	14.3
1958	71420	10197	14.3
1959	72829	10301	14.1
1960	73962	10394	14.0
1961	76176	10624	13.9
1962	79078	11099	14.0
1963	79855	11090	13.9

FONTES : 1920/40/50 - CENSO GERAL do
 BRASIL - INSTITUTO BRASILEIRO
 de GEOGRAFIA e ESTATISTICA
 1954/63 - SERVICO ESTATISTICO da PRODUCAO
 MINISTERIO da AGRICULTURA

ブラジルの食肉生産 ②

豚 サンパウロ州対比

年	ブラジル 1000頭	サンパウロ 1000頭	対 比 %
1920	16,168	2,934	18.1
1940	16,850	2,671	15.8
1950	23,034	2,671	11.6
1954	35,296	4,305	12.2
1955	38,606	4,582	11.9
1956	41,416	4,820	11.6
1957	44,190	5,020	11.4
1958	45,262	5,103	11.3
1959	46,825	5,055	10.8
1960	47,944	4,925	10.3
1961	50,051	5,086	10.2
1962	52,941	5,195	9.8
1963	55,990	5,132	9.2

FONTES I 1920/40/50-CENSO GERAL do BRASIL-INSTITUTO
BRASILEIRO de GEOGRAFIA e ESTTISTLA
1954/63-SERVICUO ESTATISTICO da PRODUCAO MINISTERIO de
AGRICULTURA

ブラジルの食肉生産 ③

鶏 サンパウロ州対比

年	ブラジル 1000羽	サンパウロ 1000羽	対比 %
1920	52.940	8.995	17.0
1940	62.912	10.807	17.2
1950	77.830	13.162	16.9
1954	143.996	28.359	19.7
1955	154.210	31.472	20.4
1956	160.352	32.336	20.2
1957	165.958	34.140	20.6
1958	169.102	35.557	21.0
1959	175.401	36.369	20.7
1960	184.133	37.531	20.4
1961	194.916	38.449	19.7
1962	207.415	40.119	19.3
1963	218.695	41.168	18.8

FONTESI 1920/40/50-CENSO GERAL do BRASIL-INSTITUTO
BRASILEIRO de GEOGRAFIA e ESTATISTICA
1954/63- SERVICIO ESTATISTICO da PRODUCAO
MINISTERIO da AGRICULTURA

2. 食肉生産の内訳

牛肉には生肉の外貯蔵、分配、手段としての冷蔵肉の占める割合が大きい。乾燥肉は広大な国土の内陸部交通不便な地域の貯蔵手段としてまだ可成りのウエイトを占めている。

罐詰等加工肉は少い。輸出に重要な位置を占めるアルゼンチンの罐詰肉と比較される。その他豚の塩蔵肉、鶏の煙蔵肉は注目される。

ブラジル食肉生産 内訳

その 1

単位 M/T	1963	1964	1965
CARNE de BOVINE 牛 肉	1,191,969	1,259,426	1,312,119
VERDE 生 肉	903,107	903,694	967,471
FRIGORIFICADA 冷蔵肉	203,189	256,134	250,574
DESITRATADA エキス	63	159	124
SALGADA 塩蔵肉	2,753	1,790	2,720
DEFUMADA 煙蔵肉	—	8	3
FNLTADA 缶詰	12,175	14,916	22,547
CHARQUE 乾 肉	66,937	77,964	62,283
MOOTO	2,131	2,571	2,522
RABOS	1,614	1,785	2,161
DE SOL	—	465	1,714

ANUARIO ESTATISTICO DO BRASIL 1966

ブラジル食肉生産 内 訳

そ の 2

単 位 M/T	1963	1964	1965
CARNE de SUINE 豚 肉	2 206 54	2 198 89	2 267 42
VERDE 生 肉	1 751 43	1 749 02	1 801 22
FRIGORIFI CADA 冷 蔵 肉	2 365 4	2 479 5	2 549 3
SALGADA 塩 蔵 肉	1 463 8	1 367 7	1 522 6
DE FUMADA 煙 蔵 肉	2 48 8	2 50 3	2 53 8
FULATA DA 罐 詰	3 09 5	2 50 1	1 44 3
CHARQUE 乾 燥 肉	6 8	5 5	8 4
CHISPES	1 41 4	1 35 7	1 69 7
RABOS	1 13	9 9	1 39

ANUARIO ESTATISTICO DO BRASIL 1966

ブラジルの食肉生産 内 訳

そ の 3

単 位 M/T	1963	1964	1965
CARNE de OVINE 羊 肉	2 684 1	2 910 0	3 255 1
VERDE 生 肉	2 632 8	2 794 5	3 048 2
FRIGORIFICADA 冷 蔵 肉	4 4 6	1 022	1 962
SALGADA 塩 蔵 肉	—	2	4
CHARQUE 乾 燥 肉	6 7	131	103

CARNE de CAPRINE 山 羊 肉	1 991 0	2 064 7	2 107 7
VERDE 生 肉	1 990 8	2 064 2	2 106 9
FRIGORIFI CADA 冷 蔵 肉	2	5	8

ANUARIO ESTATISTICO DO BRASIL 1966

ブラジルの食肉生産 内 訳

そ の 4

単 位 M/T	1963	1964	1965
CARNE de AVE 鶏 肉	7.939	15.708	18.036
FRESCA 生 肉	4.968	12.084	8.241
FRIGORIFI CADA 冷蔵肉	2.687	3.268	9.589
DESIDRATADA 煙 蔵 肉	353	349	195
ENLATADA 罐 詰 ほ か	3.1	7	11

ANUARIO ESTATISTICO DO BRASIL 1966

3. 輸 出

別掲2表の数字に喰い違いが認められるが理由が分からないのでそのまま提出する。

輸出が低下していることを注目しなければならない。ブラジルの食肉輸出は全体として2万トンから3万トンといった程度である。これはアルゼンチンの輸出50万トンとか60万トンとは比較にならない程小さな数字である。

ブラジルの食肉輸出

年	牛 肉		豚 肉	
	重量M/T	FOB US\$ 1000	重量M/T	FOB US\$ 1000
1954	75	58	—	—
1955	4.485	2.935	—	—
1956	11.081	5.030	0.5	0.2
1957	29.291	11.302	0.8	0.3
1958	43.351	18.940	1.371.0	1.079.5
1959	58.414	34.559	840.5	739.0
1960	14.137	9.711	3.95.2	3.74.5
1961	28.611	19.419	1.79.5	1.51.2
1962	23.654	14.335	5.87.4	5.20.1
1963	18.858	8.876	1.75.4	1.24.2
1964	18.103	10.992	—	—

FONTE: ESTATISTICA ECONOMICA e FINANCEIRA

MINISTERIO da FALENDIA

ブラジルの食肉輸出 内訳

上欄 M/T 下欄 US\$1000		1963	1964	1965
牛	冷蔵品	9,950 4,297	18,103 10,992	29,782 20,239
	加工品	5,791 3,970	7,400 5,388	16,812 12,354
肉	冷凍品	2,219 846	217 123	855 703
	塩蔵品	464 546	215 249	734 904
馬	肉	25 7	2,215 707	3,479 867
豚	肉	46 27	438 310	402 294

* SITUACAO ECONOMICA * BRASIL

4. ブラジルウイルソン社

ウイルソンの名の通り、この会社は米国ウイルソン社が100%投資した現地会社である。この会社の商標はスウィフトアーマーであるが、スウィフト社は無関係といわれる。この会社は52年前第一次大戦当時の欧州の肉不足を打開するため特に英国向け輸出を目的として設立されたものである。所がその後、アルゼンチンの場合と同様、ブラジルの国内需要が旺盛なため、輸出比重は次第に低下していった。現在この会社の扱う輸出量は5%に満たないだろうと云われる。英国向けの輸出は現在ではオーストラリア、ニュージーランドに取って代わられた状態であるという。

この会社の従業員は2800人、毎月の取扱高は250万米ドルに達する。輸出は年間を通じて約150万米ドル位だろうという。ブラジルでは高い流通税がいろんな意味で流通に変わった特性をあたえている。高い流通税を脱税するだけで相当大きな差益が出るからどうしても価格に混乱が起り勝ちである。一説によると申告されない取引が多いからブラジルの国民総生産等の公表額そのものも過少である筈だとも言われる。

各州間取引に対する取引税 15%

州内取引に対する取引税 17%

輸出の場合には6%が課税される。流通税は流通各段階における附加価値に対して賦課される性質のものである。従って輸出の場合の6%という数字は牧場主に対する流通税17%に相当する金額が根拠になっているかも知れないと云う。ということは、輸出会社であるフリゴリフィコの付加価値に対する流通税が免除されるということになる。

面接した人の意見によれば、ブラジル牧畜はなんと云っても国内市場第

一である。ブラジルでは過去数十年に亘って常に食肉不足の状態が続いているという。従って輸出はあくまで従属的なものである。ブラジルの食肉産業に国として一貫した輸出政策はないといっても良いだろうともいっている。

この会社で処理する国内向豚肉は全てCHILLかFROZENのものである。国内向牛肉の場合はCHILLかFRESHのままである。

AGING(3~4週間)後カットしてFROZEN MEATとして市場に出すものもある。

ブラジル産食肉の欧州向け輸出について現在別に大した問題は起っていない。価格のハンデ、味に関する趣向というものは国々によってそれぞれ違うものである。たとえばアメリカ人は柔らかでジューシイものを好む。所がブラジルではアメリカのフィーダーがやるようにトウモロコシを主飼料とはしないからどうしても肉の質はアメリカと同じにはならない。ブラジルの国内価格の現状ではトウモロコシを飼料としては引き合はないだろう。

欧州向け輸出は主として英国、オランダが相手であるが、在欧洲米軍用の罐詰コンビーフが可成り含まれている。

インターナショナル・パッカーズ社では現在日本にも大豆肉のプラントをつくる計画をもっていると聞いた。世界の食糧事情の将来を考えると、今後も全般的にいつも蛋白食品不足の事態が予測される。この点で考えると大豆肉は相当な役割を演ずるかも知れない。大豆肉は主としてハム、ソーセージ等のような加工食品には向いている。人工肉というものは菜食主義者にとっても朗報には違いない。

5. コチア産業組合畜産課

組合員には「コトリ」専門 (FEEDER) となることをすすめている。これは、2才牛で300キロ位のものを購入して、1日1キロの割合で体重を増加させるように飼育し大きくなったものを売る牧畜業である。成牛は2才半又は3才牛として450キロから500キロ位にすることを目標とする。300キロの2才牛の購入価格は一頭当り150コント (40ドル) が相場である。それを500キロに飼育すると一頭当り360コント (100ドル) となる。この差額は60ドルである。この60ドルのうち20ドル見当の飼料代を計算に入れるとマージンは40ドルであるから相当有利になる。ところが「コトリ」のための幼牛購入にはいろいろ問題がある。それは、幼牛飼育の牧畜業者は10頭や20頭の小数に分配することを好まず、普通500頭から1000頭位のものを一括して売ることを主張するからである。

コチア産業組合傘下には13000の組合員があり、全部で15万頭の牛をもっている。2.3年前は10万頭位と推定されたが、急速な増加ぶりである。組合は大部分20ヘクタールから30ヘクタールの小地主でありこの「コトリ」方式は非常に利益がよいらしい。(これらの小地主がサンパウロ、リオデジャネイロ、市に近い各州に散在する場合には特に好採算である。しかし近い所は地代そのものに値打ちがあることも考慮しなければならない)

「コトリ」飼育がアメリカのコーンベルト地帯のフィーダーのようによく行くことを念願としたいのだが、ブラジルの場合、牧草に問題がある。ブラジルの乾燥期に牧草が不足するということである。アメリカと同様乾草を貯えようとするのだが寒期直前に長雨が降って牧草の乾草が出来ない欠点がある。それにもかかわらず牧草管理なら日本人はうま

い筈だから「フィーダー」専門でやる牧畜はもってこいであると信じている。パラガイのイグアスで幼牛を育ててブラジルに輸入して飼育しようという構想がこのブラジルの「コトリ」計画に関連をもってくるわけだが、パラガイは生牛の輸出禁止をした。(筆者註：本報告書パラガイ篇で述べた通り、パラガイは幼牛不足国である。イグアスの幼牛は当面チャコ地方のエスタンシャに売らるべきであろう)

コチア産業組合では種牛としてフランスのシャロレーが良いと考えている。良い種牛は貴重な資産である。供進会等で入賞した牛には、ブラジルの銀行は積極的な融資の途を開いてくれる。

ブラジル全体としてもそうだがよりよい牛をつくりあげることは有利な事業であると信ずる。日本人はそんな技術を先天的に身につけている筈である。ブラジルにある東山農場では、ホルスタインの種牛を増殖する計画をもったのであるが、必ずしもスムーズではなかった。

現在牛乳生産に専念していると聞いた。サンパウロは700万の人口をもつ巨大都市に成長し、現在なお急速な工業発展が続いている。

サンパウロの牛の小売価格は年間で変動幅20%の上下がある。

牛が多く出される12月から5月の間は廉くなる。

ブラジルウィルソン社ではサンパウロ近辺の牛の入手難から奥地移転を計画中であると聞く。

ブラジルでは肉をとる羊は主として東北地方が中心である。ブラジル南部は緬羊である。ここで国内用毛原料10万トンを出産する。アルゼンチンには「日毛」が進出しているが、ブラジルにはリオグランデに「倉紡」が進出している。緬羊も5才までは毛をとるが6才以上となると肉を目的として飼育する。ここでは牛は牧畜であるが鶏は製造産菜のようなものと考えている。ニワトリ1キロ1コントの値段は下手をすると

コスト割になることすらある。従って産業組合は組合員に対する出荷コントロールの出来るような情報を流している。ブラジルではマンジョオカは粉にして小麦に混入することを法律によって規定している。マンジョオカ澱粉の消費は少ない。

面積当り収入が低いいため作付面積が減りつつある。

6. サンパウロ州政府農務局にて

外資系ミートパッカーが先頃国内流通税免除について一連の運動を行なった。これは近く何等かの形で議会の提出される。

ブラジルで重要輸出産物と見做されるのはコーヒー、サトウ、ココア、綿花であって牛も澱粉も重要輸出産物ではない。

格別これらを輸出重要品目として取り上げ積極的に推進する予定も今の所ない。

7. ブラジルスウィフト社

アルゼンチンに於いては、アフターザ（口蹄疫）をコントロールするために、先ず南部地区から地域を指定して清浄地区としてその地区を拡大して順次北の方に向いつつある。牛の動きを監視することが重要な努力であるが、動物類の移動を監視するだけでは充分ではない。結局、土壌の移動、或いは河川の氾濫による土砂の流入等、いろいろな要素があつて必ずしもうまく行かないのが実情である。

ブラジルスウィフト社はブラジル南部に2工場、サンパウロに1工場をもち従業員総計6,000人を数える組織である。

イギリスは従来からチルドビーフ（冷蔵牛肉）を輸入しているのだが、その英国が6.7ヶ月前からアフターザ汚染を問題にし始めた。しかしその汚染が輸入牛乳によるものだという決論は出ていない。なぜならば、例えばイギリスがアフリカ等から輸入する動物や動物園用生物等についても充分疑問がもたれるからである。

場合によっては人間の交流によって、靴にアフターザ菌が付着していることすら考えられる。

現在イギリスは南アフリカからフレッシュミート（生肉）を輸入している。ブラジルからは既に50年も前からイタリー、スイス、フランス向けにフレッシュミートを輸出している。50年前といえば第一次世界大戦後の欧州の食糧不足時代であったことを思い起こすべきである。

欧州向けフレッシュミートの輸出については特に厳重なプロセスをとっている。先づ第一のプロセスとして、地方で生牛を集荷する際、検査官による検査済のものであることが条件となっている。その後それら生牛が工場に到着すると、工場内で2.4時間滞留させられる。この間に100%再検査が行われる。これは工場の信用にかけて充分な検査を行うものであるが、更に処理した肉の検査もする。これにはブラジルの聯邦政府検査官も立会する。

当社としてはアメリカ向けには良い得意先をもっていて6年も前からFROZEN COOKED（煮沸冷凍用）を輸出している。このために米國聯邦政府の検査官が2年に1回工場検査のためにやって来る。これによって環境衛生維持に関する検査を行い、報告書が提出されている。ブラジル政府側の検査官も立会して協力し環境衛生水準の向上に努力している。

8. フリゴリフィコ プリミート

ブリマハムと伊藤忠との共同出資によるブラジル法人で、この他に雪印乳業の現地会社もあると聞くが、これらは何れも日本向け馬肉の輸出が主要業務であるという。

馬肉が人間の食用になるという日本の特殊事情が永続きするかどうか疑問であるがブラジル国内の食肉市場には入り込むのにはいろいろ問題がある。

ブラジル国内の流通税17%、輸出でも15%という税金があるのだが、それに加えて国税、地方税を計算すると取扱高の30%は税金として納付される性質のものである。この取扱いをあやまっては会社の経営はなり立たない。

ブラジル西北部北部開発（主としてアマゾン流域）には税制上の優遇をあたえていると聞いている。

馬肉の相場はトン当り400ドル内外だが100ドルの運賃をかけても日本向輸出は採算にのる数字である。

9. ブラジル政府農業市場課

1967年以降農産品に対する流通税として15%を課税することになった。これは附加価値に対する課税として決められたものである。来年からは17%に増加することになっている。（フリゴリフィコ プリミートの話では今年1968年1月から既に17%になっているということである）ブラジルにはアルゼンチンのような輸出税というものは存在しない。しかし結局流通税として15乃至17%がかかったものが輸出されている。

10. 市営市場における小売価格 (サンパウロ 1968 8/10)

豚			
ロムボ	MOLLE やわらかい肉	1キロ当り	266円
	DURO かたい肉	"	266円
	BRASSO もも肉	"	220円
	RIB 骨付リブ	"	180
牛肉			
	MIGNON	"	500
	LOMO (OXAO MOLE)	"	250
	CONTRA FILE	"	340
ソーセージ			300
			350
		"	400
			500
ハム		"	200~
			220
生ハム		"	800
山羊	(半身)	"	320
豚	(")	"	350
魚	切身 (白魚)	"	220~300
	総身	"	100 120 200
	車えび	"	700
	イカ	"	250
	乾燥ポーク	"	340

鶏	おす	1キロ当	250円
	めす	"	230
兎		"	350
卵		ダース	110 125 130
米		1キロ	90 100
たうもろこし	粒	"	80
大豆		"	80
マンジョオカ	粉 CRUA (生)	"	60
	TOBRADA (トースト)	"	60
澱粉		"	120
じゃがいも		"	60
黒こしょう	粒のまま	100g	40
	粉	"	40
サトウ	(公定)	1キロ	5.5
ブラジル		"	100 108
コーヒー			

スーパーマーケットにて

米	3キロ入特売品		207円
鶏肉		1キロ	290
ソーセージ		"	500
牛肉			
	Tポーン	"	400
	フィレ	"	340
	フィレミニオン	"	450
	モレ	"	259
じゃがいも		"	35
卵		ダース	116 120 130
小麦粉		1キロ	75
サトウ	(公定)	"	55

第6章 生産と消費

第1節 全食肉

先進国の需給と予測

開発途上国の需給と予測

1985年の予測

各国生産、同統計

第2節 牛肉

需給の現状

1975年の予測

各国牛肉生産

第3節 豚肉

概観

各国豚肉生産

第4節 マトンとラム

概観

需給の現状と1957年の予測

各国羊肉生産と統計

第5節 消費性向

摂取食品のカロリー

穀類摂取量

動物白の摂取量

食肉需要と所得との相関

人工肉

第6節 1人当り消費量の推移(統計)

全 食 肉

牛 肉

豚 肉

マトン、ラム、山羊肉

第7節 世界の食肉生産統計(FAO)

生 産

ベ ー コ ン 価 格

牛 肉 価 格

羊 肉 価 格

豚 肉 価 格

第1節 全 食 肉

概 観

1961—1963年平均の食肉の世界生産は635.7万トンと
言れる。FAOの予測によればこの数字は1957年に最低8430
万トン最高8800万トンに達するであろうと言ひ。約38%から
46%の増加である。

第二次世界大戦後の食肉生産の伸びは可成り顕著であつた。特に
1950年代以後東欧、西欧、北米、ソ連の四地域に於ては圏内の
活発な経済活動による高所得水準と消費増加とに刺戟されて食肉生
産の増大が著しい。

大戦直後1950年(48—52平均)を1961—63年平均
と比較した増加率と1961—63年の国民1人当り年間消費量は
次表の通り。

西 欧	84%	45キログラム
東 欧	65%	44キログラム
ソ 連	95%	34キログラム
北 米	44%	96キログラム
太洋州	45%	100キログラム

開発途上国に於いては、この種の指数を統計的に正確にとらえるこ
とは困難である。

概括的に述べるならば開発途上国の食肉生産の増加のテンポはそ
の人口増に追いつけないと云うのが実情の様である。

従つてこれらの各国の国民1人当りの消費量そのものは開発途上国
の国々の自然条件の相違によつて著しい差異があることに特徴があ
る。例えば自然条件の好い国々として、東アフリカ東部南米等では

1961-63年頃の消費量14キロから46キロといった数字を示す。所が反対に自然条件のよくない西アフリカとか中央アフリカでは6キロ程度であり、アジア極東地区では僅か3キロ程度の消費しかない。

ウルガイは世界一、アルゼンチンは世界第四位の消費を示す国であるがその消費量の伸びが低いことも指摘されなければならない。

中国産食肉については、自国内消費の増大に対して生産増が追い付くとは思えない。従って世界市場全体から見れば政治的動機をのぞけば中国食肉は貿易の対象から外れていると云うのが常識的見方である。

中国には食肉増産の鍵とも云うべき飼料穀類の慢性的不足と云うことが大きな問題として残されている。

世界生産：全食肉 1961-63

	単位：1,000トン			キロ
	生産	輸出入	消費	一人当り消費
世界合計	63,571	29	63,600	26.0
先進国	37,917	696	38,613	55.2
北米	19,091	647	19,738	96.2
西欧	15,283	1,004	16,287	44.6
その他	3,543	-955	2,588	19.9
(うちオーストラリア ニュージランド)	2,387	-999	1,388	104.9
計画経済国	11,918	-65	11,853	36.9
ソ連	7,461		7,461	33.7
東欧	4,457	-65	4,392	44.0
開発途上国	13,737	-603	13,134	9.4
南米	7,981	-725	7,256	32.4
(うちウルガイ アルゼンチン)	3,190	-730	2,460	02.7
アフリカ	2,167	-45	2,122	9.1
近東	1,023	7.2	1,095	10.4
極東	2,566	95	2,661	3.2

FAO: AGRICULTURAL COMMODITIES PROJECTIONS FOR 1957 AND 1985

先進国の需給予測

1975年における3.8%から4.6%の食肉生産増予側は世界全体の平均値である。

先進国側ではいつも需要の増大に対して供給が追いつかない現象が続く。

先進国には食肉増産の為の資本力と技術をもっていることは事実であるが、消費の増大に供給が追いつかない状態が続く。

食肉全体として国内生産の1.6~2.4%に相当する輸入があるものと予測している。

1961~63年には1.8%であったものである。その中でも牛肉は1961~63年の3.9%が1975年には4.6~5.6%の輸入を必要とするであろうという。

開発途上国の需要予測

1961~63年には全生産の4.5%が輸出に向けられた。これは余剰「食肉」としての輸出であるが東部南米諸国か、或いは、はるかに小さいが東アフリカ諸国からのものである。此の量がかろうじて、他の開発途上国の食肉輸入を凌駕した程度に過ぎない。

食肉輸入を行っている開発途上国の輸入量は1961~63年度で全消費量の約2.5%程度になっているがこの数字は1975年頃には更に大きくなるであろうと予測されている。

経済活動と所得の向上、人口増加の要素を考えるならこれらの国の消費量と国内供給量との差は益々広がる傾向にある。

1975年にはおそらく8~12%に達するであろう。

全体として開発途上国の内、食肉輸出を行なっている国を除くなら20

多の不足であり量的には250~350万トン不足すると予測している。

開発途上国に於ては1975年迄の国民1人当りの消費の増加には余り大きな期待はもてない。

世界生産：全食肉1975年予測

単位 1000トン	低			高		
	生産	輸出入	需要	生産	輸出入	需要
世界合計	84,305	2,978	87,283	88,015	4,604	92,619
先進国	49,649	791	50,440	51,405	1,239	52,644
北米	24,381	927	25,308	24,896	939	25,835
西欧	20,072	1,041	21,113	21,052	1,411	22,463
その他	5,196	-1,177	4,019	5,457	-1,111	4,346
(うちオーストラリア ニュージーランド)	3,321	-1,509	1,812	3,451	-1,607	1,844
計画経済国	16,249	590	16,839	16,938	744	17,682
ソ連	10,391	566	10,957	10,876	681	11,557
東欧	5,858	24	5,882	6,062	63	6,125
開発途上国	18,407	1,597	20,004	19,672	2,621	22,293
南米	10,593	152	10,745	11,152	322	11,474
(うちアルゼンチン ウルガイ)	3,833	-827	3,006	3,935	-924	3,011
アフリカ	2,888	336	3,224	3,167	553	3,720
近東	1,312	501	1,813	1,422	680	2,102
極東	3,614	608	4,222	3,931	1,066	4,997

FAO: AGRICULTURAL COMMODITIES PROJECTIONS
FOR 1975 & 1985

せいぜい9.4キログラムから10.3キログラム、大きくみても11.5キログラム程度の増加であるうと見られている。しかし、開発途上国の食肉生産増加のペースがある年率2.5～3.0%よりは大きく、又1950年代には南米諸国で年率1.5%の増加でしかなかったのと比較すれば大きい。

オーストラリアとニュージーランドが年率3.4%で増加したことを参考にするとよい。

1985年の予測

1985年に対するFAOの予測は1975年に対する予測を更に延長して次のように述べている。

1985年の世界の需要は1975年に加えて更に2,000万トンから3,000万トン増大するであろうと云う。

結局1億トンから1億2,000万トンという全需要である。これは1961～63年の数字と比較すると68～90%増となる。

1985年迄の10年間の需要増加の中には開発途上国の人口増加と1人当り消費量の増大によるものが可成りのウエイトを占める。

それだけで言えば100～260%の増加であると予測する。ところがこれらの国々はその時点でなお、外貨事情によって自由な食肉輸入を許さない状況が続く可能性がある。

結局その分だけは不足する国内産で供給しなければならないことになる。

一方先進国では所得水準の増大による1人当り需要量の増加の割合が大きく影響する。

このような需要増大に見合う食肉増産対策としては飼料を食肉に置き

換える経営として養豚、養鶏が重要視されるべきであると云う。

各 国 別 生 産

米国農務省の資料によると世界43ヶ国の全食肉生産合計は次の通りである。

1961～65年平均	5000万トン
1965年	5300万トン
1966年	5500万トン
1967年	5650万トン

上述の1961～65年平均値5000万トンはFAOによる1961～63年6357万トンと比較すると約24%の差が出る。1357万トンである。

これはUSDA資料43ヶ国以外の国々によって生産されることを意味すると考えてよい。

1967年の生産数量を基準としてブロック別に合計すると次のような比率になっている。

EEC	930万トン	
EECを除く西欧	580	%
西 欧	1510	27
東 欧	410	7
北 米	1770	31.5
南 米	660	12
ソ 連	770	14
アフリカ	80	1.5

ア　シ　ア	170万トン	3
太　洋　州	250	4.5
以　上　合　計	5620万トン	100

各国生産：全食肉 10

1.	単位100ポンド	平均			
		1961~ 65	1965	1966	1967 ³
西	ベルギールクセンブルグ	1,024	1,044	1,124	1,220
	フランス	6,910	7,151	7,331	7,696
	西独	6,584	6,776	6,852	7,010
	イタリア	2,449	2,391	2,545	2,658
	オランダ	1,573	1,751	1,764	1,876
	以上EEC合計	18,540	19,113	19,616	20,460
欧	オーストリア	855	865	873	898
	デンマーク	1,821	1,976	2,005	2,031
	フィンランド	349	377	365	385
	ギリシャ	367	399	418	427
	アイルランド	632	654	682	820
	ノールウェイ	285	291	295	290
	ポルトガル	342	369	394	317
	スペイン	1,348	1,341	1,596	1,754
	スウェーデン	809	814	874	875
	スイス	559	598	602	622
	英国	333	4,451	4,480	4,426
以上西欧合計	30,240	31,248	32,200	33,305	

2.

東 欧	ブルガリヤ	561	679	—	—
	チエコ	1,222	1,369	1,326	—
	東独	1,508	1,716	1,677	—
	ハンガリー	888	909	894	—
	ポーランド	2,805	2,965	3,066	—
	ユーゴ	1,172	1,373	1,212	1,311
以上東欧合計		8,156	9,011	8,881	9,123
全欧州合計		38,396	40,259	41,081	42,428
北 米	カナダ	2,621	2,926	2,915	3,076
	メキシコ	1,654	1,790	1,796	1,779
	米 国	30,478	31,535	32,622	34,210
北米合計		34,753	36,251	37,333	39,065
南 米	アルゼンチン	5,768	5,391	6,334	6,727
	ブラジル	4,226	4,496	4,536	4,468
	チリ 4	436	473	464	456
	コロンビア 5	936	939	896	910
	パラガイ 4	—	335	338	—
	ペルー	374	360	389	394
	ウルガイ	858	957	748	769
	ベネズエラ	393	428	465	492
米合計 6		13,505	13,379	14,170	14,558

ソビエト連邦	1,464.0	15,850	17,090	17,150
アラブ連合	368	323	355	—
南 阿	1,394	1,463	1,490	—
アフリカ合計	1,762	1,786	1,854	1,832
中国台湾	500	545	612	—
日 本	1,123	1,410	1,618	1,709
ヒリッピン	719	829	916	942
トルコ	517	518	559	565
アジア合計	2,859	3,302	3,705	3,830
オーストラリア 8)	3,508	3,842	3,725	3,564
ニュージーランド 9)	1,747	1,756	1,769	1,886
太平洋合計	5,255	5,598	5,494	5,450
6)				
以上43ヶ国合計	110,970	116,425	120,718	124,313

USDA*FOREIGN AGRICULTURAL SERVICE*

- 1) 骨付き重量 2) 食用油脂を含むが、ラード、グリースを含まない。 3) 予備資料 4) 牧場使用のための屠殺を含まない。 5) 豚以外は牧場生産分を含まない。 6) 国によって資料不足のものに対する許容値を含む。 7) 各種肉を含む。 8) 年度末6月30日 9) 年度末9月30日 10) 馬肉を含む。

(各食肉別統計に現われる注番に共用される。)

第2節 牛 肉

需給の現状

第二次大戦中に体験した欧米の食肉不足に対する反発、更に戦後の活発な経済活動による所得の向上従って国民1人当り消費量の増加によって先進国諸国の牛肉需要増加は顕著なものがあつた。

この様に旺盛な域内需要に対する供給を目論んだ牛肉生産への投資が盛んであつたことは当然のことであろう。

先進諸国は急速な生産増加を可能にするだけの生産技術と資本をもっていることに大きな特徴がある。E.E.Cに例をとると、1951~53年から1961~63年の10年間に域内産牛による牛肉生産は14.0万トン、63パーセントの急増振りである。

英国では30万トン、55パーセント、北米で225万トン、43パーセントの増加を示している。

先進諸国の牛肉の生産増は国内需要を充分賄える程のものであると理解してもよい位である。

此の様な牛肉生産増の背景となる牛の数においては実はこの10年間に成牛数で10パーセント、若牛数で7パーセントの増加に過ぎないという事実が指摘されている。

結局一頭当りの重量の増加、歩留りの向上、成長の早さと云う技術的な向上がもたらした牛肉の生産増であることを注目しなければならない。

上述のE.E.Cと北米の牛肉生産比較においては更に内容的に異質の要素をもっていることを注目しなければならない。それは乳牛との比率の問題である。アメリカでは肉牛と乳牛牧畜とは別箇の事業と見做されており、乳牛数の増加より肉牛数の増加が著しい特徴がある。

飼育牛に占める肉牛の割合はこの10年間に4.7パーセントから7.0パーセントに増加していることに示される通りである。

所が乳牛と肉牛牧畜が同一事業である西欧における牛肉生産の急増には更に次に示す様な要因があったことを理解しなければならない。

1. 交配技術が進歩したため雑種牛を駆逐し品種改良が進んだこと。
2. 幼牛肉の需要増大にも見合って重量を早くつけて幼牛を出荷する技術が進歩したこと。

東欧においても西欧と同様に肉牛牧畜と幼牛出荷の技術が進歩した。

オーストラリア、ニュージーランドに於てはこの10年間に33万トン40パーセントの生産増加があった。

この国々における牧畜業の進歩、特に牧草改良及び輸送に対する投資と牧畜経営技術の進歩がこの生産増加をもたらしたものと見えよう。

南米諸国中の輸出国であるアルゼンチン、ウルガイ、パラガイの三国の牛肉生産は1961-63年於いて10年前と比較すると58万トン26パーセントの増加であるに過ぎない。

1962、63年はアルゼンチン牛肉が非常に増加した年であるにもかかわらずこの程度の伸びしかなかったわけである。

アフリカの食肉輸出国の生産増加はこれよりなお低い。

牛肉子牛肉の世界生産 1961-63

1000トン	生産	輸出入	消費
輸入国	17,369	1,707	19,076
北米 1)	8,196	652	8,848
西欧	5,000	936	5,936
EEC 2)	3,570	283	3,854
北欧 3)	1,226	580	1,806
南欧 4)	204	72	276
日本	155	5	160
計画経済国 5)	5,018	114	4,132
輸出国	5,551	-1,775	3,776
西欧 6)	879	-484	395
太洋州 7)	1,119	-515	604
東部南米 8)	2,805	-701	2,104
東アフリカ	748	-75	673
以上合計	22,920	-68	22,852

1) カナダ、米国 2) EEC輸出国を含む。 3) フィンランド、ノールウェイ、スウェーデン、スイス、英国

4) ギリシャ、スペイン 5) ソ連、東欧 6) オーストラリア、デンマーク、アイルランド、ユーゴ 7) オーストラリア、ニュージーランド 8) アルゼンチン、パラガイ、ウルガイ

1. 9. 7. 5年の予測

前節では1961～63年の生産実績を1951～53年の実績に對しした生産の現状を述べたものであるが、1975年の予測については人口増加、1人当り消費量の増大について過去の傾向を参考にして算出したものである。

100万トン	延長値	予測値	
		低	高
北 米	5.96	4.55	4.76
北 欧	2.82	2.34	2.46
北 米	11.78	11.47	11.84
太 洋 州	1.55	1.61	1.70
アルゼンチン	2.63	2.94	3.02

予測値が延長値から異なるのは夫々の地域について次のような要因によるものである。

西欧諸国においては乳牛過剰の傾向から各国政府が乳牛牧畜増産を必ずしも積極的に奨励しないであろうという予定から予測値を低くおさえたものである。しかし基本的に幼牛需要の増大と共に幼牛肉生産への意欲が高いことによって「高い」予測値が出される。

幼牛肉生産と成牛肉生産の比率がいつも地域内の需給度によって現はれる価格変動をおさえる緩衝材の役目を果たしていることを注目しなければならない。北米二ヶ国の予測値は過去の傾向をそのまま直線的に引用したもので満足であると考えらる。

オーストラリア、ニュージーランド及び南米の輸出国では、最近の牧畜業

への投資が実を結んで従来傾向以上の生産増があるものと予測している。

1975年の輸出入のバランスは200万トンから300万トンの輸出牛肉不足という需給関係が予測されている。

1961～63年頃の輸出用牛肉不足40万トンという数字に比べれば可成り大きなものである。

この問題は更に輸出入問題として別箇に取扱つてある。

牛肉、子牛肉の需給予測：1975

	生産		バランス		需要	
	低	高	低	高	低	高
輸入国	23789	24734	2649	3002	26438	27736
北米	11468	11840	821	861	12289	12701
西欧	6375	6679	1275	1395	7650	8074
E E C	4555	4760	538	638	5093	5398
北欧	1504	1582	617	610	2121	2192
南欧	315	337	120	147	436	486
日本	246	265	131	211	377	476
計画経済国	5700	5950	422	535	6122	6485
輸出国	7159	7507	-2204	-2317	4955	5190
西欧	1165	1230	-600	-624	565	606
太平洋州	1615	1703	-791	-849	824	854
東部南米	3407	3499	-821	-906	2586	2593
東アフリカ	972	1075	8	62	980	1137
以上合計	30948	32241	445	685	31393	32926

FAO: AGRICULTURAL COMMODITIES PROJECTIONS FOR 1975
AND 1985

国名は前表参照

各国別牛肉生産内訳

U S D A 資料によれば世界の主要生産国合計は次の通りである。

1961~65 平均	2600 万トン
1965	2800
1966	2900
1967	2950

前述 FAO の 1961~63 平均値が 2292 万トン、1975 年予測が 3100 万トンから 3140 万トンである。

可成りの相違が見られる。

U S D A 43ヶ国の統計をもとにして地域別に分けると次の通り。

	1967 万トン	%
E E O	430	
その他の西欧	220	
西 欧	650	22
東 欧	140	5
北 米	1080	36.5
南 米	520	17.5
ソ 連	360	12
アフリカ	60	2
ア ジ ア	35	1
太 洋 洲	120	4
合 計	2965	100

各 国 生 産 : 牛 肉 、 子 牛 肉

単位 100 ポンド		平 均 1961-65	1965	1966	1967 ^{3/}
西	ベルギールクセンブルグ	48.2	47.2	50.9	53.4
	フ ラ ン ス	3,576	3,602	3,786	4,040
	西 独	2,541	2,165	2,632	2,641
	イ タ リ ー	1,388	1,240	1,485	1,565
	オ ラ ン ダ	617	624	620	653
	以上 E E C 合計	8,604	8,411	9,032	9,433
欧	オーストリア ^{7/}	302	286	326	335
	デンマーク	354	338	393	401
	フィンランド	190	209	188	192
	ギリシヤ	96	117	129	139
	アイルランド	274	249	298	475
	ノールウェイ	124	122	125	120
	ポルトガル	112	134	144	111
	ス ペ イ ン	404	391	436	463
	ス エ ー デ ン	330	332	381	368
	ス イ ス	248	247	261	262
	英 国	1,978	1,834	1,912	2,035
	以上西欧合計	13,016	12,670	13,625	14,334

東	ブルガリヤ	157	176	—	—
	チェコ	468	509	531	—
	東独	456	485	550	—
	ハンガリー	236	225	220	—
	ポーランド	878	908	929	—
欧	ユーゴ	415	403	476	520
	以上東欧合計	2,610	2,706	2,909	3,094
全欧州合計		15,626	15,376	16,534	17,428
北	カナダ	1,588	1,873	1,865	1,858
	メキシコ	1,046	1,129	1,124	1,058
	米	17,860	19,744	20,635	21,010
	以上北米合計	20,494	22,746	23,624	23,926
南	アルゼンチン	4,913	4,398	5,262	5,732
	ブラジル	3,095	3,300	3,201	3,113
	チリー 4)	320	302	287	276
	コロンビア 5)	837	852	805	818
	パラガイ 4)	256	273	274	—
	ペルー	194	186	210	212
	ウルガイ	691	752	575	532
	ベネズエラ	327	358	396	417
以上南米合計 6)		10,633	10,421	11,010	11,375

ア フリ カ	ソビエト連邦	6,520	7,310	7,870	7,900
	アラブ連合	326	290	315	—
	南阿	998	1,063	1,058	—
	以上アフリカ合計 6/	1,324	1,353	1,373	1,355
ア ジ ア	中国・台湾	14	11	12	—
	日本	403	473	340	308
	フィリッピン	156	177	204	178
	トルコ	244	245	273	283
	以上アジア合計 6/	817	906	829	781
太 洋 州	オーストラリア 8/	1,941	2,263	2,086	1,937
	ニュージーランド 9/	614	608	644	661
	以上太平洋州合計	2,555	2,871	2,730	2,598
以上43ヶ国総計 6/		57,969	60,983	63,970	65,363

USDA: FOREIGN AGRICULTURAL SERVICE

第5節 豚 肉

概 論

豚の飼育には飼料事情との間に深い関係がある。

HOG-CORN RATIO と呼ばれる言葉でとうもろこしの購入価格と豚の価格比率が養豚の採算性を表示しているように飼料が養豚コストに直接大きく影響する。

この傾向は養鶏においても同じである。養鶏は今や穀類飼料を原料とする大量生産による製造産業とも呼ばれる時代に入って粗放養鶏に見られる如く農家の副業と考えられる時代は終わった。

このような傾向が多かれ少なかれ養豚にも入り込んでいる。

豚肉は鶏肉と同じように主として先進国に於ける 自供給源として急速に生産を増加して来た。このような増勢が続けば1975年には需要量を超越して楽に供給過剰となる。

所が製造産業のようにコストと利益による供給価格をデリケートにコントロール出来る位マーケティングの技術が発達している。こうして豚肉と鶏肉は先進国において、国内需要のバランスをとることが出来ると考えることが出来る。

パラガイやポリビア等で見られるように鶏肉が牛肉より高価に売れると云うのとは事情が大いに違うわけである。

豚肉と鶏肉の生産増加率(%)を過去15年の平均値と1975年の高低推定値を年率の形で現はした先進国に関する数字がある(FAO)

増 加 年 率 %	鶏 肉 肉			豚 肉		
	1950-65	1975		1950-65	1975	
	平 均	低	高	平 均	低	高
デンマーク	1.15	2.5	2.9	5.0	0.9	1.0
フランス	5.2	2.2	2.7	3.6	1.6	1.8
西 独	7.2	3.6	4.5	5.2	1.4	1.6
イタリー	13.4	4.5	5.9	2.8	2.6	3.2
オランダ	21.4	4.2	5.2	4.4	1.8	2.0
英 国	12.9	1.9	2.6	7.1	1.2	1.6
米 国	5.8	1.8	1.9	0.9	0.9	0.9

これらの生産、需要の予測は全て他の食肉及び食品との価格の比較に於いて同じ条件が続いたらという仮定のもとに行われているのである。従つて何らかの理由で廉価な肉が供給されれば需要量はそれに見合つて増加する。又反対に肉が高くなれば需要量は減少する。

飼料の生産性と飼育技術の向上によって先進国の豚肉、鶏肉の自給が可能になる。

ところが開発途上国には多くの問題がある。

各国生産 1/ : 豚肉 2/

単位100ポンド		平均			
		1961-65	1965	1966	1967 ^{3/}
西	ベルギー・ルクセンブルグ	506	538	591	665
	フランス	2,824	3,025	3,028	3,170
	西独	3,982	4,261	4,176	4,332
	イタリー	887	985	897	914
	オランダ	928	1,084	1,110	1,193
	以上西欧合計	9,127	9,893	9,802	10,274
欧	オーストラリア	540	570	539	556
	デンマーク	1,459	1,631	1,605	1,622
	フィンランド	146	152	162	181
	ギリシャ	82	79	87	92
	アイルランド	261	306	277	250
	ノールウェイ	121	127	127	127
	ポルトガル	177	176	198	154
	スペイン	632	608	829	957
	スウェーデン	457	457	470	488
	スイス	295	335	328	347
	英国	1,796	2,078	1,972	1,815
	以上西欧合計	15,093	16,412	16,396	16,863

東 欧	ブルガニヤ	270	340	324	—
	チェコスロバキア	750	857	792	—
	東独逸	1,052	1,231	1,127	—
	ハンガリー	622	659	645	—
	ポーランド	1,826	1,975	2,046	—
	ユーゴスラビア	648	871	633	683
	以上東欧合計 ⁶⁾	5,168	5,933	5,567	5,607
全欧州合計 ⁶⁾		20,261	22,345	21,963	22,470
北 米	カナダ	1,003	1,029	1,027	1,195
	メキシコ	453	501	509	557
	米国	11,863	11,140	11,337	12,550
	以上北米合計	13,319	12,670	12,873	14,302
南 米	アルゼンチン	384	469	494	474
	ブラジル	1,022	1,067	1,200	1,218
	チリ ⁴⁾	56	104	106	108
	コロンビア ⁵⁾	95	83	87	88
	パラガイ ⁴⁾	—	54	57	—
	ベネズエラ	96	95	96	97
	ウルガイ	54	49	50	55
	ペルー	62	64	63	69
	以上南米合計 ⁶⁾	1,819	1,985	2,153	2,169

	ソビエト連邦	6,250	6,780	7,280	7,300
ア フ リ カ	アラブ連合	4	3	3	—
	南阿	115	116	137	—
	以上アフリカ合計	119	119	140	142
ア ジ ア	中国・台湾	485	532	598	—
	日本	668	898	1,245	1,364
	フィリッピン	551	639	699	750
	トルコ	1	1	1	1
	以上アジア合計	1,705	2,070	2,543	2,715
太 洋 州	オーストラリア 8)	257	269	298	313
	ニュージーランド 9)	94	99	90	80
	以上太洋州合計	351	368	388	393

以上43ヶ国合計 43,824 46,337 47,340 49,491

USDA: FOREIGN AGRICULTURAL SERVICE

第4節 マトンとラム

概 観

世界の輸出入の総量は55万トンであり生産量の約16%に当る。輸入国の中では英国が37万トンで表に示される貿易量の65%を占めていて最も大きい。

又、輸出国の中ではオーストラリア・ニュージーランドが貿易の5分の4を占めている。

輸出国ではその外、アルゼンチン・ウルガイ・アイルランドが数えられる。この外近東地区の4万トンの輸入がある。

一方1975年の予測では英国の輸入が依然として大きい。此の国の国内産羊肉の増加が辛じて国内消費の増大に追い付けるから輸入量では大きな増加は見込まれない。

しかしその他の西欧、南欧ではフランス、イタリー、スペイン、ギリシャの生産増加が期待されないため羊肉不足は著しくなるであろう。西欧ではフランスと英国を除くと殆ど、どの国も1950年代以来羊肉の生産に増減がない。

この傾向が続けば1961～63水準から1975年迄18～25%以上増加することはあり得ないだろうと予測している。

この様な背景には1人当りの消費そのものが他の欧州諸国より少いという要因も働いている事は事実である。

若し牛肉の供給不足がひどければその影響をうけて、羊肉の貿易量はこれより増加する可能性は大いにある。

北米では国内の羊肉増産より早いテンポで需要が伸びることが予定されている。

羊肉生産の望めない日本ではその輸入所要量は増大するであろう。

オーストラリア、ニュージーランドの生産増加の率は過去15年間よりも高いだろう。

又、最近アルゼンチンの羊肉生産の減少傾向は改まり従来と逆の傾向があらはれるだろうが、輸出は1975年には到底1961年-63年程の量には達しないと予測されている。

開発途上国と計画経済国の間だけで生産量の12-14%が供給不足となるものと予測される。

総合すれば羊肉は牛肉と全く同じ傾向をたどり、先進国側の輸入増、開発途上国側の輸出量不足の状態の挾撃をうけて価格は上昇せざるを得ない。

需給の現状 (FAO)

1000トン	1961-63 マトンラム		
	生産	輸出入	消費
輸入国合計	2,130	531	2,661
1/ 北米	379	76	445
西欧	664	399	1,063
E E O	184	12	199
2/ 北欧 (うち英国)	286	371	657
	263	369	632
3/ 南欧	191	16	207
日本	3	32	35
4/ 計画経済国	1,084	24	1,108
輸出国合計	1,381	-554	827
5/ 西欧	107	-31	76
6/ 大洋洲	1,058	-481	576
7/ 東部南米	216	-42	175
以上合計	3,511	-23	3,488

1/ カナダ アメリカ 2/ オーストリア デンマーク フィンランド
ノルヴェイ スエーデン スイス 3/ ギリシャ スペイン 4/ ソ連
東欧 5/ アイルランド ユーゴ 6/ オーストラリア ニュージランド
7/ アルゼンチン ウルガイ

1000トン	生産		バランス		消費	
	低	高	低	高	低	高
輸入国合計	2,562	2,670	1,024	1,089	3,586	3,759
北米	400	407	151	146	551	553
西欧	787	828	532	560	1,319	1,388
EEC	191	196	67	77	258	273
北欧 (うち英国)	365	385	390	396	755	781
南欧	231	247	75	87	306	334
日本	5	5	71	82	76	87
計画経済国	1,370	1,430	270	301	1,640	1,731
輸出国合計	1,802	1,849	-758	-795	1,044	1,054
西欧	141	146	-30	-26	111	120
太平洋州	1,430	1,470	-707	-747	723	723
京都南米	231	233	-20	-22	210	211
以上合計	4,364	4,519	266	294	4,630	4,813

地区別国別は前表と同じ。

各国生産，ラム，マトン，山羊

単位 100ポンド		平均			
		1961-65	1965	1966	1967 3)
西	ベルギールクセンブルグ	6	8	4	4
	フランス	282	297	312	316
	西 独	30	26	24	24
	イタリー	88	81	90	95
	オランダ	18	25	20	19
	以上EEC合計	424	437	450	458
欧	オーストリア ⁷⁾	3	3	3	3
	デンマーク	3	3	4	5
	フィンランド	4	4	3	2
	ギリシャ	189	203	202	196
	アイルランド	97	99	107	95
	ノルウエー	34	36	37	38
	ポルトガル	47	53	48	47
	スペイン	268	295	293	296
	スウェーデン	4	6	6	6
	スイス	7	7	7	7
	英 国	559	539	596	576
以上西欧合計		1,639	1,685	1,756	1,729

ブルガリヤ	134	163	—	—
チェコ	4	3	—	—
東独	—	—	—	—
ハンガリー	18	18	19	—
ポーランド	58	51	—	—
ユーゴ	102	97	101	106
△以上東欧合計	316	332	355	371
全欧州合計 △	1,955	2,017	2,111	2,100
カナダ	30	24	23	23
メキシコ	129	134	135	134
米国	755	651	650	650
以上北米合計	914	809	808	807
アルゼンチン	345	359	419	361
ブラジル	106	121	123	122
チリー △	60	67	71	72
コロンビア △	4	4	4	4
パラガイ △	—	4	4	—
ペルー	84	79	83	85
ウルガイ	113	156	123	182
ベネズエラ	4	6	6	6
以上南米合計 △	719	796	833	856

ソビエト連邦	1,870	1,760	1,940	1,950
アラブ連合	38	30	37	—
南阿	281	284	295	—
△以上アフリカ合計	319	314	332	335
中国・台湾	1	2	2	—
日本	6	4	4	5
フィリッピン	9	10	10	11
トルコ	272	272	285	281
△以上アジア合計	288	288	301	299
オーストラリア 8)	1,310	1,310	1,341	1,314
ニュージーランド 9)	1,039	1,049	1,035	1,145
以上太平洋州合計	2,349	2,359	2,376	2,459
△ 以上43ヶ国総計	8,414	8,343	8,701	8,806

USDA: FOREIGN AGRICULTURAL SERVICE

第5節 消費性向

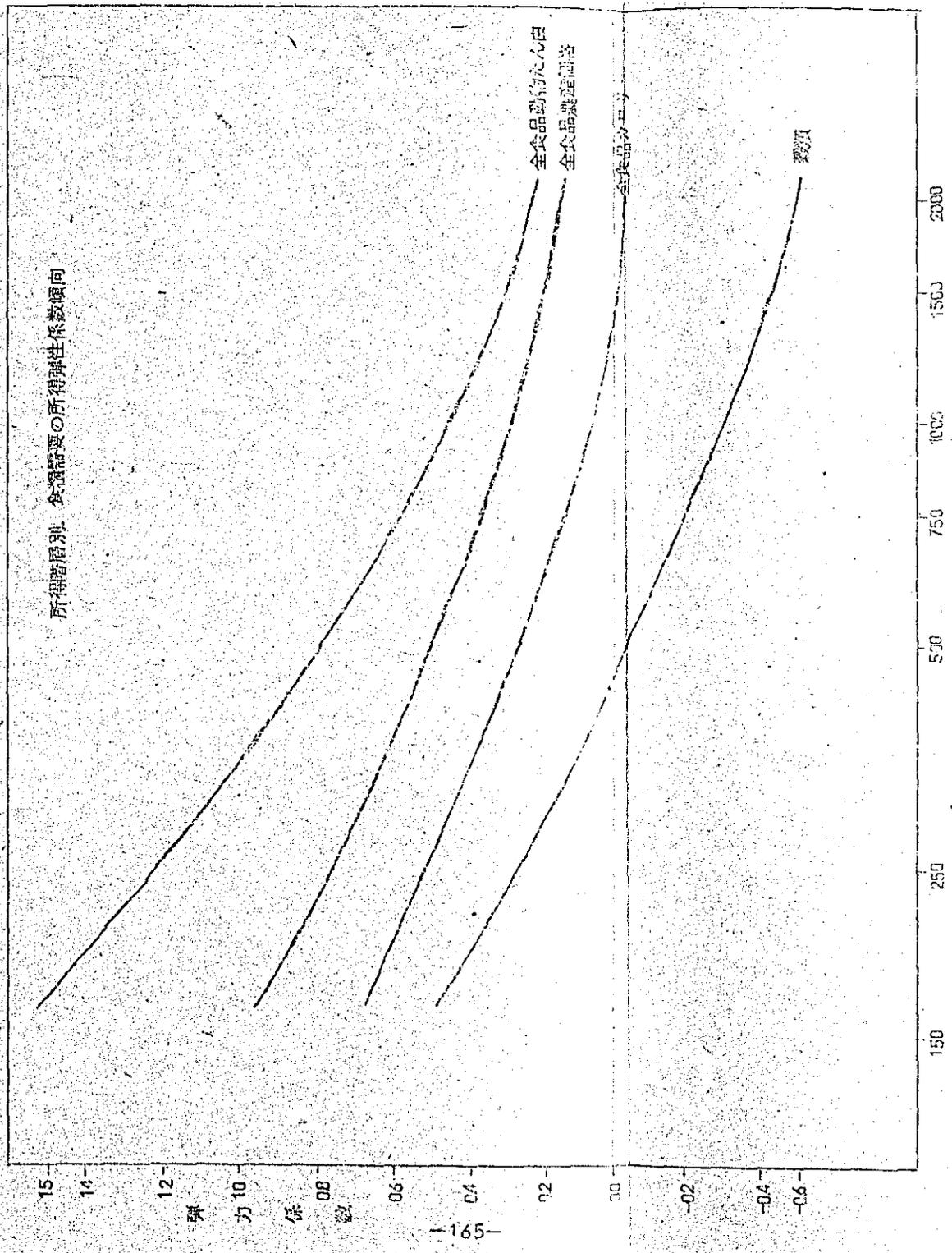
食肉消費は人口と所得に対する相関性を基礎として予測される。食肉消費は人口に正比例するが所得との相関は直線的ではない。

元来人間の食品摂取量は所得の向上と共に増大する単純な相関性をもっと考えられ易いが全食品がそうであるとは限らない。例えば穀類摂取の場合のように、或る所得の高さに達すると摂取量はむしろ減少するものすらある。いくら収入が多くても米や麦ばかり食べてはおれないということである。そして米よりも肉を沢山喰べる傾向が出て来る。

このような食品消費と所得との相関性を別図のように示した。

(FOA: AGRICULTURAL COMODITIES—PROJECTIONS FOR 1970)のクラブがある。

所得階層別、食糧需要の所得弾性係数傾向



一人当り所得 (US ドル) 1955 物価-パリティ指数による購買力

摂取食品のカロリー

食品をカロリーの対象として考えると、喰べるのがやつとという貧しい階層は味よりカロリーという消費性向がある。それが高所得階層になると満腹感より美味が重視され、低カロリー食飼に対する関心が高まつて行く。所得が或る高さに達すると肉体労働が減少し、カロリー不要の階層となることにも一致するわけである。その点で摂取カロリーと所得との相関々係上弾力係数がゼロとなりついでマイナスに変化して行く傾向をもつ。

前述のグラフでは1955年アメリカの価格指数に準拠すれば一人当り年間所得1,500ドルの階層を境界として、カロリー量は所得の増大と共に増大する傾向から減少する傾向に変化している。

穀類摂取量

カロリーにもつとも大きく寄与する食品と云えば、穀類である。限られた所得の範囲でカロリーのために喰べるときには、どうしても穀類中心となる。人間の生存ギリギリの生活では米と塩といわれる程である。ところが少し所得が向上すれば穀類より他の副食物という欲求が出て来る。副食物による味を享受しながらカロリーを補給する消費性向である。前述のグラフを利用すれば500ドルで早くも穀類消費の相関弾力係数がマイナスに逆転している。

1955年500ドルは現在700ドル内外と考えてよいであろう。国際比価によると食品価格が割高の日本の状況からみると、現在が丁度この変曲点（相関弾力性ゼロ）の状態にあると考えてよいであろう。とすると日本人の一人当り米の消費は今後急速に減少して行くことになる。二、三年もすれば日本人の平均所得が増大すればする程米穀消費量は減少する計算である。但しここでは米の価格がバラティ方式によるスライド制を適用して一定であると仮定している。

摂取食品の金額

エンゲル係数という言葉で表わされる食品摂取のために支払はれる金額と所得との比率に関する相関性がある。人間が生きて行くのがやつとという状態では所得が上がつた分だけ食品に廻はされる。

所が所得が高くなれば、カロリーより美味を重視する傾向が顕著となる。美味を重視するようになれば金に糸目をつけずという表現でもある。こう考えると所得との相関弾力係数がゼロということはありません。食肉消費の所得との相関係数弾力係数が対数曲線で表わされる理由でもある。

動物蛋白の摂取量

魚類を除けばこの項は食肉そのものであると考えてもよいであろう。FAOの相関曲線で主張している弾力係数が食肉だけの場合なら更にもつと高くなるわけである。

食肉の消費性向は所得との関係において全食品のなかでもつとも有望なものであるということでもある。アメリカの平均所得階層でも収入増につれて消費量は相当上る。

所得水準の低い他の国々ではなおさらこの傾向が強い所得の向上に比例して消費が増大する食品のうち弾力性最高のもので食肉は極めて有望であるということでもある。

食肉需要と所得との相関

Y : 需 要 量

X : 年間平均所得

$$Y = a + b \log_e X$$

a は所得が無限大において到達する

最大需要量、いくら収入が上つても年間

平均100キロ以上の食肉消費はあり得

ないとすれば $a = 100$ となる。

b は X、Y という或る1点が分れば

その値代入して求められる定数である。

FAOは食肉について各国に適用出来る相関方程式としている。

需要量の将来性を所得増大との関係において予測するときには

次の式で示される。

$$\text{増減比} : \frac{Y'}{Y} = 1 + 2.3026E \log_e \frac{X'}{X}$$

X' 、 Y' はそれぞれ予測時点における所得と需要量を示す

Y'/Y によつて増減率が分る。

$E = \frac{b}{Y}$: 所得弾力係数

b : 定数で前述のとおり

Y : 現時点に於ける需要量

X : 現時点に於ける所得

所得弾力係数Eが、例えば0.4である場合1人当り所得が1%増加した

とき1人当り食肉需要増加の割合が0.4%であるという意味である、

FAOの1970年予測に使用した所得弾力係数は次の表に示す通りで

ある。

次節には1966年度の各国別1人当り食肉消費量(2.2ポンド=1キロに換算して下さい)の推移が示されている。

この数字と所得弾力係数を使用すれば、国民1人当り所得の増加による1人当り需要量が計算出来る。

食肉所得弾力係数

FAO 1970 予測に使用したもの

北米	0.4	ユーゴスラビア	1.0	その他	0.8
カナダ	0.4	その他	0.4	近東, アフリカ	
米	0.35	オーストリア	0.5	(南アを除く)	1.3
太平洋	0.1	デンマーク	0.4	ト	1.2
オーストラリア	0.1	フィンランド	0.6	アジア区 近東	1.3
ニュージーランド	0.2	アイルランド	0.5	北	1.2
西		ノールウェイ	0.5	他のアフリカ	1.3
EU	0.7	スエーデン	0.5	(南アを除く)	
ベルギー	0.6	スイス	0.5	アジア, 極東	1.5
ルクセンブルグ	0.4	英国	0.4	(日本を除く)	
フランス	0.6	日本	1.7	セイロン	1.4
西独	1.4	南	0.5	インド	1.4
イタリア	0.7	アルゼンチン	0.15	インドネシア	1.6
オランダ	1.1	中南米(上国を除く)	0.75	パキスタン	1.6
地中海	1.0	ブラジル	0.7	フィリピン	1.5
ギリシヤ	1.3	メキシコ	0.8	タイ	1.0
ポルトガル	1.2	中米(メキシコ除く)	0.9	タ	1.4
スペイン				タ	

人 工 肉

肉の味と香りがあれば本物でなくてもよいと云う人は限られている。形のない人工肉は増量用、加工肉用に向けなければならない。食肉の低所得階層の食品として論ずるとき人工肉のウエイトは重くなる。逆に云えば食肉が他の食品より不当に高いと人工肉が重要視される日本で人工肉の可能性が大きく評価されるものも当然であろう。しかし、食肉は天の与えた恵みである。それ自体美味でしかもやすく食用に供せらるべき本来の使命をもっている。

アルゼンチンで人工肉の将来性に関する話をすれば一笑に付せられる。日本では食肉の将来に暗い影響をあたえるものではないかと真剣な話題となる。世界の食肉を論ずるとき、日本の国内で形成される人工肉評価は中庸を得たものとは考えられない。それにもかかわらず人工肉に関する予測をもつと必要とする時代が近づいていることは間違いない。

第6節 一人当り消費量の推移

食肉の消費性向を所得との相関だけで規定するときは、所得、価格に関する比率が同一水準にあるという仮定の上に立った上でのことである。国毎に異なるこれらの条件をいちいちここで明らかにすることは出来ない。最近の各国の一人当り消費量(1961-63)と予測値(1975)に関するF A Oの統計を参照することが出来る。

2. 一人当り消費, 需要
FAO 調べ

単位: キロ

	全 食 用			牛 肉, 子 牛 肉		
	1961-63 平均	1975 低 高		1961-63 平均	1975 低 高	
北 米	96.2	102.6	104.7	43.1	49.8	51.5
米 国	97.8	104.4	106.5	43.8	50.9	52.5
カ ナ ダ	79.9	85.4	88.0	36.0	39.8	41.6
西 欧	44.6	51.3	54.6	18.2	21.2	22.6
E E C	49.6	58.7	62.0	22.0	26.3	27.9
ベルギー ルクセンブルグ	53.1	61.4	64.2	23.5	27.4	28.8
西 独	57.5	67.0	70.3	20.9	24.9	26.4
フ ラ ン ス	64.4	72.9	76.1	30.2	34.6	36.3
イ タ リ ー	28.0	38.0	41.9	15.5	20.4	22.2
オ ラ ン ダ	41.3	47.2	49.2	20.3	23.4	24.3
北 欧	61.9	68.3	70.9	23.0	25.5	26.4
オーストリア	56.3	65.6	67.2	18.5	23.2	24.0
デンマーク	62.6	68.8	70.9	18.1	21.5	22.7
フィンランド	33.5	40.0	42.7	18.3	22.3	24.1
アイルランド	56.6	65.7	67.8	16.5	19.7	20.7
ノールウェー	35.6	42.3	44.3	14.8	18.2	19.2
スエーデン	46.9	49.5	50.5	19.9	22.7	23.5
ス イ ス	53.5	59.3	61.0	23.4	26.5	27.4
英 国	70.1	76.8	80.0	25.8	27.6	28.4
南 欧	20.3	26.2	29.9	7.1	9.5	11.1
ギリシヤ	23.8	31.9	34.9	7.2	9.6	10.6
ス ペ イ ン	23.2	31.6	34.7	7.0	10.1	11.3

	全 食 肉			牛 肉 子 牛 肉		
ト ル コ	1.3.4	1.5.2	2.0.3	6.8	7.7	1.0.3
ユ ー ロ	2.3.9	3.4.2	3.7.5	7.0	1.0.5	1.1.8
他の先進国	1.9.9	2.7.1	2.9.3	9.0	1.2.1	1.3.2
日 本	6.2	1.2.0	1.4.2	1.7	3.5	4.4
オーストラリア	1.0.4.1	1.0.9.4	1.1.3.4	4.5.2	5.0.1	5.2.4
ニュージーランド	1.0.8.2	1.0.8.3	1.0.8.3	4.7.5	4.7.5	4.7.5
南 阿	3.5.6	3.7.9	4.0.3	2.3.1	2.4.6	2.6.0
ソ連と東欧	3.6.9	4.5.3	4.7.5	1.2.8	1.6.5	1.7.4
ソ 連	3.3.7	4.2.1	4.4.4	1.2.7	1.6.3	1.7.4
東 欧	4.4.0	5.2.8	5.4.9	1.3.3	1.6.7	1.7.6
ポーランド	4.5.5	5.3.0	5.4.5	1.2.1	1.5.6	1.6.3
アジアの計画経済圏 (大連中国のみ)	1.3.8	1.8.2	2.0.9	2.6	3.5	4.2
ラテンアメリカ	3.2.4	3.3.3	3.5.6	2.3.2	2.3.6	2.5.2
メキシコ、中米、カリブ	2.0.0	2.2.1	2.3.5	1.3.1	1.4.6	1.6.0
メ キ シ コ	1.9.4	2.1.9	2.3.9	1.2.2	1.4.0	1.5.3
C A I S 諸国	1.6.4	1.8.7	2.0.4	1.2.2	1.4.0	1.5.3
カリブ海諸島	1.8.5	2.0.2	2.1.8	1.2.6	1.3.7	1.4.8
そ の 他	2.9.0	3.0.2	3.3.5	1.8.6	1.9.3	2.1.5
西部南米	2.5.0	2.7.9	3.1.2	1.6.1	1.7.9	2.0.0
東部南米	4.5.6	4.5.3	4.7.3	3.4.4	3.4.0	3.5.5
アルゼンチン	1.0.1.1	1.0.1.1	1.0.1.3	8.5.2	8.5.2	8.5.2
ブラジル	2.7.3	2.9.9	3.2.4	1.8.1	2.0.1	2.1.9
パラガイ	4.0.5	4.0.7	4.4.1	3.3.8	3.3.8	3.6.6

	全 食 肉			牛 肉 子 牛 肉		
ウ ル ガ イ	115.5	115.7	116.0	85.6	85.5	85.5
ア フ リ カ	9.1	10.1	11.6	5.3	5.8	6.7
北西アフリカ	10.8	12.8	14.9	4.4	4.8	5.4
西アフリカ	5.8	6.2	7.1	3.1	3.3	3.8
中央アフリカ	6.7	8.4	9.4	4.1	5.1	5.8
東アフリカ	13.6	14.7	17.1	8.9	9.7	11.3
エチオピア	20.9	22.4	25.9	13.0	14.0	16.1
ケニヤ	15.1	15.5	18.7	9.0	9.3	11.2
マダガスカル	13.9	15.2	17.4	9.2	10.2	11.7
タンザニア	7.8	8.6	10.4	5.1	5.6	6.8
近 東	10.4	12.2	14.2	4.1	4.7	5.5
極 東	2.9	3.7	4.4	1.0	1.2	1.4
南 ア ジ ア	1.6	1.9	2.2	0.7	0.9	1.0
東と東南アジア	6.0	7.7	9.2	1.7	1.9	2.3

一人当り消費，需要

単位：キロ

FAO調べ	豚		肉		マトン，ラム		
	1961-63	1975		1961-63	1975		
	平均	低	高	平均	高	低	
北 米	28.6	27.1	27.1	2.2	2.2	2.2	
米 国	29.0	27.4	27.4	2.3	2.3	2.3	
カ ナ ダ	23.9	24.0	24.0	1.8	2.0	2.1	
西 欧	17.7	19.3	20.0	3.7	4.3	4.7	
E E C	20.3	22.6	23.3	1.1	1.6	1.4	
ベルギールクセンブルグ	21.1	23.2	24.0	0.4	0.5	0.5	
西 独	31.2	34.2	35.2	0.3	0.3	0.3	
フ ラ ン ス	22.0	24.0	24.6	2.8	3.2	3.4	
イ タ リ ー	6.8	8.7	9.4	0.8	1.1	1.2	
オ ラ ン ダ	18.0	19.7	20.2	0.5	0.6	0.6	
北 欧	25.9	28.0	29.0	7.8	8.3	8.6	
オーストリア	34.3	36.7	37.2	—	—	—	
デンマーク	38.6	39.8	40.2	—	—	—	
フィンランド	14.4	16.5	17.4	—	—	—	
アイルランド	23.4	25.6	26.3	11.1	2.8	13.3	
ノールウェイ	15.4	17.7	18.4	14.0	4.6	5.0	
スエーデン	25.3	24.6	24.4	—	—	—	
ス イ ス	25.0	27.0	27.5	0.7	0.8	0.8	
英 国	25.8	28.4	30.0	11.8	2.7	13.1	
南 欧	5.8	7.0	7.5	4.5	5.8	6.9	
ギリシャ	3.3	3.8	4.0	10.6	4.4	15.5	
スペイン	9.0	11.2	12.0	3.8	5.1	5.6	

	豚 肉			マトン、ラム		
	—	—	—	—	—	—
トルコ	—	—	—	5.9	6.8	8.8
ユーゴ	1.11	1.52	1.64	2.4	3.4	3.8
他の先進国	3.7	5.5	6.0	5.6	6.5	6.7
日本	2.8	5.1	5.8	0.4	0.7	0.8
オーストラリア	1.08	1.08	1.08	4.3.6	4.3.6	4.3.6
ニュージーランド	1.5.1	1.5.1	1.5.1	4.3.3	4.3.3	4.3.3
南阿	3.4	3.6	3.8	7.7	8.3	8.9
ソ連と東欧	1.6.8	1.9.5	2.0.2	3.4	4.4	4.7
ソ連	1.3.4	1.6.1	1.6.8	4.0	4.2	4.9
東欧	2.4.4	2.7.4	2.8.1	2.3	3.2	3.3
ポーランド	3.0.5	3.3.6	3.4.2	0.9	1.1	1.1
アジアの計画経済国 (大連中国のみ)	1.0.0	1.2.4	1.4.1	0.7	0.9	1.0
ラテンアメリカ	5.8	6.1	6.5	1.9	1.9	2.0
メキシコ中米カリブ	4.6	4.9	5.3	0.8	0.8	0.9
メキシコ	4.9	5.3	5.7	1.1	1.2	1.3
C A I S 諸国	2.7	3.0	3.2	—	—	—
カリブ海諸島	4.0	4.1	4.3	0.6	0.7	0.7
その他	6.9	7.1	7.8	—	—	—
西部南米	4.4	4.8	5.3	3.1	3.5	4.0
東部南米	7.4	7.7	8.0	2.2	2.0	2.1
アルゼンチン	7.4	7.5	7.5	5.7	5.7	5.7
ブラジル	7.5	7.9	8.2	0.6	0.7	0.7
パラガイ	2.5	2.7	2.9	1.1	1.0	1.0

	豚 肉			マトン, ラム		
	7.6	7.7	7.9	20.4	20.4	20.4
ウルガイ						
アフリカ	0.7	0.7	0.8	2.3	2.5	2.9
北西アフリカ	0.5	0.3	0.3	3.8	4.2	4.8
西アフリカ	0.6	0.7	0.8	1.7	1.8	2.0
中央アフリカ	1.2	1.5	1.6	1.0	1.3	1.4
東アフリカ	0.4	0.5	0.5	3.2	3.4	3.9
エチオピア	—	—	—	5.7	6.1	7.0
ケニヤ	—	—	—	5.6	5.7	6.9
マダカスガル	—	—	—	—	—	—
タンザニア	—	—	—	2.1	2.3	2.7
近 東	0.03	0.03	0.03	5.5	6.5	7.4
極 東	1.3	1.4	1.7	0.6	0.7	0.8
南アシア	0.04	0.05	0.05	0.7	0.8	1.0
東と東南アシア	4.1	4.6	5.4	0.4	0.4	0.5

一人当り 食肉消費量(その1) 全 食 肉 牛 肉 (仔牛肉を含む)

校 肉 校 肉

北	米	平均 1956- 60	1962	1963	1964	1965	1966	平均 1956- 60	1962	1963	1964	1965	1966
カ	オ	136	135	140	146	148	148	77	76	80	85	90	90
米	国	159	163	169	175	167	171	91	94	199	5	105	109
メ	キ	42	41	40	39	40	40	26	26	25	25	25	25
南	米												
ア	ル	221	218	217	170	179	207	189	189	190	144	147	175
ブ	ラ	64	58	57	56	56	54	45	39	39	39	39	37
チ	リ	59	56	51	51	51	52	43	42	37	38	37	37
コ	ロ	55	56	53	54	52	48	47	49	47	47	46	42
パ	ラ	139	142	138	136	135	133	110	114	110	108	106	104
ベ	ル	32	36	39	36	36	35	16	19	21	19	19	18
ウ	ル	242	219	244	236	259	224	181	160	186	179	198	153
ヘ	ネ	43	49	51	52	51	57	32	39	40	41	41	48
西	欧												
ベル	ギ	104	114	118	112	118	120	49	54	57	54	52	55
フ	ラ	124	145	143	144	151	152	65	71	72	71	75	74
西	独	104	122	121	122	124	123	39	49	50	49	48	49
イ	タ	50	57	80	61	58	64	26	35	39	37	35	41
オ	ラ	91	102	102	100	106	109	40	46	49	42	43	44
(以上)	西	94	107	108	108	110	113	44	51	53	51	51	54
オ	ス	108	122	121	122	121	121	40	45	44	43	41	43
デ	ン	127	114	107	114	114	120	42	38	30	36	36	44
フ	イ	69	75	78	82	81	82	35	40	43	47	45	44
ギ	リ	36	53	61	62	65	69	8	17	22	22	23	25
ア	ル	96	102	105	110	115	117	28	29	31	33	33	37
ノ	ル	75	78	78	79	80	85	31	33	33	35	34	36
ポ	ル	41	42	43	42	46	46	11	15	15	14	17	18
ス	ベ	38	43	51	51	48	56	12	15	18	17	17	20
ス	エ	102	107	102	105	103	102	41	46	45	43	40	44
ス	イ	102	115	113	118	118	116	45	55	50	52	51	50
英	国	127	144	149	142	140	138	60	59	60	56	51	52
東	欧												
ブ	ル	58	67	66	72	86	88	19	20	22	21	26	26
チ	エ	91	98	100	101	102	94	31	42	41	38	35	34
東	独	73	95	97	81	85	80	-	-	-	-	-	-
ハン	ガ	73	84	85	86	85	89	18	23	24	22	20	21

ポーランド	55	52	49	47	56	55	2	2	1	1
ユーゴスラビア	23	21	22	25	31	26	6	6	4	5
ソ連	26	30	31	20	30	32	8	9	9	8
南ア	7	6	7	6	6	7	16	17	18	16
アジア										
日本	4	8	7	7	9	13	1	1	2	2
フィリッピン	17	18	18	18	20	21	1	1	1	1
大洋州										
オーストラリア	3	25	24	23	24	26	3	96	88	84
ニュージーランド	4	33	33	35	36	31	4	96	93	91

推定値 1 民間消費、ストック変化を含む。 1 民間消費、ストックの変化を含む。

USDA 2 1960以降アラスカ、ハワイ 2 1960以降アラスカ、ハワイを含む

"FOREIGN AGRICULTURE を含む。

CIRCULAR"

3 1年の終り6月30日。

3 1年の終り6月30日。

4 1年の終り9月30日。

4 1年の終り9月30日。

- 全食肉消費に含まれる。

- 全食肉消費に含まれる。

0.5ポイント以下。

一人当り 食肉消費量(その2) 豚 肉 枝 肉 枝 肉

国別 単位 ポンド	枝 肉					枝 肉				
	平均 1956- 60	1962	1963	1964	1965 1966	平均 1956- 60	1962	1963	1964	1965 1966
北										
カナダ	51	50	51	52	49 48	4	4	4	3	4
米国	64	64	65	65	59 58	5	5	4	4	4
メキシコ	13	12	12	11	12 12	3	3	3	3	3
南										
アルゼンチン	18	16	15	14	20 20	14	2	12	12	12
ブラジル	16	18	17	16	16 16	1	1	1	1	1
チリ	8	7	7	6	6 7	8	7	7	8	8
コロンビア	8	7	6	7	6 6	V	V	V	V	V
パラガイ	—	—	—	—	27 27	—	—	—	—	2
ペルー	8	9	10	10	9 9	8	8	7	8	8
ウルガイ	18	21	21	20	18 18	43	37	37	43	53
ベネズエラ	10	10	10	10	9 8	1	1	1	1	1
西 欧										
ベルギー・ルクセンブルグ	48	52	53	49	57 57	1	1	1	1	1
フランス	48	62	60	62	66 66	6	6	6	7	7
西 独	64	72	70	72	75 73	1	1	1	1	1
イタリ	20	18	17	20	19 19	2	2	2	2	2
オランダ	47	53	50	54	57 61	1	V	V	1	1
(以上) EEC	44	51	50	52	54 54	3	3	2	3	3
オーストリア	65	75	75	77	79 77	V	V	V	V	V
デンマーク	83	74	75	76	76 74	1	1	1	1	1
フィンランド	—	32	32	32	32 34	—	1	1	1	1
ギリシヤ	7	11	11	12	10 12	21	28	28	32	32
アイスランド	48	49	49	53	59 57	20	25	24	23	23
ノールウエイ	34	34	34	33	34 37	9	9	9	10	10
ポルトガル	24	21	22	22	22 21	5	5	5	6	6
スウェーデン	18	19	23	24	20 26	7	9	9	9	9
スイス	57	56	55	59	59 54	V	1	V	1	1
ス 国	54	56	59	62	63 63	1	2	2	2	2
英 国	43	59	64	61	65 62	24	25	25	24	24
東 欧										
ブルガリア	25	30	27	31	38 39	14	17	20	22	23
チェコスロバキア	59	55	57	62	67 60	1	1	1	—	—
東 独	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハンガリー	52	58	58	61	62 65	1	2	2	2	2

ポーランド	81	80	82	80	85	84		23	25	30	31	27	27
ユーゴスラビア	43	44	42	41	47	45		14	17	15	12	12	14
ソ連	60	67	69	59	72	76		26	28	29	30	34	36
南ア	78	76	76	79	78	77		55	53	60	55	56	54
アジア													
日本	8	14	13	15	16	20		3	4	4	5	5	4
フィリピン	25	25	24	25	26	28		8	7	6	7	6	7
太平洋													
オーストラリア	229	216	217	219	209	198	3	125	95	103	108	101	87
ニュージーランド	222	233	232	232	236	229	4	105	104	104	104	109	106

推定値

1 民間消費、ストックの変化を含む 1 民間消費、ストックの変化を含む。

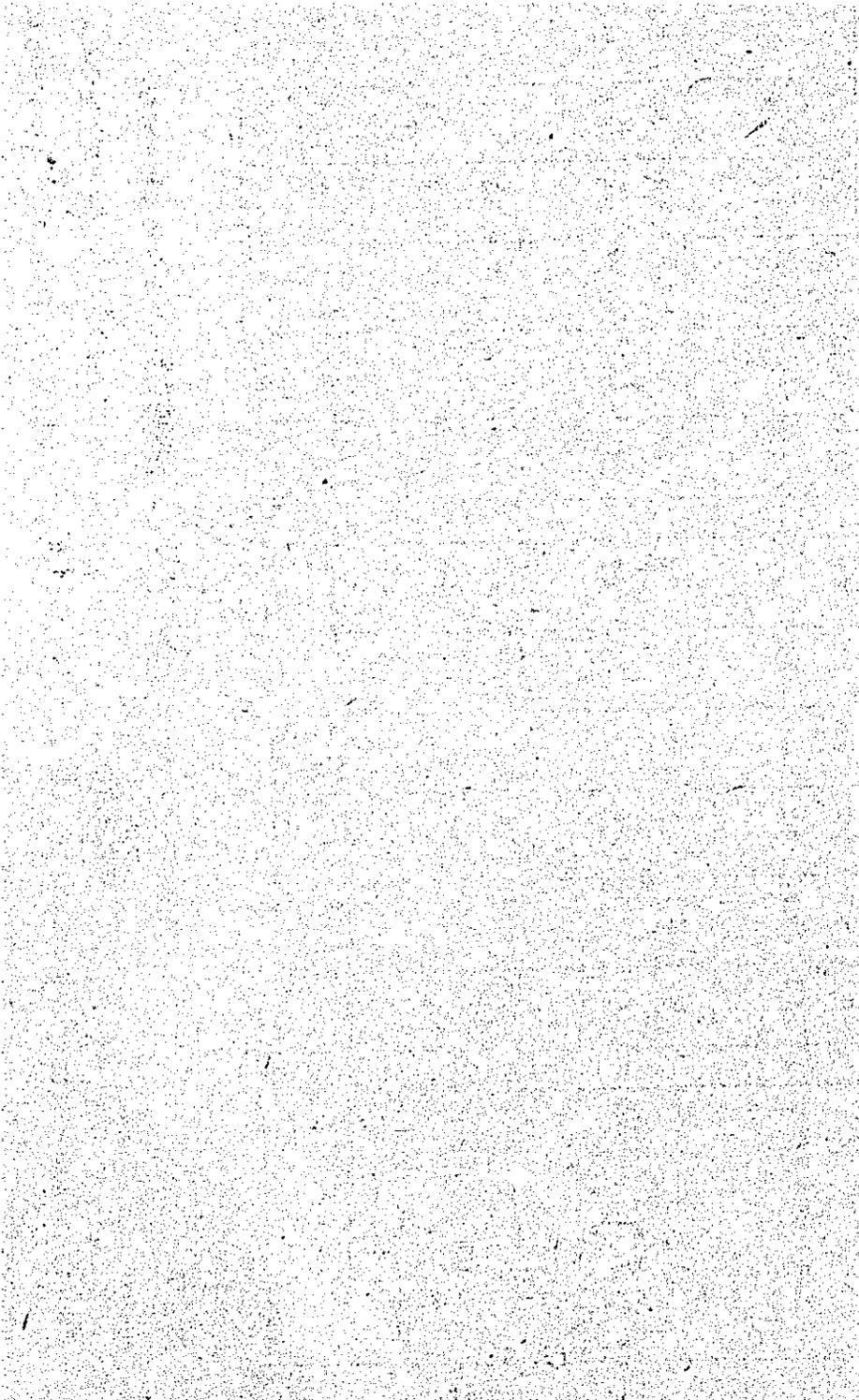
2 カン詰肉を含む。 2 1960以降アラスカ、ハワイを含む。

3 FOREIGN AGRICULTURE 1960以降アラスカ、ハワイを 3 1年の終り6月30日。 4 1年の終

CIRCULAR 含む。 り9月30日。

4 1年の終り、6月30日 - 全食肉消費に含まれる。

5 1年の終り、9月30日



第7節世界の食肉生産 (FAO:YEAR BOOK 1967)

単位: 1000トン

	1948-52	1952-56	1962	63	64	65	66
B 牛肉, 若牛肉	20384	24294	30801	32342	32505	33077	34582
M ラムとマトン	3920	4561	5972	5938	5924	5965	5965
P 豚肉	16220	20505	29785	39373	30119	31516	32178
合計	40524	49360	66558	68653	68548	70558	72725

食-肉生産

単位:1000トン

	1948-52	52-56	62	63	64	65	66	
歐洲	B	4191	5314	7545	7674	7302	7216	7634
	M	635	794	1015	968	1001	1017	1081
	P	5021	6965	9146	9079	9594	10389	10282
	計	9867	13073	17709	17721	17897	18622	18997
北米	B	5297	6957	8129	8629	9633	9914	10287
	M	299	342	383	363	337	307	306
	P	5318	5269	5818	6091	6167	5522	5610
	計	10914	12568	14330	15083	16137	15743	16203
ラテンアメリカ	B	4711	4893	6027	6323	5900	5950	6233
	M	400	420	408	397	385	441	460
	P	895	1022	1329	1330	1339	1423	1518
	計	6006	6335	7764	8050	7624	7814	8211

食肉生産

単位：1000トン

	1948-52	52-56	62	63	64	65	66
B	359	463	623	628	622	633	655
M	417	481	693	694	688	698	705
P	6	6	9	10	8	8	9
計	782	950	1325	1332	1318	1339	1369
B	855	933	1047	1115	1163	1149	1096
M	418	423	500	508	515	520	521
P	528	764	1276	1263	1284	1388	1652
計	1801	2120	2823	2886	2962	3057	3269
B	1100	1170	1524	1540	1570	1610	1647
M	359	410	514	511	528	533	544
P	121	122	143	144	147	149	1150
計	1580	1711	2181	2195	2254	2292	2341

食肉生産

単位：1000斤

	1948-52	52-56	62	63	64	65	66	
大洋洲	B	818	963	1218	1303	1321	1226	1178
	M	656	733	1079	1062	1088	1089	1059
	P	128	131	156	156	169	180	182
	計	1602	1827	2453	2521	2578	2495	2419
(中国本土) 推定	B	1328	1736	1900	1950	1950	2050	2100
	M	220	352	530	540	540	550	550
	P	3199	4425	8900	9100	9300	9350	9400
	計	4747	6513	11330	11590	11790	11950	12050
ノ 連	B	1726	1855	2785	3180	3035	3329	3752
	M	494	604	850	895	842	810	739
	P	1002	1798	3008	3200	2111	3107	3375
	計	3222	4257	6643	7275	5988	7246	7866

ベーコンの価格の推移 (FAO)

U・Sセント/キロ

	卸 価 格		輸 出 価 格 デンマーク	輸 入 価 格 英 国	
	英 国	アメリカ		デンマークより	ポーランドより
1950		97.0	60.2		
51		102.7	66.3		
52		95.7	71.7		
53		124.0	68.4		
54		131.4	64.4	79.2	
55		93.5	64.4	75.8	
56		77.2	72.8	85.4	
57	75.8	105.4	67.5	78.2	73.5
58	79.2	112.1	69.1	81.1	75.4
59	76.8	81.6	67.0	78.9	74.8
60	76.1	99.4	68.3	78.1	71.9
61	69.7	117.5	65.4	72.2	67.8
62	67.5	114.2	66.2	71.5	63.8
63	73.8	104.3	71.5	76.6	71.3
64	78.3	106.0	76.7	81.9	75.8
65	74.8	135.4	72.7	71.8	71.4
66	87.8	153.2	83.4	88.9	83.0

牛肉（屠体）価格の推移

USセント/キロ

	卸 価 格		輸 入
	オーストラリア	フランス	英 国 アルゼンチン カット
1950	20.4	58.3	40.5
51	26.9	77.1	44.6
52	32.4	80.9	56.1
53	31.0	67.4	62.9
54	35.2	66.0	67.1
55	31.6	73.4	72.8
56	30.2	85.1	57.4
57	32.8	84.6	61.5
58	38.5	94.2	65.6
59	47.7	79.8	72.3
60	50.6	84.7	73.6
61	43.8	84.7	68.2
62	38.6	92.4	71.4
63	43.2	99.0	66.6
64	48.2	114.0	84.1
65	54.0	116.7	90.2
66	60.3	118.1	84.9

羊肉（屠体）価格の推移

U 8 セント / キロ

	卸 価 格		
	オーストラリア	フランス	英 国
1950	32.3	96.3	37.9
51	45.9	122.0	42.5
52	41.4	127.1	56.0
53	52.5	129.1	61.7
54	47.5	144.6	65.1
55	50.5	147.7	65.3
56	55.6	150.6	64.6
57	52.0	138.9	68.9
58	42.2	147.0	62.9
59	39.8	115.7	54.1
60	46.1	130.0	64.6
61	40.3	142.4	53.0
62	42.1	158.2	60.1
63	46.1	177.4	61.6
64	49.2	170.8	69.3
65	59.1	175.4	71.9
66	47.4	187.9	66.8

豚肉（屠体）の価格推移

USセント/キロ

	卸 価 格	
	オーストラリア	アイルランド
1950	36.6	53.6
51	45.1	67.8
52	55.7	70.4
53	61.1	70.7
54	50.2	62.2
55	50.2	62.1
56	61.7	63.6
57	55.5	61.7
58	51.7	62.8
59	61.9	64.9
60	60.1	63.0
61	49.2	63.5
62	53.8	62.6
63	60.2	63.0
64	66.4	64.9
65	63.7	65.9
66	64.0	69.4